

---

# 長春宮夜想奇譚

百日紅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

長春宮夜想奇譚

### 【Nコード】

N3957R

### 【作者名】

百日紅

### 【あらすじ】

宛紀国を支える一の臣下。大貴族にして大將軍・王懿。

文武両道・眉目秀麗・頭脳明晰、そして宛紀屈指の名門という家柄。夫としてこれ以上望むべくない男の下へ、乞われて嫁いだこれまた名門出身の少女・郭青霞。

周囲の心配をよそに強引な婚姻であったにもかかわらず、二人は幸せな日々を過す。

だが、それも束の間。王懿の幸せを妬んだ彼の従兄弟でもある若き皇帝が、少女を無理矢理後宮へと召してしまう。

女達の野望と愛憎渦巻く後宮で、青霞が見たものは・・・。

## 登場人物紹介と設定（前書き）

読みやすくなるかどうかは、微妙。一部途中あたりからチェックしてみるといい・かな。

## 登場人物紹介と設定

人物紹介 （年齢は物語開始時のものです）

郭青霞<sup>かくせい</sup>16歳

本編のヒロイン。

都一と謳われた美貌の母に似て、本人もかなりの美少女。だが、箱入り娘ゆえの世間知らずなおっとりタイプ。なため本人にその自覚はあまりない。

宛紀国大將軍・王懿の正室。名家の出身で両親の愛情を一身に受けて育った深窓の姫君。実は箏の名手でもある。

申し分のない相手に嫁ぎ、何の苦もない幸せな一生を送る筈だったがその美貌ゆえに・・・。

王懿<sup>おうい</sup>28歳 字は季圭<sup>きけい</sup>

宛紀でも指折りの名門、王家の嫡子にして皇帝の信頼も厚い大將軍。青霞の夫。冷酷だが妻は溺愛している。

武人というより文人としての能力に秀でてるのは自他共に認める事実だが、有事における彼の鬼才振りに代わる者がいないため軍事部門の最高位に。

「凍える月」に喩えられる、冴え冴えとした近寄りがたい白皙の美貌の持ち主。

敵にも味方にも容赦のない物言いはかなり誤解されやすく敵を作りやすい。だが、度重なる征戦を率いてきたため、宛紀国軍部からの信頼は厚い。

実は皇帝・宋瑛とは母方の従兄弟という間柄。

宋瑛<sup>そう えい</sup>24歳 字は子叡<sup>しえい</sup>

宛紀国の若き皇帝。

幼い頃から周囲による権力闘争に巻き込まれ、親兄弟との深い確執からかなり屈折した性格に。

君主としての能力は極めて高く文武両道の名君。

しかし基本的に誰も信用していないため、一度切り捨てた者にはどこまでも非情な仕打ちを平気で言うという、冷酷な一面もある。

王懿とは母方の従兄弟という血縁関係があるせいか、その秀麗な美貌は実の弟よりも年長の従兄弟に似ていると後宮女官たちのもっぱらの噂である。

長年、宋家の政敵であった張家を滅ぼした際、張家総帥の正室であった甄夫人を見初め強引に自分の妻としたという経歴を持つ。

甄婉容<sup>しん えんよう</sup>28歳

宋瑛の正妻。宋瑛が戴冠した後は甄皇后あるいは甄后と呼ばれることが多い。

洛陽（宛紀の帝都）随一の美女の誉れ高い、才色兼備の女性。

もとは宋瑛の父である武帝が滅ぼした名家・張氏の妻だったが、宋瑛に見初められ宛紀の皇后に。

宋瑛との間に息子がいるが、いまだ立太されることもなく夫婦間の関係も冷え切っている。

この物語における後宮女官の序列

皇后＞貴妃＞淑妃＞徳妃＞賢妃＞昭儀＞昭容＞昭媛＞貴人＞美人＞才人＞姫＞＞上位女官＞＞＞下級女官

皇后と貴妃は別格。淑妃、徳妃、賢妃はほぼ同列。  
宋瑛の後宮においては、昭儀、昭容、昭媛位の女官を置くことはなかったため、貴人位が淑妃のすぐ下位にあることになります。

この序列の下にはさらに下級女官がおり、上位の夫人達に仕え皇帝の目に留まる日を夢見たりするわけです。

国政上の皇帝側近の階級は以下になります。

文官

太傅・・・・・・・・皇帝の師。実質の名誉職。  
丞相・・・・・・・・宰相。文官の最高位。

尚書令

門下侍中

中書令

武官

大將軍・・・・軍事部門の最高位

驃騎將軍

車騎將軍

衛將軍

蛇足

どちらかというと内政に優れた王懿は本来であれば丞相になってもおかしくはないが、そうすると軍事部門を統括するに足る人物がいないため、やむなく内政は皇帝である宋瑛が仕切っている状態。

また、あまりに早い栄達を妬む他の貴族たちの牽制する意味もあったりする。

基本的に宋瑛は能力第一主義の人なので、身分が高くてもそれを鼻にかけるだけの無能な人間は大嫌い。下手なことをするとこういった輩は普通に辺境の地へ飛ばされる。（身内にも容赦ないので、当然のように外戚、その他にも一切の情けはかけない。実弟への仕打ちでその冷酷さは証明済み。）

貴族たちが皇帝の前で借りてきた猫のように萎縮し大人しくなるのは、こういった経緯もある。



## 序

数多の英雄が現れては武勇知略を人々の記憶に刻み付けていづこへと消えてゆく、

伝説の時代は終わった。

この国はこれから、どうなるのだろうか？

私は私なりに国と民が少しでも長らく安らかに過せるよう腐心したつもりだが。

先人の血と汗と涙によって築かれたこの太平は、続くだろうか？

それとも後世の民は、私を恨むだろうか？

されど、死に逝く私にはこの国の為にできることは最早ない。

皇帝としての私の役割は終わったのだ。

こうして病床に就き、あれほど渴望した己の自由になる時間を手に入れてみると。

おかしなことに、私の思考は過去にばかり囚われる。

残る時間も少ない身であれば、一刻たりとも貴重で。せめて後世になにか残したいと願うも。

想いを巡らせば、結局行き着くのはあの方のところ。

ああ。

あの春風のように暖かな微笑みを、梨花のごとき繊細な美しさを、水琴の響きを思わせる愛らしい声を、仄かに漂う甘く優美な香りを。

今でも鮮明に憶えている。

かの人に対する自分の「想い」が、「恋」なのだ。そのことに気付くのにには彼女を失ってから幾ばくかの時が必要だった。

幸せな記憶もあるがそれはほんの数えるほどで、辛い思い出のほうが遥かに多い。

それでも、「恋」を抱いたまま逝ける自分は幸せなのだろう。

最早腕さえも満足に動かせなくなった役立たずの身体を寝台に置き去りにして、私の魂は自由に千里を駆ける。

いっそのまま、あの輝いていた日々に戻ることができたなら。

華に生まれ花と散ったあの人を。

一度でいい。

この腕で思い切り抱き締めるのに。

――――「明帝回想録」より抜粋

## 第一章 夢の終わり 1

宛紀国・国都、洛陽。

大陸の覇を競う長き戦いにはば決着をつけた……後に「武帝」の称号で呼ばれることになる偉大な王・宋操がかつて敗走したという因縁の地。

宛紀王・宋操の死を受けて跡を継いだ嫡男・宋瑛によって許昌から遷都されたこの都は、長らく眞王朝の帝都として栄えた壮大な古都だった。

洛陽。

皇帝の住まう場所。遙か西の彼方から訪れた異国の商人たちがもたらす貴重な知識と文化が融合し、爛熟と頹廢の美しさを漂わせた麗しい都。誰もが焦がれた憧れの地。

傲慢なほど高らかに花開いた芸術と文明。洗練さの裏に隠されたもう一つの顔……人々の欲望がもたらす壮絶な悲喜劇の舞台でもあった呪われた地。

眞王朝の衰退とともに虚飾に塗れた威光は翳み、戦乱の世に突入すると程なくして、激しい戦火に曝され、最後にはそこに住まう民ごとと無残に焼き払われ「華の都」の地位から引き摺り下ろされた悲劇の都。

だが一度は死に絶えたその古都は、宋瑛により眞王朝に終止符を打つ一環として再び国都としての地位を得、今また新たな王朝の心臓として息を吹き返そうとしていた。

その華麗なる復活劇は、さながら時代は違えども幾度も繰り返された栄枯盛衰の物語そのものに似て。

「絢爛に咲き誇るのであれば、いつかはまた散ろう。」

そう呟く者がいたとしても、今はまだ終焉の影に怯える日は遠く・・・。

\*\*\*

宛紀国大將軍・王懿邸。

遷都にともない、宛紀の重鎮として王懿もまたこの新たな都に本邸を構えた。

大將軍という軍事部門の最高指導者であり国内でも屈指の名家の出でもある王懿の屋敷は、しかし華美を嫌う主の意図を汲んで、無駄な装飾を極力抑えた瀟洒で趣深いものだった。

勿論、軍事部門の最高位にある人物の邸宅であるから、その立場上けして質素にすぎるといえることはないのだが。

建築当初は、その地位にふさわしいもつと荘厳で豪華な屋敷を、と進言した側近もいたが、王懿の無言の冷たい視線の前に一蹴された。

卓越した才をかわれて若くして官職の最高位まで上り詰めた王懿は、明晰な頭脳の持ち主であると同時に非常に気難しく極めて付き合いたい人物であるということでも名を馳せていた。

「大將軍は見目麗しく才知に富むも、その奇異な性格は主をも辟易さす。」

そんな噂が市井の間にまでもっともらしく流れているのだから、様々な意味で彼の名声は広く轟いているといえるのかもしれない。

また、王懿は傍近くに仕える者をその出自から調べ上げ、性格・能力すべてにおいて厳選された有能な人物ばかりで固め、他の大貴族のように多くの使用人を雇うなどということはしなかった。

その結果、広大な屋敷は気品と静寂――加えて、選ばれた使用人たちにとってはかなりの緊張感と充実感が――に満たされた都でも屈指の洗練された場所となった。

このように洛陽に本邸を移して以来、厳格な静けさを頑なに守っていた王懿邸であるが、ある日を境にその様相を一変して周囲を驚かせた。

水鏡に墨を落したような冷たい静謐に、穏やかで華やかな彩りが加わったのは、遷都が行われて最初の春が訪れた頃である。

「許昌のお義母様から、とても綺麗な絹布をたくさんいただきました。」

宮廷から帰宅した王懿を初々しい仕草で出迎えた後、着替えを済ませ一息ついた彼に嬉しそうにそう話を切り出したのは、先日迎えたばかりの正室・郭夫人だった。

綻びかけた梨花の蕾のように瑞々しい若さと清楚な美しさをもつ、王懿に嫁いだから「郭夫人」と呼ばれるようになったこのあどけなさすら残す少女の名は、郭青霞。

眞王朝において太傅（皇帝の教師にして文官の最高位だが、実の伴わない名誉職）を幾人も輩出した名門貴族、郭家の一人娘である。

この時代、住まう者自らが魑魅魍魎と化す伏魔殿（宮廷）に仕える者にとって、権力の均衡を崩しかねない有力貴族同士の婚姻は極めて憂慮すべきことだった。

なぜなら、下克上が日常茶飯事のように起きる戦乱の世にあって、有力者同士が組んで国主以上の力を持って国政を牛耳ることなど、ごくありふれた話だったからである。

まして、王懿はその中でも屈指の名門・王家の次期家長である。と同時に宛紀国王・宋瑛の従兄であり腹心という最も権力に近い場所にいるのである。

彼の卓越した政治力、軍事において発揮される鬼才は周知の事実であり、南西の隣国・愈<sup>ゆな</sup>南の名宰相・関寧に対抗するためには彼は欠くことのできない人物だった。

その彼が宛紀国内で持つ当然ながら権力は強大で、ゆえに彼がもし同等以上の有力貴族と婚姻をもって縁戚関係を持つことになるとしたら、それは宋家を担ぐ者達にとっては

大いなる脅威となり彼らはさぞ頭を悩ませることになっただろう。

それだけ、大貴族の婚姻とは複雑で極めて政治的な問題であった。

しかし、幸か不幸か、これまで王懿は側室を置くことはあっても正室を迎えることはなかった。

勿論、彼の権勢にあやかりたいと望む者たちはこぞって我が娘を妻にと話しを持ちかけたが、当の本人にとってそのような駆け引きは徒労以外の何者でもなく、どんなに「美しい」と評判の娘が相手でも「くだらぬことに耳を貸す暇はない」と冷たく一蹴するのみであった。

下手に貴族の娘を娶って、痛くもない腹を探られるのも面倒、という考えもあったであろうが、それ以上に王懿という人物は仕事以外に関する興味が極めて薄かったのだ。

戯れに女を抱くことはあっても、情を移す事はけしてない。

少し目線をくれれば身分ある気位の高い女官でも喜んで身を差し出すであろう端正な容姿と権力、財力を持ちながら、こと奥向きな事案に関しては、残酷なまでに淡泊で即物的。  
それが、王季圭という男であった。

それゆえに、女に対しては一切浮いた話のなかった男が自ら望んで正室を迎えるという話が事実として本人の口から直接国王に奏上された時には、彼を知る宮廷の誰もが驚いた。



しかも相手は、まだ16になったばかりだという。彼より一回り以上も年下の娘である。

学者肌の多い家系で文官の要職に就く人材を多々抱える一族ゆえに、その直系である少女もまた相当に利発で、その上かつては都一の美女の誉れ高かった母親に似た美貌の持ち主だという。

しかし、彼女は掌中の珠を溺愛する両親によって外の風に当てぬよう大切に大切に育てられた、いわば筋金入りの温室の花である。そのような世間知らずの娘にあの煮ても焼いても食えぬ鬼將軍・王懿の妻が務まるのか。

王懿の人となりを知るもの達が青霞の噂を聞くに及ぶやこそつてそのような危惧を抱くのは、無理からぬことであつた。

しかし、奇妙なことに大貴族同士のこの婚姻に祝福を告げるものもあつても、異を唱える者はいなかつた。

それもその筈。郭家は眞王朝最盛期にあつては指折りの名家に挙げられる有力貴族であつたが、その後輩出されるのは何故か学者肌の人物が多く、学術方面には秀でているものの政治方面はさっぱりという家系だったので、

斜陽の眞王朝から宋家へと主を替えたまではよかつたが、結局はその後政争に破れ体よく「太傅」の位に追い遣られたというのが実情の負け組み貴族。

要するに、「名門」ではあるが権力とはほど遠い位置にある。それが郭氏だった。

また、現郭家の当主である郭永という人物は立場上宋瑛の「太傅」ということにはなっているが、すでに一人立ちし誰の後盾も必要

としない宋瑛にとって「太傅」とはあってないような役職であり、事実、郭永がその職に就いてから宮廷で太傅としての助言を宋瑛から求められることは一度もなかった。

だが、そんな現状に不満を漏らすこともなく、むしろ権力闘争に関わらぬことに安堵し家でのんびりと妻と娘とともに書画や詩歌に没頭していた郭永は野心というものをほとんど持たない人物であった。

そういった彼の人格もまた、この度の王家との婚姻に他の貴族たちの敵愾心を抱かせない重要な要素となっていた。

ゆえに、宋瑛に重用される王懿を筆頭に着実に権勢を伸ばす王家と有名無実の名門・郭家との縁組は、時の権力構造の均衡から見てもある意味理想的な組み合わせだったのである。

そんな周囲の思惑はともあれ、この時代には極めて珍しく当事者の合意のもとで行われた華燭の典は三昼夜続き、大陸において並ぶものなき威光を手にした宛紀国の勢いを象徴するかのように一際豪勢で華やかなものだったという。

宝石と刺繍でずっしりと重い婚礼衣装に包まれた花嫁の白く華奢な手をとった際に見せた王懿の薄い微笑みは、天変地異の前触れのような扱いで今でも宮廷での語り草となっている。

\*\*\*

「ほう。これは見事な絹だな。……この色はそなたに似合う。すぐに仕立てさせるがいい。」

うららかな春の日差しに誘われるように穏やかな風が梨の白い花びらを散らす、手入れの行き届いた広い中庭。

その隅に植えられた梅の枝に見知らぬ小鳥がとまり可愛らしく囁いている声を聴きながら、新婚の二人は庭に面した広い私室で旧国都にいる夫の母親からの贈り物を大きな黒檀の卓の上一杯に広げ楽しそうに吟味していた。

男子ばかりを産んだ王懿の実母は、歳若い青霞を気に入り、実の娘のように可愛がった。

青霞を娶る事が正式に決まった後、残る最大の問題として、王懿には内心を揉んでいた事柄があった。

それは、おそらく世の中の大半の夫が直面するであろう永遠の課題。――嫁姑問題である。

両親に壊れ物を扱うような丁重さで大切にされ何の苦労もなく育てられた青霞が、果たして5人の男子を育て上げた孟母と上手くやってゆけるかどうか。こればかりは、いくら宮廷および戦場で異能を発揮し敵を恐怖のどん底に陥れる天才にもどうにもできないことだった。

結局、彼の心配は杞憂……まったくの無駄に終るのだが、母親の予

想外の反応は王懿にとって嬉しい誤算となった。

「あら、これは季圭様にお似合いですわ。この薄絹なら夏衣に調度良いですわね。……どれも美しい布ばかりで、選ぶのに迷ってしまいます。」

艶やかな光沢を放つ滑らかな桔梗色の絹を手には、小首を傾げて何気なく夫を見上げた新妻は、自分を見下ろす夫の、思いがけず優しい視線に気づくと恥ずかしそうに白い頬を上気させ俯いた。

つい最近まで、両親の元で夜風にすら当たらぬよう幾重もの透明な箱に入れられて育った少女にとって、自身の夫とはいえ父親以外これまで身近にいなかった成人の男へ接するのはまさに未知の領域であった。しかも正しい答えなど、誰も教えてはくれないのだ。

夫婦の契りを結んでからまだ幾らも経たぬ年上の夫との関係をどのような形にすればよいのか、青霞は手探りながらも必死で模索している最中なのである。

そんな幼い妻を、王懿は急がせることもなく彼女が新たな環境の中で自分の居場所を確立してゆくのを、鷹揚にだが細心の注意をはらって見守っているのだった。

この婚姻は、青霞を見初めた王懿が彼女を強く望んだことが切欠だ

という。

勿論、青霞を溺愛している父親・郭永はこの縁談を大いに喜んだ。娘の比類ない美貌と才知を知るにつけ、名ばかりの落ちぶれ貴族とはいえ下手な男にはやりたくないと思っていた郭永にとって、眉目秀麗で頭脳明晰しかも地位も権力もある王懿は、これ以上望むべくもない婿だった。

しかも、実家がそこその有力貴族にもかかわらず側室でもよいから己が娘を傍に置いてくれと頭を下げる者が少なくない程の立場であるにもかかわらず、我が娘を正妻として是が非でも娶りたいという。

この時代の女性は、正妻以外の側室は実家の力がどんなに強くとも子を成さねばその立場は非常に弱い。だからこそ、青霞を正室にという王懿の申し出は、愛娘の行く末を案じる郭永にとって涙が出るほど嬉しいことだった。

そして肝心の、当の本人である青霞は、突然降って湧いたような自身の結婚話に呆然としていた。

貴族の娘として生まれたからには、いずれは親の決めた相手のもとに嫁ぎ、妻として婚家と夫に尽くし子を成すのだらうということとは、頭の片隅でぼんやりと理解していた。

しかしいざ現実に結婚話が持ち上がったと、未知の世界に独り放り出される様で怖くて仕方がなかった。

相手は天下の宛紀王をも辟易させるほどの気難しいと噂の人物。敵にも味方にも容赦のない冷酷な性格だと、屋敷の奥深くに隠された

少女の耳にまでその在り様が届くほどの苛烈な男。

これ以上望むべくもない身分と権力を有しているとはいっても、実際に夫婦の契りを交わさなければならぬ少女にとっては、王懿という青年貴族に付属するあれこれよりも、その人となりの方が切実な問題だったのである。

いかに家柄や権勢に遜色なくとも、日々勢力を拡大し続ける宛紀軍の軍師として優れた手腕を発揮する彼の非情さを噂に聞くに付け、自分の意思など関係なく進んでゆく婚儀の話に不安と焦燥だけが空回りする日々。

それが、貴族の婚姻だと分かっているにしてもいざその局面に立たされてみると、やはり顔も知らぬ相手に嫁ぐという恐怖は想像を絶していた。

婚礼前夜。

華やぐ周囲の喧騒をよそに、青霞は自室で母親の胸に抱かれて泣いた。

震える少女の前に掲げられたのは、深紅の生地重金糸で鳳凰の刺繍が縫いこまれた見事な出来栄の花嫁衣裳。傍らに置かれた冠には少女が見たこともない美しい石が散りばめられ燭台の炎を受けて冷たくも目映い煌めきを放っていた。

夫となる人物から贈られるすべて。どれをとっても、自分に相応しいとは思えぬほど豪華で格調高く彼の人の権勢を顕すそれらは、ただ少女を怯えさせた。

だが、この名家の美しい少女を絶望のどん底に突き落としたのが王  
懿であれば、その恐怖を一掃したのもまた彼であった。

## 第一章 夢の終わり 1（後書き）

男性の名前は、基本 姓名と字あざながあります。  
親しい間柄では、字で呼ぶことが多いです。



## 第一章 夢の終わり 2

華燭の典を挙げたその夜。

結い上げていた長い黒髪を下ろし、純白の夜着に着替え主寝室で夫の訪れを待つ青霞の緊張は頂点に達していた。

そこに、侍女に導かれて音もなく開かれた扉からすると室内に入り、幾重にも連なった御簾と珠簾を優雅にかかげながら奥へと進み来る長身の男性の姿を見た瞬間、それまで身を強張らせていた青霞は、震え強張る手を隠そうと袖の中で必死で握り締め寝台の上で身を硬くして見知らぬ男が彼女の元へ辿り着くのを待った。

珠簾の音が夜闇の中でシャラシャラと揺れる音を響かせる中、寝台の傍近くに立った人物の気配と無言の圧力を感じ、青霞は血の気のひいた青白い顔をゆっくりと上げる。

婚礼の式の間ずっと花嫁は布を被りその素顔を夫以外の者に見せることは許されない。

従って、それが少女が夫の顔を初めて正面から目にした瞬間だった。

——容姿端麗とは聞いていたけれど、こんなに綺麗だなんて……。

それが、夫の容姿を初めて見た新妻の感想だった。

冠を取り、妻と同様豊かな黒髪を背に流した王大將軍は、青霞が思っていたよりもずっと若く美しかった。

男性に「美しい」という形容は相応しくないのかもしれないが、すっと通った鼻梁に薄い唇、綺麗に弧を描く柳眉の下には切れ長の瞳が鋭い眼光を放っている様はまさしく「冬の月」のごとく冴え冴えとした美貌と形容するにふさわしいものだった。

緊張を忘れ、思わず夫の容貌に見入ってしまった青霞は相手が仄かに苦笑を浮かべたことでようやく自分の失態に気づき、動転のあまり泣きそうになった。

「わ、わたし……ご、ごめんなさ……いえ、申し訳ありません。」

「謝る必要はない。私達は、今宵が初めての逢瀬なのだから。相手を知りたいと思う心は同じぞ。」

大きな瞳に今にも零れ落ちそうなほど涙を溜めて白い夜着の袖で顔を隠そうとする少女の腕をやりわり掴み、そのままそっと自らの胸へ引き寄せ、王懿は憐れなほど緊張し混乱している少女を宥めた。

彼は、まだ幼さを残す妻がいかなる心理状態にあるかよく把握していた。

心も身体も準備のできていない少女を、真綿でくるむようにして囲っていた郭家の両親の元から引き剥がすように連れ去ったのだから。

何もかもが、常の自分では有り得ないほど強引であったことは彼自身が一番よく理解している。

初めて見た瞬間、どうしても欲しいと思った女。

そんな感情を誰かに抱いたのも初めてであれば、相手の意向を汲みもせず例え結果として無理矢理という形になろうとも手に入れたいと自ら画策し実行に移すのも初めてだった。

外界の荒んだ空気に触れることなく、ひたすら純粹無垢に育てられた少女は、春の朧月のように儚げな容姿もさることながら、利発でありながらけして奢ることのない控えめで素直な性質でことさら彼を惹き付けた。

それは少女が持つ謙虚さや誠実で素直という美德が、王懿にないものばかりだったからかもしれない。

この柔らかな雰囲気を纏う春の化身のような少女は、傍らにいないだけで疲れた自分を癒し自分にとってなくてはならない存在になるだろう。

王懿は、少女を見た瞬間、直感でそう思った。

だからこそ、自分の一存で強引に押し切った婚儀だったが、自分に出来る限り正妻として迎えた少女を大切にしようと王懿なりに決意していたのである。

なぜなら、少女はまだ自分のことを何も知らない。

青年が一方的に少女を見初め、彼女の意思すら問うことなく手に入れた負い目を青年は逸る心を抑え切れなかった自嘲とともにきちんと自覚していた。

だから、心を委ねてくれるのはゆっくりでいい。

少女の両親がそうしていたように、自分もできるだけ優しくしたい。

その想いが、彼の不器用な微笑みとそっと絹糸のような黒髪をなぜる手の温かさを通して少女に伝わったのか、ようやく青霞は身体の手を抜いた。

そして、彼女にとって新たな未知の世界へと踏み出すべく、勇気を振り絞って共に歩んでゆくことを定められた伴侶の骨ばっているが爪の先まで整った手に自らの華奢な手をおずおずと重ねたのである。

少女を怯えさせないようゆっくりと寝台へ重なるように沈む二人。

そのまま、彼らは優しい夜の帳の中で本当の夫婦になったのだった。

＊＊

「そういえば、一体、季圭様はいつわたくしを見つけられたのです？」

広い床を覆わんばかりに部屋じゅうに積み上げられた華麗な布を侍女達に下げさせ、薰り高い茶を手ずから湯呑みに注ぎながら、青霞は傍らに座る夫に尋ねた。

無事、華燭の典を終え名実ともに王懿の正室となった青霞は両親にも勝る夫の愛に包まれて何不自由ない生活を送っていたが、時折、この話題を持ち出しては夫を困らせていた。

新たに迎える正室はまだ幼く、家長の妻として家を仕切らせる苦勞を背負わせるにはまだ早いとして、青霞のためにあえて側室や親兄弟を許昌に置いてきたのだという話を、後から気心の知れた王家古参の侍女に聞き、王懿に見初められた己の幸運を改めて感謝し夫への思慕を募らせた青霞であったが、どうしても腑に落ちないことが一つだけあった。

それが、先程彼女が口にした「出会い」の件である。

何故か、王懿はこの真相を明かすことを拒否した。

彼女の言う事であれば大抵のことは容易く聞き入れる彼であったが、この一点においては頑固で、どんなに青霞が問い詰めても口を割ろうとはせずのらりくらりとかわされてお仕舞い、なのである。

そのことを青霞は少しだけ不満に思っていた。

それは、歳の差もさることながら、幼い頃から神童と呼ばれ英才教育によって培われた膨大な知識とそれを使いこなす明晰な頭脳を持つ彼と、世間知らずの自分では最初から頭の出来に天と地ほどのひらきがあると判っていても、いつも簡単に答えを誤魔化してしまう彼に自分が子ども扱いされているという憤りでもあった。

「もう、良いではないか。人には聞かれたくないことが一つや二つあるもの。……私達はこうして縁あって夫婦となり、上手くいつているのだから、それほど初めにこだわる必要はあるまい。」

湯呑みを手にすると、少々辟易したように眉を顰めた夫を横目に、青霞は溜息をついた。

彼女とて、夫を困らせたいわけではない。

ただ、夫だけが自分を知っていたという事実が、何となく不公平なようにおもしろくないのだ。

その感情が、「恋」というものに根ざしているということに幼い彼女は気づいていない。

勿論、彼女の夫はそんな少女の感情の変化に目敏く気づき、自分の想いがけて一方通行ではないことに喜びを感じていたが、生来の天邪鬼が災いして取り澄ました表情しかできずにいた。

そうはいっても、幼妻との一時は宛紀国の命運を左右する立場にある王懿にとって、ひどく心の安らぐかけがえのない時間であることに違いはなく、二人で過す時の彼は彼の長年の知己ですら見ることのなかった穏やかな表情で寛いでいるのだった。

そんな風に、微妙なすれ違いはあるものの、二人の夫婦生活は当初の戸惑いが嘘のように万事円満であり、あまりに過ぎた幸せに迷信など信じない王懿でさえ、ふと、時折不安を覚えるほどであった。

何も知らない青霞は、夫の秀麗な顔に時折よぎる陰に気付きながらも、きつと大將軍としての務め上のためだろうと別段不思議に思うことはなかった。（宛紀は大陸の覇者であるものの、いまだ敵国が完全に下つてない以上、いつ戦火が勃発してもおかしくはないという現状なのだから）

少女は、この幸せがずっと続くのだと信じて疑わなかった。

激務の夫を助け王家の家長の妻として一族に尽くし、そうして、やがて彼との間に授かるであろう子供たちと、いつかこんな麗らかな

春の陽射しの下でお茶菓子をつまみながら笑い合うだろう。

そんな日を夢見ながら、少女は傍らの夫に無邪気に微笑みかけた。



## 第一章 夢の終わり 3

王懿と青霞が新婚の甘い幸せを誰憚ることなく全身全霊で享受していた頃。

建築技術の粋を極めた荘厳な王宮の奥深くでは、眞王朝最後の皇帝となる献帝から宛紀王・宋瑛への帝位の禅譲を恙無く行うための準備が着々と進められていた。

前・宛紀王である宋操は、眞王朝の実質的最高官位である丞相（名目上の最高官位は太傅）まで上り詰めたものの、皇帝位の剥奪までは求めなかった。

乱世の奸雄と呼ばれた宋操も、後世に「篡奪者」として名を残すことを躊躇ったのである。

巡ってその付けは、後継者である宋瑛に父親から残された真っ先になさなければならぬ最大の負の遺産として彼の双肩にのしかかった。

だが、父親と違い宋瑛は400年続いた眞王朝に終止符を打つことに何の痛痒も感じない。

もとより父・宋操が、特に目をかけ可愛がっていた同母弟の宋植ではなく宋瑛を後継者として指名したのは、結局は感性に秀でた宋植よりも、満遍なくすべてをこなすことのできる冷徹にして明晰果断

な宋瑛の方が容易く帝位篡奪を成し遂げるだろうと計算してのことだということを宋瑛は痛いほど理解していた。

だからこそ彼は、余計に父や弟が・・・・・・何もかもが憎かった。

長年、自分を嫡子として扱うどころか冷たくあしらうばかりで、父親としての愛情をひたすら弟達ばかりに注いでおきながら。

最後の最後に「篡奪者」の汚名を着たくない一心で自分に跡目を継がせた父。

そして、兄を支えるべき立場にありながら、父の愛情と庇護を良いことに実兄である自分をないがしろにし、あまつさえ堂々と義姉にあたる甄夫人（宋瑛の正室）に想いを寄せ、事あるごとに彼女に堂々と愛を囁いた、文才しかない恥知らずの実弟。

実母もまた、弟達に冷たく当たったとして彼を嫌い、事ある度に彼を非難し、洛陽への遷都の際も

頑として許昌を離れようとはしなかった。

特に、宛紀の後継者として実権を握ってすぐに弟である宋植を辺境の地へ放逐したことが彼女にはどうしても受け入れ難かったのである。

・・・・・・宋瑛が宋植を都から追い遣るまでの経緯を知ろうともせず。彼が、その決断に至るまでの間、

どれほどの屈辱と辛酸を味わったのかなどまるで関係がないと謂わんばかりに。

そうして、宋瑛と実母・丁夫人との確執は決定的となった。

偉大なる霸王・宋操の息子として、宛紀国の新王として華々しい功績を次々と挙げてゆく宋瑛は、一人の人間としてはあまりにも孤独だった。

父の出鼻を挫きたい一念ですでに他人の室であったものを強引に手に入れた、年上であるが「傾城」の美貌を持つ気位の高い妻は、長年連れ添ったにもかかわらずいつまでたっても取り澄ました態度で夫に心を許す様子もなく。

両親から十分な愛情を注がれた記憶を持たない青年は、妻との間に儲けた息子にさえ率直な感情を抱くことができなくなっていた。

長い間、血縁者の愛情に恵まれなかった彼は、英才教育の成果か知識に富み機転も利く英邁な君主であったが、その心は深く病んでいた。

彼にとっての最大の不幸は、その尋常ならざる歪みを正面から受け止める人間がいなかったことなのかもしれない。

「そういえば、季圭が随分と若い正室を迎えたそうだが。」

執務の合間、目を通した書簡に印を押しながら宋瑛は傍らに立つ文官に、興味はないが一応聞いておこうか、といういかにも高慢な態度で話題をふった。

「は。王大將軍様の御正室は郭家の令嬢だそうです。」

恭しく返答された内容は、すでに宋瑛が把握していた事実であり、実際、母方の従兄でもある王懿自身の口から直接報告を受けていた通りのものだったので彼にとっては取り立てて目新しい情報ではなかった。

だが、王の前で緊張しきっていた文官が勢いのまま喋り続けた言葉は宋瑛の興味を大いに引いた。

「この縁談は、王大將軍自らが強く望まれて決まったそうです。なにしろ、御令嬢の母君である陶夫人といえば、甄夫人がこちらにおいでになる前までは『洛陽一の美女』と評判でしたから。しかも、郭氏は有名な学者様でもありますので、その御息女であればさぞかし王大將軍をも満足させる教養と容色の持ち主であろうと、もっぱらの噂でございます。」

「ほう。季圭が自ら妻にと望んだ女か。……………これはおもしろい。」

ぞっとするほど伶俐な美貌に冷たい微笑が浮かぶのを目にして、文官は喋りすぎたと後悔した。

彼の言葉が主君の郭夫人への好奇心を悪戯に掻き立ててしまったのは間違いない。

——このまま、何事もなければ良いが。

慌てて口を噤んだ文官は、冷たい汗が背中をつたうのを感じつつ必要な書簡を掻き集め小脇に抱えながら主君に向かい深く拱手をするという器用な芸当を披露した後、すぐに踵を返すと、宛紀王の執務室を文字通り飛ぶような勢いで後にした。

「愛する女、か。愛などどうせすぐに碎けて塵になる……くだらんな。」

執務室に一人残された宋瑛は、薄暗くなった室内で低く呟いた。

「誰も、幸せになどさせぬよ。……お前だとして、このまま順風満帆な人生を送れるとは思ってはおるまい？まして余とお前は実の兄弟よりも似ているというのに。……お前だけ幸せを掴むなど、不公平ではないか。なあ、季圭。」

孤高の君主が漏らした仄暗い笑みに、澱んだ空気が、ゆらり、と揺れた。

少女が得た幸せは、薄氷のごとく脆く儚いものだったと知るのは、宛紀王が眞朝最後の皇帝より帝位を禅譲され宛紀の初代皇帝として即位して間もなくのことである。

\*\*\*

建安25年10月。

宋瑛は眞の献帝より帝位を禅譲され即位。その年を黄初と改元した。

眞王朝最後の皇帝、献帝は禅譲後山陽公と名乗りそのまま「前皇帝」としての処遇を受けることとなる。

その二人の娘も宋瑛の後宮にて「貴人」の位を賜り、新皇帝の側室として洛陽城に住まうことを許された。

五本爪の昇竜を中心に豪華にして繊細な刺繍が象徴するのは至高存在。

その黄金に輝く長袍を幾重も重ねられた長衣の上に纏い、宋家に代々伝わるという虹色の輝きを放つ宝珠を胸にかけ。腰に麒麟を描い

た螺鈿細工の鞘に納まる眞王朝開祖以来の秘宝だったという長剣を下げ、鳳凰の細工を精巧にしかもこれ以上なく美しく模った黄金の冠を被った宋瑛は、その高みから平伏する臣下たちを睥睨する傲慢で冷酷な視線ごと、あらゆる意味で「皇帝」だった。

これから、この麗しくも苛烈な若き皇帝が新たな国を造るのだ。いずれ皇帝は、必ずや先代からの悲願を・・・大陸を三分する忌々しい隣国、瀕死の「愈南」と「瀋」の息の根を止め、この広い大地を統一することで果たすだろう。

そうして、すでに片鱗を見せ始めている隠し持った鋭い爪と牙で幾重もの多難を切り裂き、「宛紀」という帝国を纏め上げるだろう。

宋瑛にはそれだけの器も才覚もあり、また内政も充実してきている今、宛紀は他二国を容易に圧倒するだけの兵力も国力もあった。

まるで生まれたときから至高の玉座に座ることを約されていたかのような、宋瑛の端整にして優雅、そしてまだ20代の青年だとは思えない落ち着き払った分別ある立ち居振る舞いに、幸運にしてこの晴れやかな即位の儀を目にすることのできた者達はこの新しい皇帝にあっけなく魅了された。

けして慈悲深い性質ではないが、物事を公正に判断することができ、かつ必要であれば誰もが躊躇う危険な賭けに打って出る度胸もある。このように優れた資質をもつ主であれば、どれほどこの国は栄えるであろう。

居並んだ臣下たちは己が国の輝かしい未来をそれぞれに思い描くのであった。

しかし、光があれば影があるように。

華々しく皇帝に即位した宋瑛に伴い、正室である甄夫人は皇后に立

后したがその息子である宋玲が太子として立てられることはなかった。

新皇帝・宋瑛がどのような思惑で宋玲の立太を先延ばししたのかは定かでない。

また、そのことを甄皇后がどのように思っているのかも、やはり謎のままであった。

冷たい光輝を放つ若き皇帝の傍ら、その威光に彩を添える大輪の牡丹のように艶やかな美貌の皇后の微笑み。

見るものを魅了せずにはいられない蠱惑的な眼差しの中に秘された、彼女の覚悟に、氣付いた者はいただろうか。

最高の贅と細工が凝らされた黄金の屏風の前。錦繡と煌めく王冠に身を包んだ若く美しい皇帝と皇后。

名立たる臣下たちから宛紀の誇る麗しい似合いの夫婦だと、二人を讃える祝辞と賛辞が途切れることなく降り注ぐ。

皇帝夫妻が並び立つ足元から伸びる影が、銀燭に押されるように大理石の冷たい床に黒く長く広がる。

先へ行くほどに離れる二人の影。

皇帝と皇后の孤独とその間に横たわる空虚が満たされることはけしでない。淡々と過ぎ行く時間は、二人の心を引き離すだけでしかなかった。



二人の間にできてしまった闇は、もう底などないかのようにな……。

\*\*\*\*

宋瑛が即位した翌4月、愈南の眞蔡もまた強引即位し「皇帝」を名乗った。

眞王室の流れを汲む自分こそ「眞王朝」の後継者にふさわしいというのが、その言い分である。

こうして天下に二人の皇帝が並立し、宋操亡き後しばしの平穏を保っていた世はにわかに騒がしくなり、再び戦乱の嵐が吹き荒れる危険な兆しを見せ始めていた。

大將軍・王懿に国都から遠く離れた宛紀第二の都、長安にて愈南の

北伐に備えるよう皇帝から勅命が下ったのは、それから間もなくのことである。

## 第一章 夢の終わり 3 (後書き)

そろそろ泥沼に突入・・・

## 第一章 夢の終わり 4

月も雲居に眠るように隠れる夜更け。

広い屋敷の最奥に位置する閨の中で、熱い吐息を交わし、しどけなく衣をはだけさせたまま睦み合う男女。

絡み合う二人のしなやかな四肢はどこまでも優美で、長い黒髪は衣擦れの音がする度にサラリと雪白の肌を滑る。

「長きに渡りそなたを都に一人置く事になるとは。……なんとも心許無いな……。」

いまだ閨事に慣れぬ風の、若い妻の華奢な肢体を組み敷きながら王懿はポツリと呟いた。

「大丈夫です。たった二月のことですもの。私は大將軍たる貴方の妻。お留守の間の護りくらい一人でも立派に務めてみせます。」

初めての夫の長期不在を間近に控え、内心の不安を振り払うように青霞はことさら明るく微笑んでみせる。

そんな妻の健気さに一層募る離れ難さを噛み締めながら可憐な面差しを愛しげに見つめると、王懿はそつと梅香の薫る少女のたおやかな肢体を抱き寄せた。

くゆる香が絡み合いそれがより一層、雅で趣深くそして忘れ難い想いを互いの身体に刻み合う。

御簾越しに仄かに浮かび上がる若い二人の白い肢体。

いまだ熱の覚めやらぬ新婚の夫婦には、言葉よりもなお容易く想いを伝える術が確かにあった。

\*\*\*

両親が近くに居るとはいえ、若い新妻を一人広い屋敷に残すことに後ろ髪を引かれながらも、王懿が敵国となった愈南の北上に備えるため長安へ出立してから一月ほど経った頃。

初めて迎える一人きりの生活である。いまだうら若き身でありながら、宛紀国の軍事部門の最高責任者の正室としてその留守を護らねばならないという任はさぞや辛かろうと。

夫や両親、さらには夫の実家からまで彼女を気遣う文や贈り物がひっきりなしに届くのだから、想像していたほど青霞は孤独を感じずに済んでいた。

唯。一日を終えた夜、広い寝台に収まり彼の好む色である青紫の緞帳を下ろし、外界との繋がりを断つ瞬間。

仕切られた空間に一人。本当に一人きりになってしまったのだという実感と言い様のない寂寥に襲われ、愛しい夫の不在を嘆くのは無理からぬことだろう。

夫のいない寂しさに、何夜、静かにその枕を濡らしただろう。

だが、そんな夜の寂しさなど垣間見せることなく青霞は健氣に大將軍の妻としての多忙すぎる役割（屋敷内の取り仕切り、客人の接待、一族への遣い、等）を果たしていた。

そして、待ち焦がれた夫・王懿からの文が届く。

しかし、その内容は青霞を喜ばせてはくれなかった。

洛陽よりもさらに北方の長安では冬の訪れが早く、来る戦のための国の要として機能させるには、まだ幾許かの時間がかかる。予定よりも帰還は長引くことになる。

——誤魔化しの一切ない、王懿らしい簡潔な言葉。

子供を宥めるようなものではけしてない。青霞を一人前の妻として扱っているのだと示す、率直に事実を告げてくれた夫の誠実さを嬉しく思いながらも、やはり青霞は夫との再会が延びてしまったことに意気消沈していた。

ここよりも、冬が早いということは、さぞかし長安の冬は寒だろう。せめて、風邪でもひかぬよう、なにか妻としてできないものか・・・  
・・・そんな些細な、だが本人にとっては重大極まりないことに頭を悩ませることで、

遠のいた夫との再会への失望から目を逸らし、少女は「大將軍の妻」として恥ずかしくない振る舞いをと懸命に努力を続けるのだった。

＊＊

王懿が洛陽を出立して一月ほど経った頃。

思わぬ客人が、王懿邸を訪れた。

「まあ。趙將軍が？」

古くからの夫の知己である人物の訪問に、若い妻は首を傾げた。

愈南の動きに備えるため、王懿が長安へ赴いたのは隠密でもないゆえにある程度の地位の者ならば周知の事実のはずである。ましてや、皇帝からの詔勅であるだけに、車騎將軍である趙高がそのことを知らぬはずがない。

ちなみに車騎將軍とは、軍事部門において大將軍、驃騎將軍に次ぐ地位であり、驃騎將軍が空位である今、車騎將軍である彼は王懿に次ぐ実質的な軍事部門における権力者でもあった。

つまり、大將軍のいない今、この洛陽を護る最高責任者が今ここに来ているのである。

それほどの人物を無碍に扱うこともできず、訪問の意図を掴めぬまま青霞は客人を通した部屋へと優雅な裾捌きで急ぎ足を運ぶ。

いくら気心の知れた知己とはいえ、身分が身分だけに無礼があってはならない相手であった。

「これは奥方。御機嫌よう。相変わらずの美しさ。王懿殿の不在でお肌で眠れぬ日々を送り、さしもの玉のお肌も荒れてはいないかと心配しておりましたが。どうやらまったくの杞憂でしたねえ。

その瑞々しい肌は、ここが宮廷であれば間違いなく嫉妬の対象でしょうねえ。……美しさに対する女性の執念は、それは恐ろしいですから……。おっと、喋りすぎましたね。

……しかし……。いや、本当にお美しい。」

呼吸を整え、乱れた衣装をさっと直し何事もなかったように青霞が客間に入ると、趙高は透かし彫りが施された紫檀の肘掛け椅子から立ち上がり、隙のない動きで優雅に一礼すると、青霞に挨拶の言葉を一言も話させることなく一気に畳み掛けるように喋りだした。

その言葉の奔流にあやうく青霞は美辞麗句の海で溺死しそうになる。

王懿と同様、宋操の時代から宛紀に仕えてきた趙高であるが、その性質は、ほぼ実力が拮抗している王懿の理性と合理性を重視し結果のみを求める現実的な性格とは正反対であった。

勇猛な武将でありながら詩歌や音曲の造詣深く、それらを自然にさりと垣間見せる気品と典雅は、とても彼を武官——それも宛紀屈指の勇猛果敢な武将——には見せない。

なにしろ、宮廷においての彼は、剣を握っている姿よりも、琴や笛を奏でている姿のほうが多く目撃されているのだから。

そんな趙高の一風変わった性質のおかげか、趙高は、自身もまた優れた詩才を持つ宋瑛だけでなく高雅な芸術と文化の育成に力を注ぐ甄后とも、政治とは一線を画した交流があった。



それにもかかわらず、彼が王懿ほど朝廷の重鎮達から警戒されないのは、趙高という青年が、宛紀国内においても屈指の美男と称される王懿と並んでも遜色ない華やかな美貌の持ち主でありながら、その容姿よりも彼自身の特異な嗜好に基づく奇行や常人には理解できない破天荒な行動の数々の噂の方が巷で先行し、当の本人もまた出世よりも趣味、といった怠惰な姿勢を前面に出しているため王懿のように相手に脅威を感じさせるような鋭さを周囲に与えないからである。

その性格が災いして戦場においても軍師である王懿の頭を悩ませたことも少なからずあったようだが、彼の気さくで物怖じしない性格はそれらの奇行を補って余りあるものがあり、青霞にとって趙高は兄とも思える非常に好ましい存在だった。

……また、彼は夫である王懿が「友人だ」と彼女に面映そうな表情で紹介してくれた最初で最後の唯一の貴重な人物なのである。

それだけに一層、青霞は今回の突然の訪問が気になった。

一見すると、天衣無縫、傍若無人のような振る舞いをみせる彼の青年は、実は誰よりも繊細で周囲の人間の顔色を読むのに長けている。

それを知るゆえに、王懿は趙高を「友」と認めたのだ。

ただの武術だけが取り柄の放蕩貴族の凡愚ではない。趙高は、人の心理を読んでなお自身を道化のように躍らせることで周囲の目を欺く方法を知っているのだ。

——意味のないことなど、賢いこの方がなさるはずはない。……  
・だとすると……。

「御機嫌よう趙將軍。……今日は、御存知じでしょうが、生憎主人は不在でして……。」

「ええ。勿論存じておりますよ。ですが今日は、貴女にお願いがあらって参ったのです。」

「お願い？ わたくしに、ですか？」

訝しげに黒瞳を揺らす少女に、趙高は真意の見えぬ表情で友人の若妻を見据え、ことさらゆっくりと言いつつ放った。

「貴女にしかできないお願いです。どうか、この趙高を憐れと思い、聞き入れてくれませんか？」

「……それは……。」

柔らかい口調を裏切って、断れるものなら断ってみろと云わんばかりの強引な空気が少女を萎縮させた。

どんなに気丈に振舞ってはいても、いまだ幼い世間知らずな少女が太刀打ちできる相手ではない。その内容すら聞き出す前にすべての事は決定していたようなものだ。

優しげな微笑を浮かべながらも鋭すぎる武人の眼光から身を隠すよ

うに青霞は紅を重ねた袖でそつと口元を覆うと、その下で不甲斐無い己にきりりと唇を噛んだ。

## 第一章 夢の終わり 5

聡明すぎるがゆえに人心の機微に敏かった王懿は、早くして最高権力者に才能を認められたが為に、現在に到るまでの間あらゆる人間の剥き出しの醜悪な感情に晒され続けた。

結果、彼が気難しく人間嫌い（人間不信ともいえる）になってしまったのは生来の気質だけとはいえず、ある意味無理からぬことであった。

そんな王懿には当然、「友人」と呼べる人物は片手で数えるほどしかない。

その数少ない貴重な存在である趙高と青霞は必然的に、会う機会は少ないものの個人的な用があっても不思議ではないくらいには近い関係だった。

だが、王懿に次ぐ地位にあり多方面で優れた才能を発揮する趙高が、大したとりえのない若いだけの人妻に頼まなければならぬ用などそうある筈もなく。

見当も付かない申し出に、青霞は戸惑いと僅かな怖れを抱きながら不思議そうに長身の趙高を見上げた。

その拍子に黒絹のような髪に挿した、鶴を模した金細工の簪がシャリと微かな音をたて白く儂げな美貌の横で揺れる。

まるで一幅の絵のように雅やかなその様を、美しいものをこよなく愛する長身瘦躯の青年は目を細めて見つめた。

「ああ、そんなに警戒しないでください。簡単なことです。こちらの方に貴女の得意な箏を聴かせてあげていただきたいのですよ。」

いくら己の審美眼に適った麗人とはいえ、大切な友人の妻に見惚れるという失態を犯してしまったことに内心慌てた趙高は、反射的に後方を振り返った。

そして趙高の視線の先を辿ったところで初めて、ようやく青霞は客間にもう一人、見知らぬ人物がいることに気づくのだった。

部屋の扉が開かれるなり、目の前を遮るようにして長身の趙高が立ったのだから、彼女の位置から上座にあたる奥まった場所は見えな

い。しかも、その貴人は主賓用の肘掛椅子に深く凭れたままじっとこちらの様子を眺めているだけで、完全に気配を消していたのだから青霞がもう一人の客人を認識することが出来なかったのも無理からぬことであつた。

或いは、それを意図して趙高はわざと彼女の前に立ったのか。

そう思わせる、上座に堂々と座る人物への趙高の態度。

さりげなく接しているようで、青霞には分かる筈のない緊張感をもって貴人に無礼がないよう細心の注意を払いながら快活に振舞っている……。

彼ほどの立場の者が気を遣わねばならない相手となれば、おそらくかなり高い身分の方なのだろう。

すっぱりと藍色の頭巾を被り、質素だが高価な仕立てであると目で判る文官風の装束を纏った人物を、青霞は手にしていた扇の隙間から胡乱な目でそっと見つめた。

「趙將軍。……こちらの方は？」

主不在の屋敷へ突然現れた、いかにもいわくありげな怪しい雰囲気放つ、どうにも近寄り難い客の来訪に困惑の色を隠せない少女の不安気な様子を内心気の毒に思いながらも、趙高はそ知らぬ素振りでさりと紹介した。

「こちらの方は、私の古くからの友人です。勿論、季圭殿もよく御存知の方ですよ。訳あって、今は名を明かすことはできませんが……。詩歌に造詣の深い風流な御方で、貴女が見事に箏を弾きこなすというお話を致しましたところ、是非にも聴いてみたいと仰りましてね。」

「季圭様の？……そうでしたか。」

卓に着いたまま動こうともしない正体不明の客人に、青霞はどう接してよいか皆目見当もつかなかったが、とりあえず趙高の言葉を信じることにした。

彼の言葉を素直に取れば、箏を披露すれば彼らは引き揚げてくれるらしい。

屋敷の主人が不在の今、身分高い客人を失礼のないようにもてなすのは妻である青霞の役目であったが、以前からの顔見知りで気心の知れている趙高だけならいざ知らず、顔も名前も明かせないような奇怪な人物を満足させるほどのもてなしが自分に出来るか否か。

しかも、座したまま一言も発さぬも、出された青磁の茶器に触れる長く白い指の手入れのされ方や、時折邪魔になるのである頭巾を少しだけずらす僅かな動作にも、表現しがたい気品と優雅さが滲み出ていた。

最初に少女が予測したように、きっと、そこらの貴族ではないのだろう。

正直、まだ王懿の正室となって日が浅い青霞にはこのような不測の事態を迎えて、普段のように無邪気に「大丈夫」と己に言い聞かせて乗り切ってきたような自信はなかった。

だが、彼女は大將軍の妻として毅然とした態度をとらなければならぬ。

身分を隠しているとはいえ、相手が趙高すら一目置くほどの人物であればなおさら失態は許されない。

それが、最高位の大貴族の総帥の元へ嫁いだ正妻としての自尊心であり意地であり、なによりそれこそが正室として一族を背負う彼女の役目なのだから。

それゆえ青霞は、趙高の言う「頼み」を快諾した。

頭巾の男が、自分を見る視線の鋭さに身を竦ませながらも。必死にそれに気づかぬ振りをして。

青霞は、まだ秋の余韻を残す紅が見事な庭に面した吹き放しとなっている広い回廊に座を移し、欄干の透かし彫りや掛落、欄間の精巧な細工が緻密に建てられた柱の陰となって完璧な陰影を描いている場へ客人を誘った。

洛陽の秋風は冷たく、熱いはずの茶もすぐに温くなってしまいかもしれないが、今の青霞が箏を披露するのならばこの場をおいて他になかった。

そこには、愛しい夫と多くの時間を過した、幸せな思い出で満たされているから。

そんな場所でない、寂しさのあまり糸を弾くたびに涙が零れるような気がして、とても客人を楽しませるような曲を奏でられるとは思えなかったから。

だから、青霞は秋風に冷えてかじかむ指先など気にすることもなく、あえて軽やかに春の美しい光景を愛でる曲「春到湘江」を弾き始めた。

想いは冬を越え暖かな春へ。

最愛の夫がいた季節。そして、次の春にはきつと己の傍らで、いつもの不器用ながらも優しい微笑みを浮かべているはずの……

そんな想いをこめて青霞の心は春へと向かう。



15弦もの糸を自在に操り細い指が紡ぎだす箏の音は華麗にして叙情的そして弾き手の仄かな情熱としなやかな強さが秘められていた。

これから冬を迎えようという季節にもっともそぐわないはずの曲なのに、聞き手である二人は、そんな不満も忘れ澄んだ秋の空に響く穏やかな箏の音に耳を澄ます。

そうして。上級楽師の音曲に日々包まれ、耳もかなり肥えている、けして甘い聴き手ではないはずなのに、彼らに比べればどこか技術的に荒削りなはずの少女が紡ぐ見事な箏の世界に無意識のうちに引き込まれていることを互いに確認しては視線を見合わせ苦く笑うのだった。

＊＊

「お気は済みましたか？」

王懿邸からの帰り道。

馬上の人となった二人の客人は、整備された広い洛陽の道をゆつくりと鼻先を並べて馬を歩かせていた。

「ああ。思っていたよりも随分と見事であった。」

趙高の問いかけに返された言葉は、機転の利く彼でさえ解釈に困るものだった。

打てば響くような反応を返す青年が、珍しくも口籠った様子に満足したように、頭巾の男は笑った。

「クク。……お前の言うとおり、箏の腕前も見事だが。あの華は、我が城では見たことのない美しさだ。そうは思わぬか？」

その言葉に、今度こそ趙高は主君の意図を違えることなく捉え、顔を曇らせた。

「確かに美しい方ですが、甄皇后様ほどではありませんまい。それに、まだ彼女は蕾のまま……。あの程度の華ならば後宮に幾らでもおりましように。」

とりなすような趙高の言葉に気分を害したように、若き皇帝は冷たく薄い唇の端を吊り上げた。

「フン。甄など……。いかに美しくとも体温のない氷の彫像のような女では抱く気も失せる。権力に媚びるばかりの野心の塊のような女もな。後宮の華は、美しいがおぞましい毒をもった食虫花ばかりよ。余が欲しいのは、まだ何者にも染まっておらぬ……清廉な……汚泥の蓮のような一輪だ。」

見事な手綱さばきで栗毛の馬を操りながら、淡々とそう語る青年の声に平静をよそおいながらも隠し切れない熱情が籠っていることを

悟り、趙高は嫌な予感的中してしまったことを悟った。

そもそも、王懿の正室を間近で見たいとこの若き主君が言い出した時に、自分はなんとしても諫めるべきだったのだ。

だが最初は、彼自身もまた宋瑛が口実として主張したように、単に年の離れた妻を娶った王懿をからかうための冗談だと思ったのだ。

宋瑛と王懿は母方の血筋とはいえ従兄同士。容姿もさることながら性格的にも似ている二人は宋瑛が宛紀国の跡目争いに巻き込まれるという憂き目にあっても互いだけは信頼していた。

実際、宋瑛の側近として王懿がいたからこそ、宋瑛の今があるといっても過言ではない。

実の兄弟よりも近い・・・兄のような存在。

趙高には二人の関係はそう見えた。だからこそ、「自分に内緒で愛妻を娶った王懿を冷やかしたい。」という皇帝の言葉を信じたのである。

それに、数多の美女に囲まれ欲しいものは何でも手に入る立場にあるこの明君が、一度敵にまわせばある意味愈南・瀨二国を同時に敵にまわすよりも恐ろしい災厄となるかもしれない男の妻を本気で欲しがるなど有り得ないと高をくくってもいた。

だから宋瑛の誘いに乗ったのだ。

即位してこの方、皇帝として膨大な執務に追われる一方、私生活では正室である甄后との仲は冷え切っており、息子に到っては存在を

認識しているのか怪しいほど接触を持とうとせず。

かといって、後宮にこれといった寵妃もない。気紛れで目についた女に手をつけてもそれはあくまでも一夜限りの寵愛で。そのことを嘆き皇帝の心を留めようと醜いあがきをして見せた女は数知れず。

宛紀国の政治の中枢である広大で豪華な洛陽城のどこにも宋瑛の安らげる場所がないことを見抜いていた趙高は、伶俐な美貌に時折疲れを滲ませる皇帝に束の間の息抜きをさせてやりたかった。

ただ、それだけのことだったのに。

皮肉にもその優しさは、趙高の大切な友人である王懿とその正室にとって最悪の結果をもたらしてしまうことになるかもしれない。

その時の王懿の怒りと哀しみ、そして自分や宋瑛に抱くであろう憎悪の凄まじさを想像し、趙高は傍らで颯爽と馬を走らせる主君とは対照的に、暗澹たる思いで馬を進めるのだった。

## 第一章 夢の終わり 6

洛陽城、後宮。

数え切れぬほどの大小の色鮮やかな宮殿が軒を連ねる広大で壮麗な内廷は、数多の女官が皇帝の寵を得ようと水面下で激しい争いを繰り広げる女の戦場とも言える場所だった。

その一角に住まいを定める二人の側室。

今は亡き眞王朝最後の皇帝（献帝）の娘である陰貴人と李貴人の姉妹は、正室が住む蘭殿（儲秀宮）にほど近い場所——泰和殿に住まいを賜った。その為、嫌でも甄皇后の姿を目にしなければならなかったが多かったが、この高貴な姉妹と皇后の仲はお世辞にも麗しいとは言えなかった。

とはいっても、甄皇后が何をしたわけではない。姉妹の方が一方的に皇后を厭い、避けているのが実状であるのだが。

皇后その人にとってはまさしく心外なことに、誇り高い姉妹の自尊心を甄后という女性はその存在だけでひどく傷つけていた。

母親の身分が低かったことと、父帝が宋瑛に迫られやむなく退位し、彼女達の故国である「眞」が消えてしまったことから、「公主」として扱われるどころか、新皇帝の数ある側室にすぎない「貴人」という女官の中でも比較的低い位を賜り住み慣れた洛陽城に留まるこ

とを許された彼女達は、そのことだけでも十分すぎるほど皇女たる誇りを踏み躪られていたのである。

いかに母親の身分が低かろうと、彼女達は300年続いた尊い国、「眞」の皇帝の娘なのだ。

その自分達が、名門とはいえたかだか地方の県令の娘（甄后の父は上蔡の県令）よりも遥かに下の扱いを受けることに甘んじるのは、屈辱以外の何者でもなかった。

しかも、甄后は宋操が宛紀を統一する以前、彼の最大の敵であった張家に嫁いでいた身であった。

その張氏との最後の決戦となった地で先陣をきった宋瑛が美貌で名高い甄夫人を強引に己が妻に迎えたのだという。

もつとも、宋瑛が彼女を電光石火で妻に迎えたのは、彼女に一目惚れしたわけではなく、もともと美女に目がなかった好色な父に対するあてつけの意味が強いのだろう、というのが世間の見方だったが。

実際、宋操は華北一の美女と名高い甄夫人を是非とも手に入れたいと、戦前から憚ることなく口にしていた。

そんな父親の言動を、潔癖な宋瑛が以前から苦々しく思っていたのは想像に難くない。

ともかく、そんな経緯で二夫に仕えることになりながら、夫の情愛が薄い分、なにかと彼女に気を遣った宋操の庇護（下心があったかどうかは今では永遠の謎である）にいた甄后を、陰貴人はことさら蔑んだ。

勿論、自分達が献帝の娘だという立場を忘れたことはない。  
現在の孤独と退屈が、その処遇の結果だということもわきまえてい

眞王室の血を引く彼女達が、皇帝の寵愛を受け権力を手にすることになれば、眞王朝復活の発端になりかねないのだから、宛紀としては彼女たちを生かさず殺さず、ということろなのだろう。

そういう意味では、たとえ「貴人」の地位であろうと皇帝の側室としてなに不自由ない暮らしを約束された今の状況は恵まれているとさえいえよう。本当であれば、いつ殺されてもおかしくない立場なのだから。

それはひとえに、二人の行く末を案じた山陽公（前皇帝）が、禪讓を行うことを受け入れる際に何度も頭を下げ宋瑛から約束を取り付けた屈辱的な努力の賜物であった。

これ以上望むべくもない身の上ではあるが、これ以下になることもない。

それが、二人が置かれている現状であった。

「退屈ですわ……。」

姉である陰貴人は、蘭殿へと繋がる回廊が見える庭の木陰で涼みながら、白い羽扇をゆらりと揺らしポツリと呟いた。

それに呼応するように、妹の李貴人も溜息を漏らす。

「確かに。陛下が後宮に足を運ばれることはあまりないですし。・・・あっても、蘭殿の近くには寄り付きもしないのですもの。残念ですわ。こちらにお寄りにならずとも、天姿秀出と言われるほどに美しいお姿を拝見できるだけでも、気分が晴れますのに。」

李貴人の言葉に、なにかを思い出したように、陰貴人は声を潜めて晒った。

「なんでも、陛下と甄后の関係は相当以前から冷え切っているそうよ。宋操様がお亡くなりになってから二人の仲は益々冷え込むばかりだとか。ねえ、小妹。陛下が何故嫡子である宋令様を太子にお立てにならないか知っています？」

「・・・生前、陛下をひどく疎んじておられたという宋操様が、宋玲様と甄后様を格別に可愛がっておられたから・・・ではないのですか？」

「ふふ。それもあるかもしれないけれど。・・・先日おもしろい話を聞いたのよ。」

さも可笑しそうに吊り上った朱唇を薄い絹であつらえた浅黄の袖で隠し品良く笑う陰貴人は、非の打ち所のない貴婦人に見えた。

しかし、大人し気に見えるその内に、甄后に対する嫉妬と羨望と劣等感の炎が激しく燃え盛っていることを妹である李貴人はよく解っていた。

その姉が、これほど楽しそうにしているのだから、おそらくその「話」とやらは甄后を酷く貶める内容に違いないと、李貴人は臍げに見当をつけながら姉の機嫌を損ねぬよう、興味ありげに先を促した。



「甄后が陛下に見初められ、陛下の正室になってから、宋玲様がお生まれになるまで、一年とかからなかったそうよ。」

「・・・・・・・・え？」

いともあっさり告げられたその言葉が、とんでもなく重大な意味を含んでいることに李貴人が気づくまで、しばしの時を要した。

「・・・・・・・・ええ?! それでは、宋玲様は・・・・・・・・。」

妹の驚く様ですら、甄后への恨みの溜飲を下げる役に立つのか、陰貴人は満足そうに頷いた。

「そうよ。宋玲様は、陛下のお子ではないかもしれない・・・・・・・・少なくとも、陛下はそのことを疑っていらっしやと思うわ。」

「まあ・・・・・・・・。」

予想もしなかった話に言葉もないのか、瞠目したまま考え込んでしまった妹を尻目に、陰貴人は蘭殿の方を嘲るように見遣り呟いた。

「冷え切った関係のあの女と陛下。宋家の血筋ではないかもしれない嫡子。・・・・ここで、陛下の子を身籠るほどの寵を受ける女が現れたら・・・・この後宮もさぞ面白いことになるでしょうね。そ

の時のあの女の取り澄ました顔がどんな風に歪むのか。あの女が息子のために形振り構わぬ無様な姿になるのを見ることがでるなら。……そうね、この命を誰かにくれてやっても惜しくはないわ。」

「大姉！ なんとということを……！！！」

あまりの姉の言葉に衝撃を受け、咄嗟に咎めるように、姉の美しく化粧の施された顔に視線をやったが、次に吐き出された陰貴人の言葉に肩を落として項垂れるしかなかった。

「だって、小妹。ここは死ぬのを待つだけの、美しくて残酷な鳥籠よ。眞の血を引くわたくしたちが子を生むことは決して許されないし、皇帝がわたくしたちを見初めることも今となっては決してないでしょう。……わたくしたちに出来るのは、せめて、この狭い世界で『おもしろい』ことを見つけてそれを楽しむだけ。生きながら死んでいるような身ですもの、それくらいの見戯は許されるのではなくて？」

整った細面が寂しげに残酷な現実を紡ぐのを、李貴人は哀しげに見つめた。

父が宛紀の傀儡皇帝であった頃。

陰貴人は李貴人にとって明日の命さえ危ういという苦しい日々間でさえ、けして他者を思い遣る気持ちを忘れない誰よりも優しい姉だった。そんな天女のような人が、こんなにも歪んでしまったのは、後宮という希望のない豪華な鳥籠で、死ぬまで飼われることが決ま

ってからである。

眞王室の血を引く自分達が子をなすことはない。ゆえに、他の女官のように功を挙げた臣下に下賜されることもない。

そして、甄后ほど美しくもなく突出した才があるわけでもない自分達が、宋瑛の寵愛を得ることもないだろう。

女として母としての喜びを一切知らぬまま、自分達はこの虚飾の城の中で静かに朽ちてゆくのだ。

そんな現実を目の前に突きつけられた瞬間。陰貴人の中に芽生えたのが数多の男達に愛され、子を産み、女として最高の地位に就いた甄后への憎しみだったとしても、なんら不思議なことではない。

誰かを憎まなければ生きてゆけないほど、ここでの生活は空虚にすぎた。

いっそ、二人して「皇帝の娘」として禅譲が行われる前に処刑でもされた方がよほど幸せだったのかもしれない。

禍々しい微笑みを浮かべる姉の狂気を孕んだ眼差しを眺めながら、李貴人はふと、そんなことを思った。

後宮の華は愛だけでなく憎しみさえも糧として咲くのだろう。

暮れ行く空に長くたなびく雲の影がうつすらと地上に映るのを、李貴人はどこまでも透明な瞳で静かに見つめ続けた。

## 第一章 夢の終わり 7

李貴人がやるせない想いで、遠くを見つめていた頃。

まったく理由は違えども、こちらもどうにもやるせない思いで冷や汗を拭う男が一人。

郭青霞の実父であり、（一応）皇帝の太傅という文官の形式上の最高位にある郭永である。

郭永が掌中の玉である娘を託した王懿が、洛陽を離れてから早や半年の時間が流れていた。

最初は、2月だけの滞在の予定が随分と延びたのは、愈南の北伐に対する動きが活発化したためと、予想以上に長安の治安が悪く完璧な備えをしておくためには、稀代の軍師である王懿をもってしても時間が必要だったのだ。

都に残した妻を案じながらも、安定しない天候や思わぬ愈南との小競り合いでずるずると王懿が長安に足止めされる日々が続く中。

大將軍として、また皇帝の片腕として辣腕を振るう王懿不在の洛陽では、とんでもない事態が進行していた。

皇帝の強い要請により、王懿の正室である郭夫人が宋瑛の側室とし

て後宮に入ることが決定したのである。

事は王懿不在を狙い済ましたように速やかに進められた。

——実際、知略に長けた王懿がいては上手く事が運ばないことを見越しての宋瑛の行動なのだから当然といえば当然であるのだが。

まず、王懿の正室、郭青霞の実父・郭永が皇帝に呼び出された。

皇帝の権威を象徴するように贅を凝らした荘厳な謁見の間で、数段上にある玉座に悠然と座る若き皇帝の前に拱手して跪く郭永に、皇帝・宋瑛はこともなく言った。

「そなた、余を後見する太傅でありながら、余の心を慰めるかもしれぬ美しい花を随分と慎重に余の目から隠していたらしいな。」

その言葉に、一瞬、郭永は首を傾げた。

風流を愛する郭永の邸宅には季節ごとに見事な花が咲き乱れるが、この後宮の最奥にある御花園に勝る庭園はないであろう。

そして、皇帝の住まう養心殿の庭もまた郭永の家などよりよほど手入れの行き届いた、都で最高の腕を持つ庭師が精魂込めた四季の花が咲き乱れるそれは素晴らしいものであった。

——さて、困ったぞ。

と郭永が皇帝の意図を察する前に、おそらく答えを期待していなかったであろう皇帝の凜とした声が核心をつく言葉を告げた。

「そなたの娘を余の妃として後宮に迎えたい。」

郭永に娘は一人しかいない。

その大切な愛娘はすでに嫁いでいる。しかも嫁ぎ先は、宛紀国にあって皇帝に次ぐ実質的権威を持つ王懿である。

青霞の他に、娘をもった覚えのない郭永は、皇帝の真意を測りかねて再び困惑した。

だが、どう考えても郭永の娘は青霞一人。

恐々として、郭永は答えた。

「恐れながら、陛下。我が娘は一人しかおらず、その娘はどうに嫁いでおりますが……。」

「離縁させればよい。」

瞬時に返ってきたいらえに、郭永は絶句した。

同時に、謁見の間に居並んでいた重鎮達も皇帝の言葉に顔色をなくした。

大將軍・王懿が新しく迎えた正妻を親しい知己の目に触れさせることすら厭うほど寵愛しているのは、宮廷内でももっぱらの評判であった。

それほど大切にしている掌中の玉を奪うようなことをすれば、王懿が皇帝……ひいては宛紀に対しどのような感情を抱くかは容易に見当がつくというものである。

彼の麗人の天賦の才と必要とあらば身内でさえも切って捨てる冷徹さは、味方にすればこれほど心強いことはないが、一旦敵にまわした時の恐ろしさは想像を絶する。

宋瑛の即位によって、国力、内政が充実してきたとはいえ、宛紀は北に匈奴、南に愈南、潯という敵を抱えている。

そんな折に、ようやく安定してきた国内の権力構図を覆すことになりかねない火種をわざわざ放り込むような真似を何故するのか。

その場に居合わせた臣下の者達は一様にそう思った。

彼の父で、好色で有名だった宋操でさえも直臣の妻を寝取るようなことはけしてなかったというのに（献上された者には、遠慮なく手を付けたが）。

色好みの父親と違い、潔癖症の傾向がある宋瑛は気紛れに後宮の華を手折ることはあっても、父親のように自ら望んで各地の美女を呼び寄せるようなことも美しいと評判の臣下の娘を積極的に召すこともなかった。

あるとすれば、只一度。

かつて、宋操の最大の敵であった張紹の次男・張熙の妻であった傾城の美女、甄夫人を戦乱に乗じて奪い、己が妻にした時くらいであろう。

そんな宋瑛であるから、彼の後宮に侍る何百という女達の大半は新皇帝への帰順と服従を示す証として諸侯が献上したもので占められ



ていた。

つまり、宋瑛自身が自ら側室を所望するというのは、極めて珍しい……いや、初めてのことなのである。

世継が正式に決まっていけない今、血筋が定かでないに密かに噂される宋玲一人しか男御子がない現状を考えると、宋瑛の意向は喜ばしいことであつたが、いかんせん相手が悪い。

宮廷一の実力者と言っても過言ではない王懿の妻でさえなければ……と誰もが内心で頭を抱えている中、皇帝の無情な宣旨は容赦なく降り注いだ。

「そもそも娘は、親のものであろう？ そうであるなら、親の都合で他家から取り戻すのもまた道理。古来からの貴族の婚姻でもよくあることよ。」

「し、しかし……娘は宮廷の作法など一切知らぬ未熟者ゆえ、とても陛下のお傍に仕えるような器量は持ち合わせてはおりませぬ。……そのような娘を陛下のお傍にあげることこそ、皇帝陛下ならび皇后陛下に対するこれ以上ない無礼かと。どうか、……どうかこればかりは何卒ご容赦いただきたく……」

冷や汗をかきながらも、娘の幸せを守るために必死で断りの口上を並べる郭永を、宋瑛は一蹴した。

「余がそれでもよいと言っているのだ。それに何故、皇后の意向なぞ気にする必要がある？ よもやその程度の言い逃れで余の命に逆ら

おうなどとは思ってはいまいな？」

凍てついた漆黒の瞳にぞっとするような虚無を湛えて、宋瑛は平伏する郭永を睥睨した。

「二度は言わぬ。郭家、王家。両家の存続と安泰を願うなら娘を余の元に差し出せ。・・・そなたの娘はまだ若い。余の側室ともなれば、今よりもさらにそなたの一族は栄えよう。」

一切の口答えを許さぬ皇帝の冷徹な態度と絶対不可侵の権力の前に、郭永は愛しい娘の不幸を嘆きつつ力なく項垂れ皇帝の意を受け入れるしかなかった。

＊＊

己が身に何が起ころうとしているのか知る由もなく。

青霞は、冬の訪れを知らせる澄んだ夜空を見上げながら、昼間趙將軍が自ら届けに來た文を手に、幾度目かも知らぬ吐息を漏らした。

・  
・  
・  
・  
・  
・

鋪床涼滿梧桐月

## 月在梧桐欠処明

明らかに高位の貴族でしか手に入らない上質の紙に、漆黒の墨が踊るような見事な手で綴られたその歌は、秋の夜の描写を繊細かつ的確に捉えた見事なものだった。

あの頭巾の貴人が先日 of 青霞の演奏への謝意を表したものと、趙高は云った。その割に肝心の届け物の内容は確かに見事ではあるが「どこら辺に謝意が？」とおっとりとした箱入り娘の青霞でさえ首を傾げるくらいなのだから趙高はただ苦笑するしかなかった。次いで、急な来訪について趙高からの正式な謝罪・・・こちらは心底済まなそうに、普段の快活さはなりを潜め妙に萎れた様子で語るので、むしろ云われた青霞のほうに焦ったくらいだったのだが。

一連の昼間の出来事を思い返して、青霞は重い溜息をまた一つ、ついた。

どう考えても、不意の来訪者は只人ではないのだろう。

この流麗な筆跡一つとっても、何一つ凡庸なところがない。しかも、王懿に次ぐ実力者である趙高に下男の真似事のようなことまでさせるとは・・・。

そこまで思考し、青霞は軽く頭を振った。

これ以上考えても、自分の手に余ることであるし、全貌を知らぬままあれこれ悩むのは愚かなことだと判断したのだ。

そうして煩雑な事柄を取り払って残るのは、愛しい夫のこと。

「季珪様。．．．逢いたい、です。一人はやはり、寂しい．．．．．」

二人で寄り添い眠ることにやっと慣れたと思ったら、予期せぬ災厄に夫は遠い地へ。  
冷たい寝台で一人眠ることに慣れてきた自分に、青霞はひどく焦燥していた。

「早く、逢いたい。一人に慣れてしまう前に．．．逢いたい。季珪様．．．．．」

国の大事の為、要職にある夫が何よりも職務を優先するのは理解していても。  
少女は願わずにはいられない。

どうか無事で。

戦など起きないで．．．．．。今回の遠征は杞憂だったと、少し皮肉気な微笑みでこの屋敷に帰ってきて。

同じ星を見ているであろう王懿の無事と早々の帰還を、青霞は必死に祈るのだった。



## 第一章 夢の終わり 7 (後書き)

現段階で陛下の根底にあるのは、王懿への甘えです。迷惑な奴・・・。

## 第一章 夢の終わり 8

後宮へ入ることが正式に決定してすぐに青霞は王懿邸から実家へ強制的に連れ戻された。

仮にも、臣下とはいえ血の繋がった従兄である男から妻を奪う形になるのだから、一時的に青霞を女冠（女道士）として寺に入れ、あらためて後宮に迎えるようにしてはどうかという、本人にとってはとんでもない、だが対面的には極めて有効な思慮深い案も出されたが、王懿から奪うことにこそ意味を見出していた宋瑛によってその案は一蹴された。

王懿の真価を知る宋瑛は、彼がこの洛陽に戻ってくる前にすべてを終わらせなくては、青霞を手に入れることなどできぬことをよく弁えていたのである。

それゆえ、異例といえるほど青霞の後宮入りの日取りは早められた。

青天の霹靂ともいえる皇帝の命に、当の本人である青霞は、ただただ呆然と立ち竦むしかなかった。

あまりに、何もかもが突然過ぎて、自身に何が起きたのか理解することも泣くことすらできなかった。

この寒い冬を乗り越えれば、暖かな日差しの中、名も知らぬ小鳥の美しい囀りに耳を傾けながら夫と二人寄り添い、再び穏やかで幸せな日々がかえってくるかと信じていたからこそ、広い屋敷での慣れぬ孤独に耐えてきたというのに。

一生をかけて添うと誓った、愛しい夫にはもう二度と逢うことは許されないと、人は云う。

何故こんなことになってしまったのか。

青霞は、今にも夫が帰ってきて、これまでのことはすべて冗談だったのだと青霞にだけ見せる不器用な優しさを秘めた微笑みで一笑に付してほしかった。

――すべては悪い夢だ、青霞。大丈夫。私がついている。そなたは何も、気に病むことはない。

優しい夫の声が聞こえたような気がして、ようやく青霞は、自身のやつれた青白い頬に冷たい涙がとめどなく流れていることに気がついたが、それを止めることはできなかった。

二度と帰ることはないだろうと覚悟して後にした筈の実家の自室に籠り、皇帝や権力におもねる貴族達から贈られた、山と積まれた金玉珍宝には目もくれず、ぼんやりと窓の外から冬景色の美しい庭を眺め続ける娘。



雨にうたれた咲きかけの梨花のように儂げな青霞の様子に、かける言葉もなく彼女の両親はただただ降って湧いたような娘の不運に涙するばかりであった。

皇帝に望まれ後宮で栄華を極める。……娘を持つ貴族であれば一度は夢見る野望ではあった。形骸化しているとはいえ、家柄だけは良い郭永もまた、一度もそのことを考えなかったといえは嘘になる。

だが、女としての幸せを考えると、常に誰かを陥れようと陰謀が渦巻いている後宮での生活はあまりにも過酷すぎる。

父親の欲目を差し引いても、青霞は美貌や教養、身分において他の女にひけをとることはないだろう。郭という名家の誇りをかけて大切に育てた自慢の娘なのだ、いずれの娘にも劣ることはあるまい、とそう信じたからこそ名将・王懿へ嫁がせたのだ。

しかし基本的に他者との争いを嫌い、万事において控えめな娘の性格は、將軍の正室としては好ましいが皇帝の寵を競う後宮では苦勞するのが目に見えている。

数多の女を踏み越えて、皇帝という唯一無二の男に愛を得るよりも、ただ一人、と誓ってくれる男に愛されるほうがよほど幸せであろう。

郭永が何よりも願ったのは、郭家の繁栄などではなく、可愛い娘の幸せだったというのに。だからこそ断腸の思いで娘を送り出したのに。

今になって、皇帝に所望されるとはなんと皮肉なことか。

郭永は、太傅という地位にありながらも皇帝になんの諫言もできぬ己の不甲斐無さをただ恥じるのみであった。

それでも、青霞には一縷の希望があった。

それは、長安にいるはずの夫、王懿の存在である。

父を問い詰めたところ、どうやら長安の王懿の耳にこのことはまだ届いていないとのこと。

それを聞いた青霞は、父が止めるのをきかずに急ぎ使者を立てた。

最初、王懿との離縁話を聞かされたとき、夫の意向も当然入っていると考えた彼女は失意のどん底に突き落とされた。

眉目秀麗で頭脳明晰、神経質で執念深い性格さえ除けば王懿は、ほぼ完璧といってもよい夫であった。

それゆえ、一回り以上年下の満足に家事もできない世間知らずな自分など（自分なりに精一杯尽くしてきたつもりであったが）愛想を付かされても仕方のないことかもしれぬ、と。

だが、妙に歯切れの悪い父の様子を不審に思い、よくよく問い質してみれば。

此度の件について宮廷は、一切王懿の耳に入らぬように手配してあるとのこと。

そのことから、王懿が洛陽に居ぬ間に既成事実を作り上げ、事後承諾的に王懿に無理矢理了承させるつもりだという宋瑛の思惑が明確に覗えた。

それは取りも直さず、さすがの宋瑛も王懿との直接対決は避けたいと考えているということに他ならない。

青霞はそこに僅かな希望を見出した。

彼女の興入れまで残された時間は少ない。

だが、もし王懿がそれまでに洛陽に到着したならば・・・本人が来られずとも何らかの手を打ってくれば事態は一転するであろう。

知らせを受けた王懿は、きっと早馬を走らせてこの洛陽へ向かってくれるはず。

愛しい夫の秀麗な姿を思い浮かべ、青霞は必死に祈った。

「・・・・・・・・季圭様。どうか・・・・・・・・わたくしを後宮になどやらないで・・・・・・・・わたくしは、一生貴方だけの妻でいると誓ったのです。」

心が千切れそうな痛みに涙を堪え、一縷の希望に縋りつく青霞の繊細な美貌を初冬の澄んだ月の光がひっそりと照らしていた。

\*\*\*

洛陽城儲秀宮  
ちやうしやうしやうしやう

皇后の寝宮である場所へ、珍しい来訪者が不吉な知らせとともに現れた。

「新しい妃を入れることにした。特別な者ゆえ、『貴妃』を授ける。皇后と貴妃、二人でこの後宮を一層盛り立てるよう精進いたせ。」

大輪の緋牡丹のように華やかな容色を一片も歪ませることなく、皇后・甄婉容は彼女にとって屈辱以外の何者でもない非情な知らせを、無言で受け取った。

久し振りに皇后の趣味の良さを窺わせる高雅な佇まいの儲秀宮を訪れた宋瑛は、予想違わず何の変化も見せない皇后を一瞥すると、つまらなそうに吐き捨てた。

「そなたと違い、若く清楚で素直な女だ。もしかすると、子を成すかもしれぬな。」

その言葉に、皇后は宋瑛が主殿に踏み入ってから初めて氷のように完璧だった表情を崩した。

「……妾を貶めたいのなら、いくらでもお好きなように。ですが、元仲（宋玲の字）はまぎれもなく陛下の御子。どうか、嫡子にふさわしい扱いを……」

「それをそなたが言うか、婉容。」

皇后の嘆願を宋瑛は冷たく切って捨てた。

取り付く島もない夫の様子に、皇后は朱唇を噛み締める。

「まさかお疑いのですの？あのような下賤な噂を真に受けられました

か？いずれこの大陸を統べる皇帝ともあろう御方が。そのために、わざわざ生木を裂くように比翼の鳥を捕らえてみせたのですの？」

皇后・婉容はそこで言葉を切った。

目の前の卓に肩肘をついてこちらを見つめていた皇帝がひどく不愉快そうに鋭い目を光らせたからだ。

卓の上に置かれた芳香漂う茶に手をつけもせず、宋瑛はスツと立ち上がる。

そのまま婉容に背を向けると、その一挙一動を彼女の視線が追っていることを知っているかのように去り際にポツリと漏らした。

「もう少し、そなたが余に素直だったらな。……今更か……  
……何もかもが遅いのだな。」

一度も皇后を振り返ることなく儲秀宮を後にした宋瑛。

後姿でさえも、凜とした清冽さを放つ若き皇帝を黙したまま見送った婉容は、遅ればせながら何故彼自らがわざわざここまで来たのだろうと、思った。

まさか自分の屈辱に歪んだ顔が見たくて来たわけではあるまい。

いまだ大陸の全権を掌握していない宛紀の皇帝はそれほど暇ではないのだ。

だとしたら……。

それは、あまりに遅すぎた邂逅だった。

自尊心の高すぎる二人は、結局擦れ違ったまま互いの真実を見極めることなく……。

これ以降、  
皇帝が皇后に逢う為に儲秀宮を訪れることは、二度とな  
かった。

## 第一章 夢の終わり 9

一方、後宮では新たな側室の出現が大きな波紋を呼んでいた。

「信じられませんわ。人妻を離縁させてまで後宮に迎えるなど。陛下も酔狂な！」

苛立ちを隠そうとず、柳眉を吊り上げて声高に叫んだのは、潘淑妃である。

他の後宮に仕える女官と違い、「貴人」よりも上の「淑妃」の位を戴く彼女は、宋瑛が皇帝になる以前の側室で、その美しさと舞の見事さから妓女の身であったのを宋瑛によって「淑妃」まで取り立てられた女性であった。

しかし、宋瑛の即位に伴って後宮に入り「潘淑妃」と呼ばれる地位になるうとも、その出自ゆえに常に周囲から陰口を叩かれ「成り上がり」と後ろ指差されるという状況は何ら変わりはなかった。

むしろ、宋瑛が皇帝に即位することによって「淑妃」という地位とそれにふさわしい殿舎を与えられたものの、皇帝の足は遠のくばかりという現状が、一層彼女を追い詰めていた。

そこにきて、新たな側室の登場である。

しかも、女は大將軍という宮廷でも比類ない地位の男の正室でありながら、奪うことの危険を顧みず皇帝自身が強く彼女の後宮入りを望んだのだという。

氷のように凍てついた瞳を持ち他者を容易に近づけない雰囲気醸しながらも、「天姿秀出」と謳われるほどの容姿で後宮の女達を虜にした孤高の皇帝が望んだ女とは一体どのような者なのか。

聞けば、いまだ後宮入りするまでに時のある時の女性は、すでに「貴妃」の位が授けられることが決まっているという。

「貴妃」とは「皇后」に次ぐ女官の地位であり、「淑妃」である潘淑妃よりも上位にあたる。

長年宋瑛に粉骨碎身仕えてきた自分を差し置いての厚遇ぶりに、潘淑妃はまだ見ぬ貴妃に嫉妬と憎悪を覚えずにはいられなかった。

「あらあら、潘淑妃様は随分御立腹な様子。相変わらず、御自分の立場をわかっていらっしやらないのねえ。・・・たかが妓女の分際で淑妃まで上り詰めた僥倖に感謝しこそすれ、上級貴族出身の貴妃様を逆恨みするなど身をわきまえないにも程がありますわ。」

淑妃の宮と庭を挟んだ対側にある陰貴人の宮からは、中庭に面した私室で指が白くなるほどの力を込め扇を握り締めた潘淑妃が苛立ちを侍女にぶつけている姿が、御簾や扉を開いたままだった為はつきりと見ることが出来た。

予想通りのその姿に、陰貴人は満足そうに優雅に笑う。

「郭貴妃様の登場によって、この後宮の勢力図はきっと大きく変わるわ。この度の貴妃様の興入れは、陛下御自ら望んだそうよ。もしかすると、貴妃様の懷妊もそう遠くない話かもしれないわね。」



楽しそうに話す陰貴人に、傍らに座していた李貴人は憂い顔で答えた。

「ですが、大姉。貴妃様は朝廷でも誰もが一人の人と認める実力者、王大将軍の御正室。此度の興入れば、貴妃様、王大将軍御兩人ともに肯えぬものを陛下が強引に進められたとか。……そのようなことを皇帝陛下がなさったとしたら、臣下に示しがつかぬでしょう。主が臣下の妻を奪うなど、故事の例を見ても碌な結末を迎えぬのが道理。何やら不吉な予感が致します。」

思慮深い李貴人のもっともらしい意見を、陰貴人は一笑に付した。

「ほほ。何を言うかと思えば。貴女が憂うことなど何もありますまい、小妹。この宛紀は、所詮我が眞王家を滅ぼした敵国ですよ。皇帝の酔狂で滅びるというのならそれも一興。むしろ、敵国の最期をこの目で見届けられるのであれば、これ以上の幸運はないというものです。」

こともなげに嫣然と微笑む姉に、李貴人は溜息をついた。

「だからといって。……一人の女として、此度のことは何やらやるせない気がするのです。」

他にも言いたいことはあったが、姉の静かな狂気に諦念を抱いていた李貴人が漏らしたのは、その一言だけだった。

だが、その言葉は陰貴人の心に響くものがあつたのだろう。

僅かに、整った美貌を曇らせると彼女は茜色の染まった空を見上げ

て言った。

「確かに。殿方の寵など、一時の……泡沫のようなもの。寵が御身にあるうちは極楽であろうが、過ぎ去ってしまえば地獄よりも始末が悪い。その一時の寵のために人生を滅茶苦茶にされるのは、若い身ではさぞ辛いことでしょうね。」

「……女とは、不便なものでございますなあ……。」

李貴人も、姉の言葉に同意しながら寂しげに紅い空を見上げた。

二人とも、身分低いながらも父である献帝の寵愛を受けた母の姿を奇しくも同時に思い浮かべていた。

皇帝の寵を受けながらも、その身分の低さゆえに後宮の女たちに蔑まれ苛まれ続けた母。

父の寵が薄れた後は、盛りの終わった花のように後宮の隅に打ち捨てられ、後はひっそりと死を待つばかりといわんばかりに、弱り果てていった母。

せめて自分が男であったならば、そんな哀れな境遇に陥らせずに済んだのに。

男子であったならば、王家の血を引く不穩分子として斬首になることはあっても、こんな場所で、飼い殺しのような一生を強いられずに済んだのに。

「まこと、女とは不憫なものでございますなあ。」

独り言のような李貴人の言葉は、寂寞とした冬空に虚しく響いて、消えた。

まだ明るい澄んだ空には冷たく白い月が……。

＊＊

洛陽の東南にある郭家には、各諸侯から「貴妃」の位を賜った青霞への祝いの品々が続々と到着し、灯された明かりに照らされて煌びやかな光を放っていた。

どれをとっても高級で趣味の良い品々は、後宮入りする前から「貴妃」の位を賜った青霞への並々ならぬ皇帝の執着と寵愛にあやかろうとする貴族達のあからさまなへつらいであり、その意味を知る青霞は、それらの宝物から厭わしげに目を背けた。

長安の王懿からは何の音沙汰もない。

使者を遣わした時から逆算すれば、今回の出来事はすべて夫の耳に届いているはずなのに。

父の口振りからすると、此度の話を断れば、皇帝は王家、郭家ともに断絶しかねない様子だったという。

王家の次期家長となることが決まっている王懿であれば、もしや自分よりも家の大事を取ったのかもしれない。

冷酷そうに見えるが、実は誰よりも繊細で優しい心を持つ夫である。

青霞一人の犠牲と、王家の父母兄弟ひいては一族との命運を秤にかけたならどちらが彼にとって重いかは明白だと少女は諦めの境地で冷静に考えた。

——現実には、彼女が夫へと放った使者が、長安どころか洛陽すら無事に出ることができなかったことなど、世間知らずの少女には想像するべくもなかった。

自分は、彼や自分の一族のために切り捨てられたのだ。

加えて今回の王懿の遠征は、おそらく愈南との最後の大戦になるであろう北伐に備えるという大きく重い使命のためだ。国の命運と青霞一人の運命など、秤にかけるのも愚かしいことである。

そう頭では解っている。

今にも、夫が早馬で駆けつけ自分を抱きしめながら「そなたは我が妻ぞ。陛下の元になぞどうしてやれようか。」と言ってくれるのを切実に待ち望んでいる自分がいる。

どうせこのまま後宮に入れられるのならば、もう夫には逢わない方がよい。

理性は必死にそう告げているのに、心はひたすらここにはいない夫に恋焦がれ、せめて魂だけでもいいから夫のもとへ飛び立ちたい。せめて最後に、「さよなら」だけでも伝えられたら……。

相反する思考に、青霞は引き裂かれていた。

「季圭様。……………季圭様。……………一目で良い。貴方にお逢いしとうございます。わたくしは……………後宮になぞ行きたくありません。どうか、わたくしを助けてくださいませ……………」

それが届かぬ願いであろうと解ってはいても、青霞はそう慟哭せずにはいられなかった。

しかし、その血を吐くような嘆きも、魂の碎けるほどの強い祈りも虚しく。

大將軍・王懿の元正室、郭青霞は貴妃の位を正式に賜り、郭貴妃として恙無く後宮入りを果たすことになる。

純白の雪が、北風に誘われて舞い散る冬も半ばにさしかかった頃であつた。

## 第二章 皇帝 1

「まあ、虹。」

雨音が止んだ気配に、青霞は刺繍を縫う手を置き御簾を巻き上げた格子窓から外を見た。

水を含み青々と葉を茂らせる木々の向こうに、美しい虹が掛かっていた。

刺繍を放り投げるようにして卓の上に置き去りにすると、少女は慌てて外へ飛び出した。そして、長い裾が濡れるのも気にかけず一心に空に描かれた色とりどりの曲線に見入る。

「青霞、貴婦人たるものが、そう忙しく動くものではない。袖まです、濡れているではないか。」

咎める、というよりも揶揄の色を滲ませて、王懿がそつと青霞の横に並び立つ。

「でも、季珪様。早くしないと、虹が消えてしまうかもしれませんわ。こんなに大きな虹、滅多に見られるものではございませんもの。」

年長の夫に指摘されたことが恥ずかしかったのだろう、白い頬を僅かに上気させて少女は主張する。

そんな妻を王懿は目を細めて眺めた。

「そうだな。宝玉と違ってあれは一瞬で希少なものだ。私も、目に焼き付けておこう。」

そう言って天空を見上げた王懿の端整な横顔に、青霞は虹を見るのも忘れて見惚れた。

とても幸せだった時間。

何も知らず、このまま幸せが当然のように明日も来るだろうと思っていた頃。

あの時のように。

雨上がりの虹をもう一度待ったけれど。

青霞の黒い瞳がそれを映すことはなかった。

\*\*\*

洛陽城後宮。

華麗で壮大、そして絶え間ない権力闘争の裏舞台でもあるこの女の園に初めて足を踏み入れた青霞は、まずそれまで身に付けていた婚

礼用の正装である深紅の豪奢な衣装を脱ぎ、白地に金の刺繍の施された、彼女のためだけに誂えたという繁栄の途を上る皇帝の「貴妃」にふさわしい絢爛な衣装に着替えさせられた。

幾重にも重なる趣味のよい色あわせの薄絹の上に羽織った白地の長衣には、金糸で鳳凰を描いた繊細な刺繍が縫いこまれていた。

艶やかな長い黒髪を複雑に結った上に載せられた黄金と翡翠の冠と、何本も挿した長い連珠の精巧な細工の簪は、それだけで細い貴妃の首が折れてしまうのではないかと周囲が思わず案じてしまうほど惜しめない宝玉と金が使われていた。

皇帝・宋瑛がこの郭貴妃誕生に並々ならぬ興味を寄せていることは、この賜った衣装と飾りだけでも誰の目からも明らかであった。

長い時間をかけ、「貴妃」としての正装を完成させた女官たちは、自分達の仕事に満足すると「比類なき完成品」である貴妃を取り囲むようにして長い回廊を渡り、皇帝の待つ乾清宮の御座の間へと導くのであった。

瑞々しい美貌に薄っすらと化粧を施し、皇帝が自ら用意させたという優美で格調高い華麗な衣を纏った青霞は、美々しい後宮の華に見慣れている女官達でさえ、思わず見惚れてしまうほどの美しさであった。

しかし、その表情は硬く、黒曜石のような瞳は虚ろ。

まるで自身の意思などないが如く等身大の人形のように侍女達のされるがままに沐浴し、着替え、化粧を施され部屋から部屋へと移される。



正装した貴妃を皇帝・皇后の待つ御座の間へ案内しながら、後宮に入ってから此の方、この若い貴妃がいまだ一言も発してはいないことによりやく一人の女官が気づいた。

月梅、という名のこの女官は多くの後宮の女官達の中でも、とりわけ頭の回転が速く優秀な女官だった。その完璧な仕事振りが皇帝・宋瑛の目にとまり、今回の郭貴妃の後宮入りに備え彼女付きの侍女頭として抜擢されたのである。

一介の下級女官が、いきなり貴妃の侍女頭に抜擢されるなど異例のことだった。

しかも、貴妃という皇后に次ぐ高位の女性の世話の全ての責任を負うには、月梅はあまりに若すぎる。

郭貴妃自身も若いのだから、侍女頭にはもっと経験豊富な年嵩の女性の方が良いのではないか？

そう注進する者もあったが、宋瑛は「年が近いほうが貴妃も安心するだろう。」と言って譲らなかった。

皇帝が己の側室付きの侍女の人事にまで口を出すなど、これまでなかったことであつたから、この決定には後宮のみならず外廷の人間達も驚いた。

同時に、それだけ郭貴妃を気にかけるということは、やはり王懿に気を遣つてのことかそれとも噂以上に郭貴妃という女性は「傾城」と呼ぶにふさわしい美女なのか等々……巷には様々な憶測が興味本位に飛び交った。

そんな経緯もあり、様々な意味において注目され続けてきた貴妃の後宮入りであったが、郭青霞が貴妃に決定するまでの事情が事情なだけに、後宮入りの前に貴妃が自害してしまうのではないかという危惧は秘密裏ながらも当然存在した。

ゆえに無事郭貴妃が入城を果たしたと聞いたときには、月梅はじめ貴妃に仕えるよう命じられていた侍女達は一様に胸をなでおろしたものであった。

その新たな主を目の前にして、噂に違わぬ美しさであるが、まるで抜け殻のように虚ろな郭貴妃の様子に、月梅は無理もないことと哀れに思うものの、研ぎ澄ました鋭い爪を隠し持った後宮の女達が待ち受けているであろうこれからの謁見に不安を覚えずにはいられなかった。

もし、この調子で皇帝の前で失態を犯し、不興をかうことがあったら……。

宋瑛は、皇帝としては明君と名高いが、同時に意に添わない者には言葉にするのも憚られるほどの冷酷な仕打ちを与える酷薄さと残酷さを合わせ持った恐ろしい人物である。

郭貴妃の失脚は即ちその侍女達の失脚をも意味した。

だが、郭青霞は望んでこの後宮へ来たわけではない。

噂によれば、最後まで夫の帰りを待ち続け後宮へ入るのを泣いて拒

んだという。

そんな彼女であれば、もしかすると半ば自棄になってわざと皇帝の怒りをかうくらいの真似などいとも簡単にやってのけるかもしれない。

その可能性に思い至り、月梅は心なし青褪めた。

だが、もはや乾清宮は目の前。今更彼女を皇帝ならびに後宮の女達に引き合わせることを止めさせる事はできるはずもなく。

白い美貌の傍らで金細工の簪が揺れる何気ない様子さえも、思わず足を止めて見入ってしまいたい衝動にかられるほど儚げで幽遠の美しさを醸し出すこの貴妃が、どうか皇帝の興を削ぐような真似だけはしないように・・・と月梅は必死で祈りながら、自分の後から長い裾を優雅にさばきつつゆっくりとついて来る郭貴妃を御座の間へと先導するのであった。

＊＊

後宮に唯一足を踏み入れる事の出来る男性・・・・・・・・皇帝を迎えた御座の間には、皇后だけでなく「才人」以上の位にある女官達が一同に介していた。

正面中央の数段高みに設えた玉座に気だるげに凭れる皇帝。――そ

もそも彼が、後宮という皇帝にとって最も鬱陶しい場所ではない女の園をあまり好んでいないということは周知の事実であった。

その傍らには皇后らしき気品に溢れた女性が凜と背筋を伸ばして立っている。

そして、牡丹の朱が美しい見事な屏風を背に玉座に座る皇帝の御座の両脇に、左右に分かれて沢山の女性がずらりと並んでいた。

理由がなんであれ、皇帝が後宮で正式に謁見を行う事はまずないと行ってよい。実際、後宮が洛陽に移されてから一度もなかった。だからこそ、普段は皇帝の目にとまる機会のない女たちは、もしかするとお声がかかるかもしれないという僅かな期待を胸に、競うようにこぞって己を飾り立て少しでも美しく見せようと必死に装っていた。

大きな観音開きの扉を開けた瞬間、青霞の目に飛び込んできたのはそんなギラついた目をした女たちの姿である。

柱の細部まで贅を凝らした大広間に大勢の女性が競うように美しく装ってずらりと並んだ絢爛豪華な様はある意味圧巻であった。

しかも、彼女達は間違いなく皇帝陛下直々の要請によって新しく迎えられたという、「郭貴妃」を値踏みしようと目を光らせているのだ。

少しでも粗があったら、声高に笑いものにする算段なのだろう。

嫉妬と敵意の混じった視線を一身に浴びて、青霞は身を竦ませた。

宛紀国の紋章が刻まれた大扉の前で、怯んだように一瞬にして凍りついた青霞を気の毒そうに見つめながらも、入室できる身分ではない月梅は、新しい主の武運を心から祈りながら主の背を押し静かに扉を閉めた。

背後で扉が閉まる音を絶望的な気分で聞きながら、青霞は孤立無援のこの後宮に本当に放り込まれてしまったのだとあらためて実感した。

しかし、そんな彼女を叱咤するように広間の奥から「早くこちらへ」という毅然とした女性の声が響くと、青霞はその声の主の元へ引き寄せられるように女達の刺々しい視線を蹴散らしながら鮮やかな裾裁きでしずしずと玉座の前に進み出たのであった。

「郭青霞にございます。この度、新しく『貴妃』として陛下にお仕えさせていただくことになりました。後宮のしきたり、作法については何かと到らぬ点もございましょうが、何卒よろしくご指南のほど、お願いいたしとうございます。」

皇帝の前まで歩み寄ると、優雅に跪いて拱手し、頭を下げながらよどみなく挨拶の口上を述べる青霞は、先程の怯えが嘘のように非の打ち所のない気品と才気に溢れていた。

その様子を宋瑛は満足そうに見下ろし、傍らの妖艶な美女……甄后は内心の見えぬ作り物のような端整な微笑みを浮かべながらも

冷静にこの新たな側室を見定めていた。

そして居並んだ女達は、身分、美貌、教養、どれをとっても「貴妃」という位に遜色ない青霞を目の当たりにして無関心を装った裏で嫉妬と憎悪にギリギリと歯噛みするのであった。

そんな後宮の美女達の中でも格別の反応を示した者がいた。

悔しがる女達の様子を見てさも愉快そうにひっそりと扇の陰で唇を歪める陰貴人と、皇帝・皇后を前にして物怖じしない郭貴妃の所作を興味深そうに見つめる李貴人、新たな側室への嫌悪と嫉妬の炎をあからさまに燃やす潘淑妃である。

皇后を除けば、皇帝に最も近い存在である彼女達の戦いの渦中にやがて巻き込まれることになろうとは、この時の青霞は想像する余地もなかった。

その時彼女の脳裏を占めていたのは、どうすれば一刻も早くこの居心地の悪い場所から去ることができるか、ということのみだったのだから。

## 第二章 皇帝 2

その夜。

青霞は皇帝に召された。

長春宮。

皇后よりも皇帝の住まう宮に近い場所・・・しかも眞王朝の時代には幾人もの皇后が住まったという、他の殿舎とは趣を異にする広く豪華な宮を賜った青霞は、気が晴れるどころか一層憂鬱な気分になった。

誰よりも皇帝に近い場所に宮を賜るということは即ちそれだけ皇帝の寵愛が深いということを意味する。

同時にそれは閨を共にする機会も増えるということでもあるのだ。

皇帝が何を考えているかは知らないが、どう転んでも青霞のよいようにはならないのは明らかである。

——季圭様以外の方に抱かれるなんて・・・。。

沈香の落ち着いた薰りが室内を満たし、仄暗い灯りが幾重もの御簾と珠簾で仕切られた寢所を照らす中、「貴妃」となった青霞は皇帝の訪れを一人待っていた。

黒髪が指の間を滑るように流れるまで丁寧に梳き、化粧を落とした

顔に肌が荒れないよう刺激の少ない漢方が配合された化粧水を慎重に塗った月梅は、素顔のままでも月明かりのもとだけでも清楚で柔らかな美貌の少女に内心驚きながらも（むしろ化粧など邪魔なくらい、素顔の彼女は美しかったから）、これならきつと女の好みの煩い皇帝も気に入るに違いないと満足して、静かに主の寝所を後にしたのだった。

すべての準備が整うと「陛下がいらっしゃるまでしばしお待ちを」という言葉とともに侍女達がすべてさがってしまったことで、青霞は不安と緊張の時間を一人で過ごすことを強いられた。

絹糸のようになるまで丁寧に梳られた長い黒髪を背に流し、白い薄絹を纏った青霞は鏡に映る己の青褪めた顔を眺めながら夫以外の男と閨を共にすることへの嫌悪感を必死に堪えていた。

ここで下手に逆らって皇帝を怒らせるようなことでもあれば、実家はおろか王家にまで懲罰が下されるかもしれない。

皇帝の権威の前には誰も逆らえない。

だからこそ、涙をのんで父親である郭永は娘を後宮に入れることを決断し、王家もまたその理不尽な仕打ちを黙って受け入れるしかなかったのである。

——権力があるというのは、こういうことなのね。

青霞は今まで、自身が恵まれた環境にあったせい、権力や出世とということについてあまり考えたことがなかった。



名門貴族の家に生まれ、嫁いだ先もまた名門一族、しかも夫は若くして軍を自らの手足のように動かすことのできる最高位の将軍である。

そんな環境で、それ以上を望むことのほうが難しかっただろう。

しかし、王懿は皇帝に仕える身。  
あくまで臣下なのだ。

どんなに官僚として権力を持っていようとも、それは皇帝あつての権威。  
他のどんな人間を捻じ伏せることができても皇帝にだけには、それは通用しない。

何故なら、その「権威」は皇帝から授けられたものだから。

「何を考えている。」

己の思考に沈みかけていた青霞は、後ろから突然声をかけられてヒクリと身を震わせた。そして戦々恐々として背後を振り返った。

予想通り、御簾の向こうには青霞と同様白い薄絹に蒼い長衣を羽織った長身の男性が立っていた。

宛紀国皇帝・宋瑛。

昼間、乾清宮御座の間で拝謁したものの、間近でその姿をはっきりと目にするのはこれが初めてである。

広い寝台の傍らで身を硬くして頭を下げる青霞の耳に、チリチリと珠簾がぶつかり合う音が聞こえた。

宋瑛が、寝台に・・・彼女の元に近付く音である。

「面を上げよ。」

頭を垂れた青霞のすぐ傍で、威厳に満ちた若き皇帝の張りのある低い声がした。

だが、青霞はすぐにはその言葉に従うことができなかった。

皇帝を恐れたのではない。

自分と愛する夫を無残に引き裂いた張本人を前にして冷静でいられる自信がなかったのである。

「ふん。此処まで来て臆したか？」

嘲笑するような声が頭上から降ったかと思うと、男にしては繊細な

細く長い指が彼女の華奢な頤を掴み、青霞は強引に顔を上げさせられた。

青霞の黒曜石の瞳いっぱい、武人というには繊細すぎる真冬の月のような冴え冴えとした、どこか夫の面差しを残した美貌が映る。

皇帝が頭脳だけでなく容姿もまた極めて優れた男性であることは既に聞き及んでいた青霞であったが、予想を遥かに上回る美神のような姿に、驚きを隠せなかった。

そして次の瞬間、皇帝への恨みで一杯だった脳裏にふと一つの疑問が浮かんだ。

——このように何もかもに恵まれた神の寵児のような方が、何故わざわざこんな無茶をしてまで自分を？

一方、宋瑛は瞠目して自分を見つめる青霞を冷静に見下ろすと、無理矢理手に入れた女を間近にして自分の見立てが間違ってたかったことを確信しひどく満足していた。

「……以前は、深く被った布が邪魔をして正面から彼女を見ることが出来なかったから。」

「やはり、美しいな。……だが、そなたはいまだ咲きかけの華よ。大輪に咲いた暁には、この国に並ぶものない見事な華になるであろう。余が、咲かせる。そなたは今宵から、余のためだけに咲くのだ。」

冷たく、傲慢な口調でそう言つてのけると、宋瑛はその細身から想像がつかないほどの力で青霞を軽々と抱き上げ、寝台へと放り投げた。

褥に敷かれた上質の白絹の上に、青霞の艶やかな長い黒髪が扇のよう広がる。

そのしどけなくも妖しい色香に、一瞬心を奪われたように動きを止めた男は、しかし、青霞が慌てて体勢を整えようとするのを許さずそのまま折り重なるようにして素早く彼女の上に身を乗り上げ、その手足と細い肢体を簡単に抑え、蝶の標本のように白い褥の上に張り付けた。

身動きのとれなくなった青霞は、屈辱と怒りに満ちた目でのしかかってくる宋瑛を無言で睨みつける。

その反抗的な眼差しに何を思つたのか、宋瑛は不意に笑い出した。

「くく。やはりそなたは余にふさわしい女よ。余が憎いなら憎めばよい。だが、何があろうと季圭の元へは二度と戻さぬ。そなたは余のもの。余の為だけに狂い咲くがいい。」

それだけ言うと、あとは言葉は無用とばかりに宋瑛は青霞の白い夜着の合わせ目にゆっくりと手を入れると、いきなり引き裂くように衣を剥ぎ、現れた白く滑らかな肌に形の良い唇を淫靡に這わせてゆくのだった。

男の力に対抗する術のない青霞は、己の非力さに口惜しさを隠せずきつく朱唇を噛み締め、それでも最後に残った矜持によって必死に

涙が溢れるのを堪えながら、あとは男の欲望に身を任せるより他なかった。

——力が、欲しい。誰にも踏みにじられることのない絶対的な力があつたなら……。

夫以外の男にその身を好きのように弄ばれながら、青霞はただひたすらそのことだけを呪う様に思い続け、手練手管に長けた男の愛撫に必死に声をあげるのを堪えた。

なす術なく蹂躪されてゆく我が身。

誰も、彼女を助けてはくれない。

すべてを他人事のように感じながら、青霞は自分の中で何かが罅割れる音を聞いたような気がした。

その夜。

宛紀国随一の軍師に最も大切に愛でられた可憐な梨花は芳香と共に花開き満開の花弁を散らす前に、美しくも残忍な支配者に無残に枝ごと手折られ。

代わりに歪な妖艶さを放つ徒花が一輪、後宮という名の壮大な庭に根を下ろし一際鮮やかに咲き誇ることになる。

青霞の夫、宛紀国大將軍・王懿が宋瑛の包囲網を掻い潜って生き延びた間者によって、自身と妻の身に起きた悲劇を知ることになるのは、それから間もなく。

長安の長い冬がもうじき終わろうとしていた頃だった。

暗雲が密やかに全盛を迎えようとしている宛紀を覆ってゆく。

そのことに気づいている者は、ほんの一握りの人間のみ。

残酷な運命の歯車は、まだ回り始めたばかり。

真の悲劇の幕はいまだ上がってすらないのだった。

## 第二章 皇帝 3

春はまだ遠い冬夜の月は美しい。

身を刺すような冷氣に白い息を吐きながら、甄后は自身の住まいである儲秀級へ向かう回廊でふと足を止め、夜空を見上げた。

地上の人間達が織り成す愛憎劇など知らぬ氣に、常と変わらぬ煌々と眩い光を放つ白い月に微かに表情を曇らせ視線を反らせた彼女は、月華門の方向へよどみない足取りで歩いてくる人物に気づいた。

相手も、甄后の存在に気づいたのだろう。

互いに向かう先は違えど、回廊と回廊が交わる踊り場で甄后が足を止めていたのだから、嫌でも顔を合わせなければならぬ位置だった。

遅くまで養心殿で執務を行っていた王懿は、軍職では最高位の大將軍であるが、甄后は彼が仕えるべき皇帝の正妃。つまり皇后である。従って、身分が下の王懿が皇后である甄后を無視するわけにもゆかず、すれ違う手前で足を止め優雅に頭を垂れた。

——こんな時刻に皇后が供も連れずたった独りきりで回廊に佇んでいることに疑念を抱きながら。

そんな王懿に複雑な視線を投げかけていた甄后だが、大將軍が予想したように彼女がすぐにその場を立ち去る気配は見せなかった。訝しげに顔を上げると、華北一と謳われた美貌が冬の峻烈な月光に照らされ、女盛りの妖艶さを惜しげもなく闇夜に浮かび上がっていた。

表面的な「美しさ」にあまりこだわらない王懿でも思わず感嘆せずにはいられないその美貌の主は、静かに彼に声をかける。

「お久し振りね、季圭様。・・・この時刻まで執務をしていらっしやったのですか？陛下はどうにほろ酔い加減で今宵の月を愛でていらっしやるというのに。」

淡々と語る言葉の中に彼女の夫である宋瑛への皮肉が遠慮なく込められたその物言いには、夫への呆れと全てに対しての諦めが混じっていた。

王懿は、彼女もまた複雑で危うい立場に追い遣られていることを思い出しながら用心深く口を開いた。

「今宵の月は格別に美しくございますゆえ・・・。このところ南方の動きに対して厳しく政務にあたられて宴の一つも開く間もなかったことを考えますれば、たまの宴も気晴らしに良いのではありませんか？特に陛下は優れた文才と風流を解する方ですから、今宵のような月に惑わされても不思議はありません。」



臣下としての礼を失することなく、伶俐な美貌を凍らせたままよどみなくそう言つてのける王懿に、甄后はその胸の内を見透かすようにあえて挑発的な微笑みを浮かべた。

「月は月でも、陛下が愛でているのはどこぞの湖に映った水面の月。しかも、月を気に入ったあまり湖面からこの狭い後宮の池へと強引に掠め取ってしまったほど。

……可哀想に。月は、今も湖を恋しがっては日々泣いているそうですわ。この話、どう思ひまして？ 季圭様。」

「……相変わらず、意地の悪いことを仰る。」

苦虫を噛み潰したような王懿の顔に、甄后は満足そうに笑った。

こうして二人で言葉を交わすのは、――華やかな事柄を好んだ宋操が度々開いた最期の宴席――宋操が亡くなって以来であった。

辺りには誰もいない。

広く長い回廊を誰かが通ったなら、衣擦れ一つ響く夜の静寂の中であれば。すぐに察することができらるだろう。

その状況が、思わず甄后に本音を吐かせた。

「宴は、後宮の最奥。御花園で催されておりますわ。高台に設けられた陛下の隣に座する事を許された女は妾と貴妃のみ。ですが、この宮廷において皇后を敬う者は一人もおられません。」

齡を重ねたとはいえ、衰えどころか気品ある美しさに一層深みを増した孤独の皇后は、それでも凜とした姿勢を崩さなかった。

だが、その内に潜む深い孤独はこれまで王懿の中に深く押し込められていた複雑な心中をかき乱した。

しかし、王懿は甄后にかける言葉を持たなかった。

何故なら、もともと宋瑛が彼女を皇后に立后した時すでに冷え切っていたとされる夫婦関係をさらに疎遠にさせた原因である「郭貴妃」は、彼の元・妻なのだ。

しかも、戦乱のどさくさに紛れて愛妻を強引に奪われたというのが実情の彼は、どう見てもこの仮面夫婦の被害者であった。

確かに、王懿の妻、郭青霞が「郭貴妃」として後宮に召され日々皇帝の寵愛を独り占めすることによって、皇后としての甄婉容の立場がますます周囲から軽んじられる存在となっているのは事実である。

だからといって、甄后に恨み言を言われる筋合いは王懿にはない。むしろ、宋瑛が自分の妻へのあてつけの為に（或いは自分への嫌がらせだろうか）何の罪もない己の妻を強引に奪われた王懿の方が、彼らへの恨み辛みは多かっただろう。

愈南の北伐に備えて長安に長く滞在しなければならなかった隙に、まんまと妻を奪われた時の屈辱。

自分の不在をいいことに、巧妙に情報操作し（それでも王懿自身の間諜によって、おぼろげながらも実体は把握していたが、現実には動けない状況を作り出し）まんまと王懿を出し抜いた宋瑛に怒り心頭し今にも宮廷に乗り込んで行きそうな勢いの彼を、彼自身のため、一族のため、ひいては青霞のためだと泣いて舅に諫められた時のことを思いだしながら、その時の腹が煮え繰り返る思いとやるせない虚しさを王懿は少しも忘れてはいなかった。

どうして忘れることができよう。

あれほど大切に、誰にも奪われぬよう細心の注意を払って護り愛した妻を。自分だけを生涯唯一人の夫だと恥ずかしげに、だが強い意思を秘めて誓ったあの春の化身のような儂げな少女を。

誓いは無残に踏みにじられ、権力という壁によって二人は想いながらも隔てられた。

王懿はそのことをけして忘れない。

すべては、「力」あってこそ。……。

微かに頭を垂れ臣下の礼を取りながらも、無表情で沈黙する王懿の心中をどうとったのか皇后は再び遠い瞳で遙か上空で輝く白銀の月を見上げた。

「最初は、きっと幸せな貴方が許せなかっただけなのですわ。」

おもむろに口を開いた甄后を、王懿は今度は何を言い出すのかと怪訝に思ったが、黙って耳を傾けた。

「陛下は、貴方のことを自分の半身のように思っておりましたから。……だから、その貴方が誰かを『愛し』自分よりも『幸せ』になるなど……御自分がけて手に入れられぬものを手に入れて『幸せ』になったなど、認めたくはなかったのでしょうか。」

その言葉に、王懿は宋瑛が実の父親である宋操から疎まれていたこと、後継者争いで同母弟と骨肉の争いをしなくてはならなかったこと。そしてそれが原因で結果的に実母もまた彼から離れていったことを思い浮かべた。

宋瑛は、卓越した政治手腕だけでなく武芸に秀で父親譲りの文才をも持つまさに文武両道の明君だった。

しかし、神に愛されたと思えないその優れた才能や容姿に反し、彼は常に孤独だった。

肉親は数多くあれど、誰一人「彼自身」を見るものはおらず。

必要とされていたのは宛紀王・宋操の「後継者」としての資質のみ。

そんな中、それまで従順に従っていた父親に反抗を示すように張家の次男の妻であった甄夫人を奪い、自らの妻にしたことがさらに彼の孤独を深めることになったのかもしれない。

今にして思えば、それは宋瑛なりに父に認めてもらいたい一心の暴挙だったのかもしれない。だが、物事はすべて悪い方向へと進んでいった。

当時すでに「華北一の美女」と名高い高貴な華、甄夫人を宋操もまた欲していたゆえに、宋瑛の行動はむしろ親不孝な行為とみなされ、彼はますます兄弟の中でも冷遇された。

せめて、甄夫人と宋瑛の仲が上手くいっていたなら宋瑛もあそこまで歪むこともなかったのだろうか。

寒空の下、月を静かに仰ぐ美女を覗いながら、王懿はこの佳人の数奇な運命と己が妻の悲運の皮肉な交差をやるせない思いで辿った。

「最初は、自分だけ『幸せ』を手に入れた貴方への復讐。ほんの、悪戯心でしたのよ。」

・・・でも、あの方を迎えられて陛下は変わりました。」

凍てついた空気を、甄后の涼やかな声が張り詰めた糸を弾くように震わせた。

「今は、陛下は貴妃殿に本気ですわ。でも、貴妃の心は貴方のもの。今度もやはり陛下の想いは届かない。解っていながらそれでも尚、欲する。陛下のお心は・・・そう。まるであの月を想うようなものです。」

それでは宋瑛は甄后の時と同様「身体は手に入れたが、心を手にする事は出来ない」生殺しのような状況にあるということか。

抽象的な甄後の言葉から聡い王懿は即座にその真を読み取った。

もし。

その言葉が真実で。

宋瑛が報われぬ物狂おしいまでの恋情に身を焦がしているとしたら。

よい気味だと思う。

だが、同時に哀れにも思った。

冷酷無情に振舞ってはいても、彼がどれほど「愛情」というものに飢えているのか知っているだけに、実の弟達よりも長く時を共に過してきた王懿にとって、ある意味実弟よりも近い存在の弟のような宋瑛がまだ報られない愛に苦しんでいるという事実は、彼にとってもやはり辛い真実だった。

確かに、妻を奪った宋瑛を憎んでいる。だが同時に今でも王懿の中には、孤独で不器用すぎるゆえに優しさを上手く表現できない子供の頃の宋瑛が「兄」として自分を求めている姿がある。

どんなに成長し冷徹な君主になろうとも、王懿にとって宋瑛は血の繋がった従兄。実の弟よりも長い時間をともに過ごした事実は消えない。

しかし、甄后が次いで放った言葉にその憐憫の情も霧散した。

「このまま、陛下の御寵愛が続けば、お若い貴妃殿は『御懷妊』という慶事に恵まれるかもしれませんわ。そうすれば、貴妃殿は母親。御子を持てば、その頑ななお心も変わるかもしれませんわね。」

はっとしたように顔を上げた王懿と皇后の感情を映さぬ硝子のような瞳が、凍える宙でぶつかった。

甄后は妖艶に微笑む。

「生まれてくる子が女子であればそれは重畳。妾も素直にお祝い致しますしょう。ですが……」

キラリ。

甄后の漆黒の瞳が剣呑な光を帯びた。

その先を聞くまでもなく皇后の言わんとしている事が手に取るように判った王懿は、持っていた黒い羽扇を握り締める手に知らず力を入れていた。

「生まれてきた子が男子であれば。その子が我が子、元仲（宋玲の字）に災禍をもたらすようであれば、妾は容赦しません。」

宋瑛と甄后の間にできた一子、宋瑛の長男である宋玲がまだ立太

されていない今、もし寵愛する郭貴妃が男子を産んだ場合、その子が宋瑛の後継者として立太する可能性は大いにあった。

そうなった場合、生まれ月から「宋瑛の子ではないのでは・・・」と陰口を叩かれている宋玲が辿る運命は悲惨なものであることは明白。

確かな後ろ盾があれば格別、不幸なことに、甄后にも宋玲にも王家を凌ぐほどの後ろ盾はなかった。

そういう意味では、郭貴妃は実家に権力がないとはいえ都でも一、二を争う名家の出身であり元夫の実家、王家も事情が事情だけに郭貴妃に肩入れするのは確実。貴妃もまた、未だに実家の郭家との繋がりが深い王家を優遇するのは当然であろう。

何より、王家の長である王懿はいまだ彼女との離婚を認めていないのである。

実質はともかく、離縁状が正式に届け出されていない以上、郭貴妃は皇帝の側室でありながら形式的にはいまだ王懿の正室なのである。

そんな彼女が生んだ子を、王家が後見しないはずがない。

皇帝の貴妃への寵愛に加えて、確かな出自と強力な後ろ盾。

これだけの要素が揃ってしまったら、出自すら疑われている愛しい我が子の命運など風前の灯火である。

賢明な甄后はその事態を一番恐れた。



自分のことはいい。

「美しい」と褒め称えられるこの器のおかげで、時の権力者の間を翻弄されながらそれでも権力に阿るまいと必死で自分の「意思」を貫いて戦ってきた。その頑なさが結果として夫との溝を深めてしまったがそれも自分の選んだ人生だと思えば諦めもつく。

しかし、そんな自身の在り様のせいで、愛しい我が子が父親から嫌悪され遠ざけられるという悲劇に追いやってしまったことだけが悔やまれてならなかった。

甄婉容は、宋瑛のことが嫌いなわけではなかった。

だが、権力を振りかざし力づくで他の男の妻だった自分を、強引に己の妻にした男にどうして素直に心を開くことができよう。

せめて宋瑛が、もう少しだけ己の感情を素直に表現できる人となりであったなら、こんなことにはなっていなかっただろうに。

自分よりも4歳も若い二度目の夫が、本当は心優しい孤独な青年で、己が真実求めているものすら解らないほど不器用な一面をもった愛すべき人間であったことに甄后が気づいた時はすでになにもかも遅すぎた。

夫婦の溝はどうしようもないほど深く、取り繕うしまもないほど宋瑛の心は甄后から遠く離れ、もはや近づく余地はなかった。

しかし、甄后は心のどこかで自分が歩み寄れば、あとは時間が解決してくれるだろうと楽観的に考えていた。

だが、現実には。宋瑛は彼女に話し合う機会すら与えず。

宋瑛の正室として、彼の皇帝即位とともに「甄后」と呼ばれる立場になろうとも夫婦の仲は一向に変わることなく、二人の距離は開くばかりであった。

息子のためにも何とかしなくてはと思いつつ、これ以上自分から宋瑛に歩み寄る努力を見せることは、甄后の誇りが許さない。

そうこうしているうちに登場したのが、かつての「洛陽一の美女」との誉れ高い佳人を母にもつ、郭貴妃という若く可憐な側室である。

これまで、宋瑛は気紛れに後宮の華を手折ることはあっても、夜毎同じ華を愛することはなかった。

しかも、後宮に何千と咲くどの華も美しさも才気も出自という点においても、甄后を脅かす存在ではなかった。

もっとも、眞王室最後の皇帝・献帝の娘である李貴人と陰貴人は別格だが。

この二人に子を生ませる危険性を十分理解している宋瑛は宴に呼んだり、贈り物をしたりとそれなりに気遣うそぶりは見せるものの、閨に呼び寄せた形跡は皆無だった。

しかし、郭貴妃は違う。

そもそも、いまだ正式に離縁の成立していない女に皇后に次ぐ「貴妃」の位を授けること自体が異例中の異例なのだ。

王懿に話したように、おそらく最初は心許せる本当の兄とも思っていた王懿への嫌がらせ……そのうち返すつものの、ちょっとした悪戯を仕掛けただけだったのだろう。

甄后はそう思って、あまり深刻には捉えていなかった。

まさか、腹心中の腹心、自分の兄弟よりも近い存在である王懿からその最も大切なモノを奪うなどと、いかに宋瑛が傲岸不遜で冷徹な人間だとしても、ありえないと高を括っていたのである。

しかし、貴妃を目の前にした宋瑛の視線を見て、傍らにいた甄后には判った。

皮肉なことに、仮面夫婦と云われながらも長年夫婦をやっていたら、それくらいのことは空気で判るのである。

——陛下は本気で貴妃を欲している。

それは、もはや自分達夫婦の関係が修復されることはないという、宋瑛からの無言の最後通牒でもあった。

「妾は、もう良いのです。自分の人生はとくに諦めました。ですが、元仲は……」

固い決意を秘めた甄后の瞳が、真っ直ぐに王懿を射抜いた。

「息子を守るためならば、妾は、どんなことでもしますわ。ええ、どんなことでも。」

それだけ告げると、甄后は自らの宮へ戻るべく歩を進めた。

そして、王懿とすれ違う瞬間。

「皇后陛下がそのお覚悟なら。私も、覚悟を決めましょう。」

すれ違う二人の視線は正反対の方向に向かっており、けして交わることはない。

だが、夜の静寂の中、王懿の低い声は、甄后の耳にはっきりと届いた。

「貴女が、青霞を脅かすというのならば、私は全力でそれを阻止するまでです。」

「貴方の妻でもない女を、命を懸けて守ると？」

「青霞は私の妻です。今もこれからも。」

その言葉に、甄后はほんの少しだけ羨望と嫉妬の眼差しを飛ばしたが、彼女に背を向けている王懿に判る筈もなく。

気を取り直すように昂然と頭を上げると、甄后は嘲笑した。

「後宮は、妾の庭のようなもの。男子禁制の花園でどうやって貴方の大切な華を守るおつもりかしら？」

その言葉に、今度は王懿がぞっとするうような残忍さでもって応えた。

「方法などいくらでも。私が、どうやってこの地位に就いたのかお忘れなく、甄后様。」

それは甄后が初めて見る、愈南の天才軍師・関寧と正面きって張り合える唯一人の鬼才、と宋瑛をもって言わしめた冷徹な策略家としての王懿の顔であった。

宋瑛とは違った背筋の凍るような畏怖を覚えながらも、それでも甄后は竦む歩みをけして止めることなく言い放った。

「ならば、やってみるがいい。妾は、例え貴妃と刺し違える事になっても、元仲を脅かす存在をけして許しませんわ。ええ、どんな手を遣っても。……そのために、この身がどうなろうとも。」

そのまま二人は、二度と言葉を交わすことなく互いに違う方向へと歩み去った。

皇帝・宋瑛の寵愛を一身に集める郭貴妃が懷妊したという慶事が宮  
廷中を駆け巡るのは、この三月後のことである。

## 第二章 皇帝 4

冬月の美しい夜。

王懿と甄皇后が静かに、だがひどく物騒な火花を散らせていた頃。

「月を愛でる」という名目で催された盛大な宴席で、青霞は宋瑛の隣に静かに座していた。

宴席に設けられた皇帝の両隣には二つの席が整えられていたが、その一つを埋めるはずの皇后・甄夫人が早々に退席してしまったため、他の者よりも数段高い御座に居るのは宋瑛と貴妃である青霞だけ。

そのことを若き皇帝が気にかけて様子もなく。

むしろ、甄皇后が早々に退出してしまったことで肩の荷が下りたといわんばかりに寛いだ表情を見せていた。

そして、傍らの青霞に対し憚ることなく寵愛の深さを示してみせる。

その度に、下座にいる側室達の嫉妬と羨望の視線が青霞に突き刺さり、青霞はひどく居心地が悪かった。

もともと、深窓の令嬢である青霞は衆人環境に出ることに慣れていない。

その上、彼女の一举一動に同席する女達の視線が集まるのだから、宴など楽しめるはずもなかった。

疲れたようにそつと吐息を漏らした青霞に真っ先に気づいたのは、やはり傍らに座る宋瑛だった。

冷酷、残忍、非情、と身内や外戚、政敵に対する扱いからそう呼ばれることの多い宋瑛であったが、不思議と青霞に対してそのような振る舞いを見せたことはこれまで一度もない。

聡明な彼は、そのような態度の片鱗でも見せれば、ただでさえ遠い貴妃の心が決定的に離れてしまうことを十分理解していたし、青霞もまた育ちの良さからか元来の性格なのか、本来あるべきあずの彼女幸せを完膚なきまでに破壊した張本人だとは判っていても、わざわざ自分のために心を砕いてくれる人に対しあえて礼を失するようなことはできなかった。

だからこそ、宋瑛は殊の外気に入っているこの貴妃の心をあえて自分から遠ざけるようなことはしたくなかったのである。

憎まれてはいるかもしれないが、完全に嫌われてはいない。ならば、その心が自分の方へ向くよう優しく配慮してもよいのではないか。時に、獲たいものがあるのならそのために多少の譲歩も必要であろう。宋瑛は貴妃についてそう考えていた。

それは、彼が正室である甄皇后との確執で学んだ唯一の教訓なのかもしれない。

だが、宋瑛にとって甄皇后と郭貴妃とでは決定的な違いがあった。

二人とも大貴族出身の深窓の令嬢で、「傾城」と呼んで遜色ない美



貌の持ち主であるが、甄皇后はその美貌ゆえに複雑で悲劇的な人生を強いられたお陰で、そこから培われたのは時として皇帝に逆らうことも辞さない生真面目すぎるほどの確固たる誇り高い意思であるのに対し、郭貴妃は生れ落ちた時から両親の深い愛情に包まれ、結婚してからも夫の王懿から宝玉のように大切にされてきたという経緯から、どんな相手に対しても非情になりきれない優しさと弱さがあつた。

慈悲深い彼女は、徹頭徹尾他人を憎むということができない。

そして、どんな人間からも相手の美德を見出し認めてしまうという柔軟さがあつた。

苦勞知らずの育ちの良さからくるこの美德は、宋瑛にとって愛すべきものであり付け入る隙そのものであつたが、当の本人にとってはただ己の心中を複雑にするだけの厄介で「流されやすい」性質でしかなかった。

そう。

短い間であるが、閨を共にし、時間が出来れば几帳面に通ってくる宋瑛を、青霞は完全に恨みつくすことができなくなっていたのである。

この残忍だが眉目秀麗な皇帝の生い立ちとは、父や夫から聞いたことがある。

有り余るほどの愛情と温もりに包まれて育った青霞からすると、宋瑛という人物は恵まれた彼女には想像のできないほど、あまりにも気の毒な境遇だった。

他の兄弟に劣ることのない才能を持ちながら、父・宋操からは最後まで息子として愛されることはなく。

側近の暴走から始まった本人同士は意図しない実弟・宋植との跡目争い。

そして、政権の安定のために放逐した弟の処遇を巡って実母からも見放され。

正妻である甄夫人とは、心の通わぬ仲になって久しく。

亡き父の悲願を継ぎ、あえて篡奪者の汚名を着ることを覚悟で「皇帝」の座に就いた宋瑛。

もしかすると、彼が唯一心の許せる相手は、年少の頃より時を共にしてきた王懿だけだったのかもしれない。

後宮に入り、「宋瑛」という人間に長い時間直に触れてゆくうちに青霞はふとそう思った。

あまりにも孤独すぎるこの人は、あえて孤高を好む王懿こそ心の拠り所だったのかもしれぬ、と。

だとしたら、自分と王懿との幸せな結婚は宋瑛の目に、一体どのように映ったのだろう。

すべての事の発端はそこにあるような気がしてならなかったが、現実には夫である王懿と生木を裂くように引き離され「貴妃」として皇帝の傍らにいる今、それは聞いても詮無いことであつた。

白い顔をさらに白くして俯いた青霞を氣遣うように、宋瑛はそつと声をかけた。

「疲れたのか？」

その声に滲むいたわりの色に、青霞は涙が出そうになる。

宋瑛が、世間の噂通り残忍で残酷で尊大な人間だったならどんなによかつただろう。

そうであれば、青霞は躊躇う事無く彼を憎み続けることができたのに。

実際の皇帝は、これまで耳にしていた噂はすべて偽りであつたのではないかと思うほど優しく、細かな氣遣いを貴妃でしかない自分にしてくれた。

それは、表立ったものではなかったが青霞の身の回り、細部に至るまでの心遣いがすべて宋瑛からの指示であると聞かされたことから判る。

優しく繊細で不器用。

それが、宋瑛という人間を形作っている真の核なのだというところに、青霞は気づいてしまった。

それは、皮肉にも今尚「夫」と慕う王懿の性質に良く似ていた。

だからこそ余計に、青霞は宋瑛を憎みきることができない。

宴酣な雰囲気壊すのも気が引けて、青霞は僅かに眉を寄せて案じるように自分を見ている宋瑛にむかって、無理に微笑んでみせた。

「大丈夫です。……どうやら少し、酔ってしまったようですわ。わたくし、あまり御酒には強くないものですから。……少し外の空気を吸えばそれもよくなりましょう。」

そう言って、席を立とうとした青霞の腕を、おもむろに取ると宋瑛もまた席を立とうと腰を上げた。

驚く青霞を尻目に、宋瑛は淡々と告げる。

「この宴は、そなたの為に開いたもの。主役が中座するというなら余も立たねばならぬ。」

「そんな。皆、まだ楽しんでおりますわ。陛下が退席されては……」

「案ずるな。我らがいなくとも宴は続くであろう。……それ

よりも、そなた、顔色が悪い。早く宮に戻り薬湯を準備させねば。」  
これ以上の問答は無用とばかりに、宋瑛は強引に青霞を連れて退出しようとする。

ただでさえ、女達の嫉妬と注目的であるのに、これ以上衆人の目を引きたくない青霞は慌てて席に座りなおした。

「お待ちください。わたくしは大丈夫・・・陛下まで中座されるほどでは・・・。」こうして宮廷楽師の見事な音曲に耳を傾けていれば、いずれ気分も晴れましょう。」

その青霞の言葉に何を思ったのか、宋瑛はさも良い案を思いついたように機嫌よく潘淑妃に声をかけた。

「そういえば、潘。そなたの舞は都一と謂われるほど見事なものであるが・・・。」ここしばらくそなたの舞を見てはおらなんだ。どうだ、ここで一指し舞ってみぬか？」

それは問いの形をした命令であった。

気分の優れぬ貴妃のために、舞を披露してみせると、残酷にも皇帝は命じたのだ。

それを聞いた青霞は、思わぬ成り行きに青い顔をさらに青くし、皇帝からの言葉を待ち焦がれていた潘淑妃は予想外の要求に、屈辱のあまり身を震わせた。

だが、ここで皇帝の要請を断れば淑妃の寵愛は永遠に終わるだろう。それが解っているだけに、潘淑妃はしなやかな所作で立ち上がると「陛下のお望みであらば」とさりりと前置きし、流れるような動作で早咲きの紅梅を一枝手にすると皇帝と貴妃の座る高台と側室達の卓の間に設けられた深紅の敷き布の上に毅然と立った。

淑妃の動作にあわせるように楽師達が奏で始めたのは「雪衣女」という冬にふさわしい哀しくも狂おしい愛に身を滅ぼす女の人生を謳った曲だった。

長らく公の場で舞うことがなかったとはいえ、藍を基調とした長く薄い衣を何枚も纏わせ月光のもとで天女のように軽やかに身翻す潘淑妃の舞は、洛陽一と皇帝が認めるほど優艶で見事なものだった。

だが、その舞に込められている淑妃の皇帝への想いと邪魔者以外の何者でもない貴妃である自分への憎悪を知る青霞が素直に楽しめるはずもなく。

結局、その場の雰囲気と渦巻く女達の思惑に耐え切れなくなった青霞から、今にも倒れそうなほど弱った風情を見て取った皇帝は舞続ける淑妃さえも眼中にないがごとく、貴妃を連れて宴席から立ち去った。

突然立ち上がった皇帝と貴妃に宴に、参加していた者は一瞬にして静まり、流れる楽はそのまま舞のために掲げていた紅梅をゆっくりと下げ、潘淑妃もまた皇帝の所作に注目した。

皇帝には媚と服従、貴妃には嫉妬と嫌悪を視線に込めて。

あまりに激烈な悪意に思わず俯く青霞。

宋瑛は、慣れた様子でそんな女たちに一言放った。

「今宵の貴妃は加減が悪い。余も久方ぶりの月も酒も堪能した。皆はそのまま宴を楽しむが良い。」

皇帝の言葉に、様々な思惑はあれるものの皆一様に頭を垂れた。

そして、宋瑛は青霞を連れて堂々と宴席を後にする。

水を打ったように静まり返った宴の席。

二人の姿が完全に、夜の暗闇の中に消えた後。

堪え切れず第一声を発したのは、潘淑妃だった。

「なんて女なの！ 気分の悪い振りをして陛下を独り占めするなんて！」

手にしていた紅梅の枝を投げ捨て、傍らにあった翡翠の玉杯の酒を一気に飲み干すと、淑妃は吐き捨てるように苦々しげに呟いた。

「あらあら。それは淑妃様のお見立て違いですわ。貴妃様は本当にお加減が悪そうでしたもの。やっかみが入ると、お目も曇られるのですわね。わたくしも気をつけなくては。」

たつぷりと毒を塗りたくった揶揄の言葉をかけたのは、陰貴人だった。

真冬の月にふさわしい鮮やかな薄氷の衣を纏い紅瑠璃の唇の端を吊り上げて微笑む姿は、宮廷の女はかくあらん、というお手本のように典雅であったが、今の淑妃にとっては忌々しい以外の何者でもなかった。

「顔色など、陛下の寵を自分に引き止めておくためなら幾らでも変えられるでしょう。それとも、あの女の虫をも殺さぬ優しい面差しに騙されましたか？元・公主ともあろう御方が。……ああ、貴女はもう公主様ではありませんものね。零落した皇帝の庶子など、所詮その程度でしかないのですわ。」

潘淑妃のあからさまな言葉に、その場に居た者は凍りついた。

陰貴人と李貴人が眞王朝最後の皇帝・献帝の娘であり、母親の身分の低さゆえに「公主」となりえなかったことは周知の事実だったが、そのことはこの後宮において触れてはならない暗黙の了解となっていた。

零落し、廢帝に追い込まれたとはいえ二人は「皇帝」の娘である。

ゆえに血筋、身分を重んじる傾向にある後宮においては、この二人の位置は非常に微妙であり、他の側室・宮女達は腫れ物に触るような態度でこの二人の姉妹に接していたというのに。

酔った勢いと貴妃に揶揄された形となったとはいえ、あえてその禁忌に触れた潘淑妃に陰貴人がどうするか、宴席にいた女たちは息をのんで見守った。



しかし、彼女達が期待したような激昂も罵声も陰貴人の口から飛び出すことはなかった。

彼女は優雅に、あくまで品位を崩さぬ貴婦人然とした仕草で、そつと口元を袖で覆うと唇と同じ鮮やかな朱で縁取った切れ長の目を細めた。

「淑妃様は随分とお酒が回られている御様子。酔った勢いとはいえ、人前で本音を曝け出すなど、身分ある婦人の振る舞いとしては、まことにはしたなきこと。でも仕方ないですわね。淑妃様は、もともと『貴婦人』とは程遠いところで長年お過ごしになったのですもの。」

「なんですって?!」

冴え冴えと月光のように透る澄んだ陰貴人の声は、宴席に居た者すべての耳に嫌でも入った。

そして先程とは違う意味で、皆互いに顔を見合わせ肩を竦めた。

潘淑妃が高級とはいえ市井の妓楼の妓女であったことは、陰貴人同様後宮の暗黙の了解だった。

しかし、後宮の者が陰貴人・李貴人に敬意をもって接するのに対し、潘淑妃は「体で皇帝を籠絡した妓女あがり」と半ば公然に宮女たちの侮蔑の対象になっていることは言うまでもない。

皇帝の寵愛が彼女の上にあったならば、彼女が次の帝位を継ぐかもしれぬ息子を産んでいれば。出自など問題にもならなかっただろうに。

しかし、宋瑛の淑妃に対する寵はほんの一時。

正室・甄夫人へのあてつけのために手をつけたのが切欠だったのだから、寵愛が長続きするはずもなく。

皇帝に即位し「淑妃」の位を授けたことでそれまでの義理は済んだとばかりに、皇帝は潘淑妃を遠ざけた。

元来、風流を愛する文武両道の名君・宋瑛の興を自分のもとに惹き付けておくには、淑妃はあまりにも教養と嗜みに欠けていたのだ。

それは彼女のせいではないにしても、それなりの身分の女が集められる後宮においては、女たちの物笑いの種になるには十分過ぎる残酷な事実だった。

最も痛いところを公衆の面前で揶揄され、淑妃は青褪めた。

怒りのあまり握り締めた玉杯を今にも目の前の貴人に投げつけかねないすさまじい形相で陰貴人を睨む。

しかし、当の陰貴人は涼しい顔でサラリと淑妃の怒りの矛先をかわした。

「それにしても、貴妃様は本当に御酒に酔われて体調を崩されたのかしら？」

突然変えられた話題に、淑妃は一瞬何のことか理解できない、というように呆けた表情をした。

その間の抜けた様子にクスリと笑うと陰貴人は、幼子に言い聞かせるように淑妃の耳元でゆっくりと囁いた。

「貴妃様がこちらにいらしてから、陛下は他の方と閨を共にしておりませんのよ。」

「・・・・・・・・まさか?!」

ようやく陰貴人の言わんとすることに気づいた潘淑妃は、朱唇をわななかせた。

「貴妃様は御懷妊なさっておられると?」

途切れた潘淑妃の言葉を繋げるように、そう問うたのはそれまでじっと事の成り行きを見守っていた李貴人であった。

「あくまで、推測です。まだそうと決めてかかるには早すぎるでしょうが・・・・・・・・おそらく・・・・・・・・その可能性は少なくありませんわ。」

珍しく心底樂しそうに陰貴人がそう告げるのを、潘淑妃は呆然と聞いていた。

「あの女に・・・・・・・・子供が・・・・・・・・?」

もしその子が男子であつたら、現状から考えて間違いなく宋瑛はそ  
の子を太子とするだろう。

そうなったら、郭貴妃は実質の「皇后」。もはや情愛の遠のいた淑妃である彼女に勝ち目はない。

あんな小娘に、陛下の寵愛だけでなく女としての最高位「皇后」の座まで奪われるのか。

「貴妃」不在の状態で「淑妃」の位に就いた潘淑妃は、甄皇后と皇帝の仲が冷え切っていることが明らかだけにひそかに、自分が「皇后」になる機会があるかもしれぬと考えていた。

それは、女であれば誰でも目指す高みだろうと、淑妃は思う。

しがたない市井の妓女が皇后になるなど、どんな立身出世物語にもない話である。だからこそ、彼女はその夢に縋った。

そうでもしなければ、皇帝の足が遠退いた後宮の一角で、虚しいだけの時間を正気で過ごすことなど出来なかったのである。

男子さえ産めば、それは夢物語ではなくなる。

ゆえに、潘淑妃は皇帝を自身を召してもらえよう陰ながら宦官や侍女を取り込み必死に策を弄していた。

しかし、郭貴妃の出現でその夢は潰えた。

もし陰貴人の言うことが現実になったら、郭貴妃は潘淑妃の夢を粉々に粉碎するだけでなく甄皇后をも脅かす存在となるだろう。

それは本来、彼女がなすべきことであったのに。

「そんなこと、許すものか……。」

一度は力なく椅子に座り込んだものの、その肘掛部分にギリりと爪を立てると、怨嗟の籠った低い声で淑妃は呟いた。

深い怨念を湛えたその双眸は現実を見ておらず、先程皇帝に手を引かれて退出した郭貴妃へとむけられていた。

そんな潘淑妃の様子を、陰貴人は面白そうに眺めた。

すべては、「終わり」を迎えるまでの茶番。

陰貴人にとって、他人の生も死も、痛みも喜びも哀しみも、残された人生を楽しむ為の余興の駒にすぎなかったのである。

## 第二章 皇帝 5

主役の去った宴席でそんな殺伐とした遣り取りがなされていることなど知る由もなく。

青霞の寝宮である長春宮へ向かうべく、宋瑛に連れられ長い宮殿の回廊を歩いていた青霞は不意に辺りが暗くなったのを感じ、ゆっくりと空を見上げた。

「まあ。いつの間に雲が……。」

にわかに暗くなった回廊の端で足を止めた青霞にあわせ、少し先にいた宋瑛もまた歩みを止める。

「今宵の天上は風が強いようだ。じきにまた月も顔を出すであろう。」

朱塗りの列柱に備え付けられた明かりに照らされ、闇の中に灰白く浮かぶ怜悧な美貌を見つめ、青霞は少しだけ笑った。

それは、苦笑にも自嘲にも見える複雑な微笑みだった。

しかし、青霞の瑞々しい華のようなかんばせに一瞬だけよぎったその微笑を、宋瑛は見逃さなかった。

「何が可笑しい？」

偽りは許さないとばかりに鋭い視線を投げてくる宋瑛に、青霞は再び雲間から顔を覗かせた白銀の月を見上げ、言った。

「特に大したことは……。ただ、あの月は陛下に似ていると……。そう思っただけです。」

予想外の返答に、宋瑛は困惑した。

彼の容姿を褒め称える言葉は数多くあるが、面と向かって「冬の月のような」とはっきり言われたのは生まれて初めてだった。

それは澄んだ夜空に浮かぶ白銀の月のごとく美しいと褒めていると同時に、煌々と輝く冷ややかな光が若き皇帝の非情さを暗に揶揄することになるから。宮中の人々は皇帝の伶俐な美しさを密かに「冬の月のごとく」と喻えても、そのことが皇帝の恪気に触れることを恐れけして表立っては口にしないのだ。

「……。それは、余があのように冷たいと、そう遠まわしに申しておるのか？」

「陛下。私は月に触れたことがないので、月が熱いか冷たいかなど判りません。私が言いたかったのは、陛下はあの月のように……。美しく寂しそうだ……。思っただけです。」

またもや宋瑛の想像を超えた青霞の応えに、青年は思わず引き締めていた薄い唇の端を緩めた。

「だが、余も月になったことがないのでな。月が天空で果たして寂

しいと思っているかどうか疑問ではあるな。」

「冬の月は季節の中でも殊更眩い光を放ちます。……本来であれば見えるはずの、周囲の小さな星を消してしまうほどに。月の周りは光輪だけ。冬の月は広い空で一人ぼっち。……寂しそうです。」

歌うように言葉を連ねながら、青霞はヒラリと薄紅を基調とした衣を翻した。

その足取りは、先程までの具合の悪さを忘れたかのように軽やかで、白銀の月光を受けて輝く大きな黒目がちの瞳は、磨きぬかれた黒曜石のようだった。

まるで今しも月へ舞い戻ってしまう天女のような青霞の姿に、宋瑛は少し慌てたように青霞の柳腰に手を置くと強引に自分の方へと引き寄せ包むように抱き込んだ。

すっぽりと宋瑛の腕の中に納まった青霞は、怪訝そうに自分を抱きしめる人を見上げる。

「陛下？」

「……何でもない。そなたは、体調を崩しているのだ。少し大人しくしている。……折角、宴を中座してきたというのに、ここで倒れられては困る。」

突き放すような言い方であったが、それが宋瑛という青年の感情表現の限界であることを青霞は知っていた。



本当は優しいのに、その3分の1も表に出すことの出来ない不器用な青年。

青霞が宋瑛に告げた答えは、半分嘘で半分真実だった。

彼女が冬月を見て真っ先に想ったのは、宋瑛ではなく夫・王懿の端麗な姿であった。

覆っていた雲を切り裂くように鋭い光を放つ白い月は、峻烈な王懿の性質そのものようだった。それでいて見る者の視線を惹き付けずにはいられない魔性の美もまた夫のそれによく似ていると思った。

冷え切った天空で孤高に輝く月は、美しいが寂しい。

王懿に類似する部分が多い宋瑛もまた、美しく、孤独だ。容姿だけでなく、性格まで似ている二人の男。

だが一人は皇帝という絶対的な最高の地位にあり、その権力でもって強引に青霞を奪い取った。それからずっと、そう長い時間ではないが青霞を傍らから離そうとしない。

それでは夫は？

王懿は、今も自分のことを時には思い出してくれることがあるのだろうか。

思い出して、自分がいないことを「寂しい」と思ってくれているだろうか。

それとも、もう別れた妻のことなど忘れてしまったのだろうか。

——私は夫が「幸せ」になることを望むことができない……。  
私は、醜い……。

皇帝の第一の寵妃と呼ばれ、女であれば誰もが羨む場所にしながら、青霞は自分が「幸せ」だとはけして言えなかった。

今も、心は夫のもとにある。

だが、もう二度と王懿のもとに戻れない以上、彼のこれからの幸せを願うのが王懿の「妻」としての最後の役割ではないのか。

そう想いながらも、青霞は王懿が自分以外の女を傍に置き愛でるのが許せなかった。

——ああ、なんて浅ましいの……。

何も知らず、幸せな明日が来るのだと何の疑問もなく信じていられた頃の純粋な自分に戻りたい。

青霞は心の内で慟哭した。

＊＊

冬月の宴から二月の時が経った頃。

宴を退席する口実だと誰もが思った青霞の体調はその後とも思わしくなく、あの日を境に床に臥せる日々が続いていた。

長い冬が終わり、広い長春宮の庭には見事な春の花が競うように咲き誇っているというのに、青霞はそれを楽しむ余裕がなかった。

陰貴人と李貴人の二人が見舞いと称して青霞の住まう長春宮を訪れたのはそんな折である。

いまだ体調のすぐれぬ青霞は、皇帝を向かえる寝室とは別の、宮殿の西端にある寝室で二人を迎えた。

「わざわざお運びくださったのに。こんな場所で……申し訳ありません。」

鮮やかな紅を基調に色とりどりの糸で華麗な刺繍が施された帷帳。その豪華な帷帳によって二重に仕切られた奥の褥に、郭貴妃は力なく横たわっていた。

「お気遣いなさらないでくださいませ。突然お邪魔した私達が悪いのですもの。」

陰貴人はやんわりとした口調でそう言いながら、寝台の傍らに用意

された椅子に腰を下ろした。

そして、青白い貴妃の顔を間近で目にし、美しさはそのまま今にも消えてしまいそうな儚げな様子に僅かに柳眉を上げる。

このような庇護欲を掻き立てられる儚い美しさは、巷で「女神」にも喩えられる美貌の皇后にはないものであるうと彼女は瞬時に悟ったのだ。その上で、後宮にいたどの女にもなかった品の良い柔らかさを持つこの貴妃への皇帝の寵愛は深まりこそすれ決して失われることはないのだろうことを改めて確信する。

事実、郭貴妃が病に倒れていたこの二月というものの、宋瑛は他の側室のもとへ行くわけでもなく倒れる以前と同様、この長春宮のみに足を運び続けた。

あまつさえ、体調のすぐれぬ貴妃を案じるあまりそのまま長春宮で一日を過した日もあったという。

それは、皇帝としての義務を重んじ、政には一切の妥協を許さない冷徹な支配者として華北に君臨してきた宋瑛を知る者にとっては天変地異でも起きたのかと驚くほどかつての皇帝からは想像のつかない宋瑛の心境の変化であった。

「それにしても、お顔色が悪いですわ。陛下もさぞかし、気を揉んでおられることでしょう。・・・で、侍医のお見立ては何と？」

細心の注意を払ってさりげなさを装い、陰貴人は抜かりなく探りを入れる。

彼女が青霞を尋ねてきたのは他でもない。先日 of 宴で潘淑妃を煽るために言った言葉の真偽を自ら確かめるためであった。

咄嗟の思いつきで言ったことであつたが、よくよく考えると「郭貴

妃懷妊」という事実は非常に高い確率で有り得るのではなからうか。そうになったらいいよ、高みの見物とばかりに澄ました顔で後宮の奥深くに引っ込んでいる皇后をこの女の修羅場に引き摺り出せる。

陰貴人は、潘淑妃や他の側室たちを悪戯に焚きつけ、嫉妬や怨嗟の声をあげさせるだけでは少しも満足してはいなかった。彼女の目指す獲物はあくまで皇后唯一人。

後宮の片隅で埋もれるように朽ちてゆくしかない自分たちを庭の枯れ木でも見るような目で一瞥するだけで、相手にもならないとばかりに視線を交わすこともなく皇后の寝宮へと通り過ぎてゆく女。

あの女が皇后でいられるのは、宋瑛の世継ぎとなる息子が他にいないからだ。

陰貴人はそう思っていた。

だからこそ、郭貴妃には何としても男子を産んでもらわなければならない。

そうなれば、皇后は皇帝のあるかないかの儚い寵愛だけでなく、息子の皇位継承権までも失うことになる。

甄后が遠のいた夫の寵愛についてどう考えているのかは陰貴人にも判じかねたが、少なくとも彼女が息子の将来をひどく案じていることだけは知っている。

今でさえ、立太もされず不安定な立場にある大切な息子の地位が、新たな御子の誕生で確実に奪われることになれば甄后はどう出るだろう。

なにもかもを失うという窮地に立たされ青ざめる皇后を想像し、陰貴人は優雅に隠した袖の陰で、形の良い朱唇を弧を描くように吊り上げた。

しかし、青霞の返答は陰貴人の期待を見事に裏切ったものだった。

「先生のお見立ては……ただの風邪だそうです。しばらく養生していれば治ると……。」

「まあ……それは本当ですか？でも、その割には随分と長引いておりますこと。」

「え？」

陰貴人の問いの意図が掴めず、戸惑うような表情で顔を上げた青霞をきつちりと化粧を施した陶器のように滑らかな白い顔が覗き込んだ。

底の見えない闇色の瞳に見据えられ、青霞は何故か視線を逸らすことも身動きもできず、小さく身を竦めた。

どこか怯えたような青霞の曇りのない黒曜石のような瞳にひたと視線を定めて、陰貴人は小さな子供に言い聞かせるようにゆっくりはつきりと告げた。

「私は、てっきり貴妃様は御懷妊なされたかと思っておりましたのよ。」

「そ、そんな……。懷妊など。そんなことはありません。」

「ふふ。それでは何故そのように私からお顔を逸らしてしまわれま  
すの？陛下の御子を授かるなど、この宮中……。いえ、国中の女  
にとってこれ以上誉れなことはありませんまい。ですが、貴妃様にと  
ってはあまり本意ではない御様子。……。陛下以外に、心を奪  
われた方でもおありですか？」

「……。それは！……。」

「大姉！そのような言い様、貴妃様に失礼ではありませんか。」

それまで姉の後ろで静かに控えていた李貴人が、陰貴人のあまりに  
無礼な言葉に慌てて割って入った。

いかに貴妃が年若く新参とはいえ、後宮において皇后と競うほどの  
美貌の主は、今や皇帝の寵を一身に集める時の人なのだ。

彼女が一言告げるだけで、寄る辺ない自分たち姉妹の身など簡単に  
消し飛んでしまうだろう。

李貴人は、姉である陰貴人が、優しく穏やかな性質が全面に表れて  
いる若き貴妃を侮りすぎているのではないかと危惧していた。

李貴人の諫めによって興ざめしたらしい陰貴人は、見るものを闇へ  
引き擦り込むような虚無の瞳に物騒な光を湛えて、後ろに控える妹  
を一瞥したが、不意になにかを思い出したように、再び寝台の中に  
いる貴妃に向き直った。

「そう。その御様子では……貴妃様は御存知ではありませんのね。陛下もお人が悪い。」

クスクス。

広い西端の間に、陰貴人の含みのある底意地の悪い笑い声が低く響いた。

まるで青霞を哀れむような口調であるのに、一向に核心に触れる様子はない。

故意に青霞の神経をささくれ立たせようとしているとしか思えない陰貴人の態度に、耐え切れず青霞は問うた。

「一体、何のことですか？ 陰貴人様。」

「ふふ。王大将軍様のことですわ。」

「……え？」

後宮に来てから片時も忘れたことのなかった愛しい人の名を聞き、青霞は思わず褥から身を起こした。

「まあ、貴妃様。お加減が悪いのに……無理をなさらないで。」

「いいえ。……大丈夫。それよりも、話の続きを……。」



蒼白な顔で必死に食い下がる青霞を面白そうに見据えると、陰貴人はおもむろに口を開いた。

「貴妃様を煩わせるほど大層な話ではありませんわ。・・・先日、陛下が徐姫と斉姫を王大将軍に下賜された、という噂を耳にしましたの。どうやら、将軍がいつまでも正室をお迎えにならないことを陛下がご案じになっての配慮だそうですわ。これまで方々から良いお話がありましたのに、頑なに断り続けていた将軍も流石に皇帝陛下から直接賜ったとあれば、跳ね除けるわけにはいきませんもの。そういう訳で、徐姫と斉姫は将軍の邸宅に引き取られていったそうですわ。」

「・・・そんな。季圭様に・・・妻が・・・？」

徐姫と斉姫というのは、もともと宋瑛の後宮にいた下級の側室である。

美しい愛妾を君主が功のある臣下に下賜することは古からよくあることだった。

しかし、この場合に限ってはこの二人の愛妾が褒賞の意味で遣わされたものでないことは、後宮の事情を知るものであれば容易に想像できた。

宋瑛は、いつまでも青霞を諦めようとしないう王懿へ牽制と最後通牒の意味を込めて二人の側室を押し付けたのだ。

いい加減、青霞のことは忘れろ、それがお前の為だ、と。

「陛下は、本気ですわ。本気で、貴妃様にすべてをお与えになるおつもりなのです。だから貴妃様も覚悟を決めなくてはなりませんわ。」

「……覚悟……」

無理やり引き裂かれたとはいえ、いまだ愛している夫に新たな妻が出来たという事実に打ちのめされ茫然自失の青霞は、ぼんやりと陰貴人の言葉を反芻した。

「大將軍……王懿様のことはもうお忘れなさい。そして、陛下を愛するよう努力なさいませ。それが、陛下にとっても王懿様、貴妃様にとっても最善の策ですわ。いずれにしろ、貴妃様とてこの後宮から出ることは適わないのです。なれば、ここで手にし得る最高の力を掌中に収めることに何を躊躇うことがありましょう。」

陰貴人は、掛布の下できつく握り締められていた貴妃の白い手を優美な自身の手でそっと包み込んだ。

「今は……。今は理解できないかもしれませんが、さすが、きっと貴女様は『力』を求め、それを行使することになりましょう。この後宮において、自分の身ひいては愛する者の身を守るためには避けられない戦いがあるのです。」

一瞬、青霞の揺れる黒瞳と陰貴人の狂気を孕んだ眼がぶつかった。しかし怯えるようにすぐに俯いた貴妃によって、視線はすぐに外されてしまう。

その意気地の無さを陰貴人は内心で嘲笑した。

「美しいだけの花は、すぐに飽きられましょう。後宮で自分の意思を通したいと望むのであれば、まず権力を手にすることです。早く、陛下の御子をお産みなさいませ。その子が男子であれば、おのずと貴妃様にすべての『力』が転がり込んでくるでしょう。その時こそ、これまでの恨みをはらせばよいのです。それまでは、何事にも耐え抜いて『その時』をお待ちなさいな。」

どうすれば、こんなにも強い意思を持てるのかと疑問に思うほどの苛烈な視線が青霞を射抜いた。

「皇帝を、お産みなさい。そして、皇太后としての権力を手に入れ国を動かすのです。それこそが、この後宮に入れられた女にとって至高の場所であり、最も幸運で賢い者が最後の最後に行き着く場所ですわ。」

青霞は、何故、さほど自分と親しくもない陰貴人がそんなことを言うのか理解できなかった。

ただ、一つだけ判るのは、この高貴な生まれの女性は、この後宮で生まれ育ち、ある意味後宮のすべてを知る女性だということ。

その貴人が、青霞に、真の夫を諦め「皇帝」に抱かれ次の「皇帝」を産めという。

まだ後宮にきて日が浅く、宋瑛によって過保護なほど護られてきた

青霞は知る由もなかった。

「皇帝」の子種を宿すということが、後宮の女にとってどれほど重大な意味をもたらすのかを。

まだ母になるには幼すぎる美しい少女は、ただ、後宮を知り尽くした女の単なる脅しではなく、真実を幾許込めた酷薄な恫喝に圧倒され、ただ無言でその闇と真意に怯えた。

人の持つ真の狂気を知らぬが故に、抗う術を知らぬ少女にできるのは、陰貴人の狂気にひたすら自身の正気を吞まれまいと頑なに心を閉ざすしかなかったのである。

## 第二章 皇帝 6

その夜、いつもと同じように宋瑛は長春宮を訪れた。

「どうした？ 顔色が悪い。」

青霞がいる東の間に足を踏み入れた途端、宋瑛は眉を顰めて言った。今朝は久しぶりに晴れ渡った空を見て、ひどく気分が良さそうだったのに。一体昼間に何かあったのか。

言外にそんな意味を込めて放たれた声に、青霞はただ蒼白な顔で俯くだけであった。

透かし彫りの施された椅子に腰を下ろした宋瑛は紫檀の卓の前に立ち尽くす貴妃をおもしろくない気分で見遣る。

白い夜着の上に花鳥の紋様も鮮やかな淡紅の長衣を羽織った青霞は、常であればきっちりと結い上げている豊かな黒髪を解いていた。

その長い髪がはらはらと儚い緋の衣にかかる様子は艶めかしく蠱惑的で。

様子のおかしい青霞の態度をいぶかしんでいた宋瑛でさえ、一瞬そのことを忘れて見惚れる程その夜の青霞は格別に美しかった。

逢えなくなつて久しい夫を想い悩み苦しむ心が彼女にこれまでなかった艶を与え、結果として彼女を王懿から無理矢理取り上げた張本人の気を引くことになろうとは、なんとも皮肉なことである。

このまま見合っけていても埒があかないとふんだ宋瑛は、おもむろに立ち上がると、強引に青霞の細腕を掴み奥の寢所へと向かった。

いつになく乱暴で強引な宋瑛の態度にも、逆らうそぶりも見せず青霞は大人しくついてゆく。

だが、気分も体調もすぐれない状態で閨へ連れ込まれることの不安から、白い顔が一層白くなってゆくのを横目で認めた宋瑛は、呆れたように溜息をついた。

「安心せよ。病人相手に何もせぬ。いつものように添い寝するだけだ。先程も言ったが、そなた、随分と顔色が悪い。具合が悪いのなら、無理に起きずとも良いのだぞ。」

言いながら、御簾をくぐると宋瑛は青霞の長衣を剥ぎそのまま奥まった寢台の中に彼女を押し込んだ。

そして自らも上着を脱ぎ白い単衣姿で青霞の傍らに横たわる。

一連の流れるような所作は荒っぽいようでいてその実、青霞に僅かな負担も掛けぬよう仔細な配慮と優しさが籠っていた。

そんな不器用な優しさを肌で感じながらも、その想いに素直に応じることのできない青霞は、只いたたまれぬ罪悪感に身を竦ませるのだった。

そんな青霞をさらに追い込むように、宋瑛が何気なく問うた。

「泰和殿（陰貴人と李貴人の住居）あたりに聞いたのだが。そなたに懐妊の兆候があるというのは真実か？」

褥に絹のように広がる黒髪に長い指を絡め、仄かに薰る艶やかなそれに唇を寄せながら宋瑛は青霞の様子を一瞬たりとも見逃すまいとするかのようにじっとその白皙を見つめながら彼女の答えを待つ。

「……………侍医殿は、今少し時が経たねば判らぬと……………」

頼りなげな弱々しい声で、ようよう青霞が答えると、宋瑛はすかさず切り返した。

「何故それを余に云わぬ。余の子を産むのを厭い、隠していたのか？」

鋭利な視線が青霞を容赦なく貫く。

何千何万という猛将の頂点に立ち、その非情さで怖れられる宋瑛の皇帝としての片鱗を垣間見た青霞は、衝動的に逃げ出したくなり視線を彷徨わせたが、四方を帷帳で仕切られた空間の中で互いの吐息さえ感じられるほど間近にいる相手から逃げ出せるはずもなく。

彼女は諦めたように口を開き吐息のように細く言葉を紡いだ。

「けしてそのような……………。侍医殿はただ、確かな結果を陛下にお知らせしたいと申されておりましたし、私もその方が良いと思いましたが。御報告申し上げるのを待っていただいておりますの。」

青霞が言ったことは真実だった。

微熱や吐き気、食欲不振などの症状から侍医はまず懷妊を疑ったが、風邪もひいているような様子から、はっきりとは判断しかねていた。本来であれば、貴妃の容態を案じる皇帝にすべての状況を知らせるべきなのであろうが、懷妊を告げた後にそれを取り消すようなことになった時の皇帝の怒りと落胆を考慮すると、直ちにそれを告げるには長年侍医として宮廷に仕えてきた老人でさえ躊躇いがあつたのだ。

一方で、当の本人でもある青霞もまた、懷妊の兆候があると聞かされひどく心を乱していた。

真実の夫・王懿との間には出来なかった子が、憎いはずの宋瑛との間に出来たかもしれぬという困惑。

そして、皇帝の子を産んでしまったら、おそらく二度とこの後宮から出ることは適わないであろうという絶望。

何かが、決定的になってしまいう前に一度だけでいい。夫、王懿に逢いたいと青霞は切望していた。

それまでは、宋瑛にも誰にも、懷妊のことは知られたくなかった。

だから、皇帝へ伝えることを迷う侍医の背中をそつと押した。

「私も、誤った知らせをお伝えして、陛下をがっかりさせたくありませんわ。」と。

貴妃の言葉に侍医がひどく安堵したことは言うまでもない。

複雑な表情を浮かべる青霞の顔から何を読み取ったのか。

宋瑛がそれ以上彼女を詰問することはなかった。



その代わり、美貌の皇帝は傍らに横たわる青霞の柔らかな肢体を抱き寄せ、その髪に端整な顔を埋めるとくぐもった声で話し出した。  
「……………まるで、本心を話す己の顔を見られたくないというように。」

「そなたに子が宿っておれば良い。そうすれば、今度こそ余はよい父親になるぞ。」

『今度こそ』というのは甄皇后との間にもうけた一子、宋玲のことを言っているのだろうというのはすぐにわかった。

甄后と宋瑛の仲が冷え切っているのと同様、彼は息子までも遠ざけ滅多に会おうとはしなかった。  
そんな宋瑛の態度は、宮廷内での宋玲の出自にまつわる噂話に信憑性を与えてしまうことになる。

真実がどこにあるのか青霞には知る由もないが、この親子がお世辞にも「仲が良い」とは言えない関係であることは宮廷だけでなく宛紀国全土の民が知るところであった。

「……………もし、わたくしが懐妊していたとしたら。陛下は喜んでくださいますか？」

青霞の問いに、宋瑛は一瞬切れ長の瞳を見開いたがすぐに唇の端を持ち上げた。

「当然だ。余にそなたとの子を拒む理由などない。」

断言した宋瑛の表情に偽りの色は微塵もなかった。

その整いすぎて温かみに欠けた美貌をそつと見つめながら、こうしてただ抱き合いながら睦言のような言葉を交わすなど、まるで本当の夫婦のようだと青霞は思った。

宋瑛は、おそらく普通の男子が当たり前に持つ、「穏やかな家庭」というものを自分に望んでいるのだろう。

青霞が後宮に来て半年、王懿と離れて一年の歳月が経とうとしていた。

今にして思うと、宋瑛は最初から「皇帝と側室」というよりも「夫と妻」という形を作るべくことさら青霞を気遣い慎重に振舞っていたような様子であった。

真の妻である甄皇后との間では成せなかったことを、青霞とならやり直せると踏んだのか。

内心を隠すことに長けた皇帝の内心を推し測る術はないが……

一年という時間は、青霞が王懿の妻として彼の傍らにあった時間と並んでしまったことを意味していた。

そのことに気づき、もはや心の中にしっかりと留め置いていたはずの愛しい夫の声や姿さえ、輪郭がぼやけ始めてきたことに、青霞は時の流れの無情さを恨まずにはいられなかった。

そして、姿も声も感じることでできない夫の面影を、よく似た面差しの皇帝に知らずに重ね、次第に己の心が揺らいでいることを青霞ははっきりと自覚していた。

すべてを忘れて、傍らに寄り添う、自分にだけは不思議と優しい男に身も心も委ねてしまえばどんなに楽であろう。

現実には、二度とこの後宮から出ることが適わないというのであれば、青霞とてそのことを考えないわけではなかった。

しかし、人の心は変わるもの。

今でこそ、皇帝の第一の寵妃としてその愛を受けているが、彼が自分を夫から無理矢理奪ったように、また新たに皇帝が強く望む女がこれから現れないという保障はない。

そうになったら、頼るものがない青霞は、この広く冷たく豪奢な・・・  
・・・愛憎渦巻くおぞましい場所ですら生きてゆけばよいのだろう。

せめて宋瑛がただの上級貴族だったら・・・

そうは思うものの、彼が皇帝だからこそ、彼は青霞を王懿から奪い取ることができたのである。

「もしも」などと考えるのは愚の骨頂であった。

再び添うことができるとは思えないけれど。

もう一度、貴方に会ってその声を聞くことがかなうなら・・・

・・・季圭様。忘れることなんてできない。まだ、お別れ

すら言っていないの……。

行き場のない想いはただ、透明な滴となって音もなく零れ落ちた。

\*\*\*

「青霞に、懐妊の兆候があるそうだ。」

春に霞む朧月を見上げながら、何の感情もこもらぬ声で青年は淡々と呟いた。

王懿邸。

かつては、幼さを残す天真爛漫な妻を迎え、文字通り春の盛りのような華やぎをみせていた屋敷は、今は嘘のように静まり返っている。

青霞が好んで箏を弾いていた場所……庭に面した広い回廊の欄干にもたれ、王懿は独り言のように続けた。

「それがまことならば、青霞はこれまで以上に危険に曝されよう。なにしろ今回は、『手段は選ばない』と言い切った真打も参加するであろうからな。」

暗い庭の中でもひととき大きな桃の木が月明かりのなかではららと薄紅の花びらを風にのせて散らす様を無表情のまま眺め、王懿は背後の闇を振り返った。

「これまでは、皇帝がなんとか護ってきたようだが、後宮の真の主は皇帝ではなく皇后。その皇后が宣戦布告してきたのだ。こちらも、手をこまねいている場合ではない。」

「承知しております。」

灯りもともさぬ闇の中、王懿の後ろに跪き彼の言葉を仔細もろさず聞いていた女は、主の謂わんとしている事を俊敏に汲み取り、確固たる決意を秘めて頷いた。

感情のない精巧な人形のような女の態度に満足した王懿は、まるでついで、とばかりに物騒なことを口にした。

「皇后には、趙高がついている。奴は進んで後宮の揉め事に首は突っ込まないだろうが、皇后の要請次第では動くかもしれん。気をつけるがいい。」

「御意。」

女のいらえは、やはり乾いた風のように一切の感情を廃した無機質なものだ。た。

「どんな女も、青霞の代わりになどならぬ。代わりがそれほど安易に手に入るのなら最初からそんな女など望みはしなかった。・・・

……私から唯一の者を奪ったこと、必ず後悔させる。子  
叡も趙高も、絶対に許さぬ。だが、今はまだ動く時ではない。……  
……口惜しいことだ。待つだけの身が、これほど辛いとはな……  
」

王懿の手足となり彼の数々栄光の陰で暗躍してきた女は、その言葉を自身の胸に刻みながら主の命を果たすため、音もなく闇へと姿を消した。

それを気に留めた風もなく、庭を眺めながらふと王懿は、かつて青霞が自分を見初めた切欠をよく聞きたがっていたことを思い出した。

いい歳をした自分がほんの少女に一目惚れしたなど、たとえば大切な妻であってもそれを言葉にすることは、ひどく恥ずかしく、結局年長者の余裕でいいように彼女を云いくるめて真実は告げぬまま、二人は分かれた。

何も大仰なことも運命的な何かがあったわけではない。

たまたま、王懿が探していた貴重な書籍を歴史ある名家の郭氏が所有している、という話を聞いて、借りることができなければせめてその場で読むだけでも、と郭家を訪ねたのが切欠だった。

人のよい郭永は、大將軍でありながらわざわざ出向いてきた王懿に恐縮し、随分と心づくしの歓迎をしてくれたものだった。

その折、王懿は庭を挟んだ対の屋で箏を奏でる美しい少女を目にしたのである。

暑い夏の日だったため、御簾を上げていたから遠目でもその優美で

繊細な美しさはよく見て取れた。そして、奏でる箏の見事さも。

聞けば、自分よりも12も年の離れた少女で、そろそろどこぞに嫁に出さなければならぬが娘の幸せを考えると最近つとに降るようにやってくる縁談に簡単に頷くこともできず悩んでいるのだ、と郭永は困ったようにだが娘可愛さの心がだだもれの様子で語った。

それだけで、その娘がどれほど大切にされているのか、政治以外の人心には疎い王懿にも判り何故か心が温まるような気がした。

愛されることしか知らない幸せな少女。彼女を手に入れたら、幸せになれるだろうか？

結局、貴族のしきたりにより婚儀当日まで王懿と青霞は直接顔を合わせることはなかったが、郭夫妻の優れた人柄と理屈ぬきで少女に惹かれた己の直感を王懿は信じ、少女を正妻として迎えることに躊躇いはなかった。

単純といえば、これほど単純な話はない。

これまで己が否定してきた「恋の病」に一目で罹ったのだと言ったら、青霞は笑っただろうか。

大貴族の長である王懿に嫁ぎ、あれほど背伸びして自分の妻としてふさわしくなろうと懸命になっていた妻に少しくらいの恥をさらしたところで、ただ二人笑いあうだけで終わっただろうに。

こんなことになるのならば、あの時、真実を彼女に話しておけばよかった。

今はいない、妻の面影を淡い光を放つ薄紅の花びらに重ね、王懿はやるせない想いにきつく拳を握り締めた。ただ静寂に満ちた闇の中に立ち尽くすのだった。



## 番外 雨に霞む夜の歌声 前編

まだ宋瑛が即位して間もない頃。

壮麗な洛陽城の後宮に、忽然と現れ若き皇帝の寵を一身に集めた美しい鳥がいた。

その歌声は迦陵頻伽のごとく。鮮やかな色彩の薄絹を天人の羽衣さながら優雅に靡かせて舞う姿は、水辺で羽ばたく白鷺のごとし。

幸運にも皇帝の目に留まり、後に「徳妃」の位を賜ることになるこの舞姫は、皇帝の寵を後ろ盾として周囲も驚くほどの早さで栄達を遂げたが、その凋落もまた坂道を転がり落ちる小石のように急激だった。

どんなに比類な「美」も、傍近くに置いていれば慣れてしまうもの。まして、並外れた美貌、官能的な歌と踊り以外に取り柄を見出せない思慮の欠けた小鳥に、聡明な皇帝を満足させるような才気や感性が期待できるはずもなく。

歌と踊り、そして美貌だけでは皇帝の心を繋ぎとめることのできなかった小鳥は、やがて皇帝に飽きられ、流産がもとで体調を崩したのを機に「徳妃」の位を与えられ皇帝から遠ざけられた。

徳妃とは、皇后、貴妃、淑妃に次ぐ高位の女官職であったが、皮肉なことに彼女が「徳妃」になったことを羨む者は後宮において誰一人いなかった。

一見すると皇帝の温情による大出世のように見えるが、その実情は体のよい厄介払いだということは明白だった。

ある日突然、ふらりと宮廷に舞い降りあつという間に皇帝の寵愛を独占した美しい小鳥の零落を、嘲りこそすれ哀れむ者はいない。まして、出自の卑しく教養に欠ける名ばかりの「徳妃」を相応に敬うものなどこの熾烈な女たちの戦場である後宮においては皆無だった。

皇帝の気紛れで後宮という黄金の籠の中に閉じ込められた小鳥は、最初から最期まで孤独だった。

日に日に弱ってゆく徳妃は、やがて皇帝の住まう養心殿からかなり離れた場所へと移される。

そうして、可哀想な小鳥は宮廷の人々の記憶から意図して消された。

皇帝の寵愛が深かったときは我先にと傳いておきながら、状況が一転したとたん手のひらを返し徳妃の存在など忘れ去ったかのように振舞う女官たち。

広大な後宮の片隅でひっそりと死に向かって弱々しい呼吸を繰り返す不幸な小鳥を黙殺する後宮の女たちを嘲笑しながら、陰貴人と李貴人は誰に気兼ねすることなく、堂々とこの哀れな徳妃を見舞った。

通された寝室は、薄暗く換気が悪かった。

人気のない不吉な匂いがたちこめるその部屋で陰貴人が見たのは、朱色の金欄緞子と玉飾りで四方を仕切られた豪華な寝台に横たわる痩せ衰えた娘の姿だった。

いつの世も皇帝に見限られた愛妾の末路は残酷なほど惨めなもの。

眩いほどの輝きを放っていた若々しい美貌は病魔に侵され今はその片鱗もなく。ただ枕元に蛇のようにうねる黒髪だけが、かつての美しさの名残を留めていた。

枕元に座した陰貴人の気配に気づいたのか、若き徳妃は熱にうかされ潤んだ瞳を傍らの高貴な女性に向けると、土気色の乾ききった唇をやつとのこととで動かし問うた。

「・・・陛下は・・・いらっしやらないの？」

弱りきった彼女には、もはや自分の傍にいる人物が誰なのかを見定める力もなかったのかもしれない。

そんな憐れな娘の言葉に腹を立てるでもなく、陰貴人は静かに言った。

「陛下はもうすぐ来ますわ。だからゆっくり養生なさい。」

意味のない言葉だとは思ったが、この可哀想な小鳥の様子を目の当たりにすると、底意地の悪い陰貴人でさえそう言わずにはいられなかった。

その言葉を聞くと、徳妃はフウっと一つ息を吐き、再び瞳を閉じた。

誰もが予想した通り、かつては宮廷人のみならず気難しい皇帝をも魅了した歌声が後宮の空に響き渡ることは二度となかった。

陰貴人と李貴人が見舞ってから数日後、徳妃は静かに息を引き取ったのである。

一時は皇后をも凌ぐ権勢を手にした娘の、あまりにもあっけない幕切れであつた。

\*\*\*

「本当にお気の毒でしたわ。今にして思えば、あの方に陛下の寵は重すぎたのかもしれませんがね。」

——何しろ、陛下といい皇后様といい、ここで生き延びている方々は皆、多かれ少なかれ鉄のような堅く冷たい心をお持ちなのですから。そうだとすると、あのように愚かで弱い小鳥が一瞬で縊り殺されてしまったのも、とても筋の通つたお話ですわ。

陰貴人はそこで言葉を切ると、上座にいる郭貴妃の様子をそつと窺つた。

亡くなった「小鳥」よりもさらに若い貴妃は、困惑の表情を隠しきれていなかった。

一体、この方は何が言いたいのだろう。

陰貴人が親しげな素振りで青霞に近づいては、含みのある言葉で彼女の心を惑わせることはよくあることだった。

しかし、そこに悪意があるかといえばそうでもない。

亡国の皇女だというこの高貴な女性が、人の心を惑わし混乱させその醜態を見るのを楽しむという悪癖の持ち主であることを、青霞は短い付き合いの間でしっかりと把握していた。

こういう時は、下手に反応しても相手を喜ばせるだけである。

掴みどころのない女性ではあるが、他の側室達に比べれば格段に友好的な態度で接してくる陰貴人のことは決して嫌いではない。

妾腹とはいえ眞王室の血をひくこの女性は、高雅な趣味を解する聡明で高い教養をもつ人物であるがゆえに、気の抜けない皮肉交じりの会話を楽しむことができる。それは、青霞にとって退屈と無駄の多すぎる後宮生活の中で、ほどよい刺激与えてくれるある意味貴重な時間でもあった。

それでも、己を嘲笑の対象に貶めて笑えるほど青霞は自虐的ではない。

だから青霞は極力困惑している内心を悟られぬよう、手にしていた扇でそっと口元を隠した。

そんな若き貴妃の様子を面白そうに眺めると、陰貴人は緋色の唇を弧に吊り上げて品よく笑った。

「あらあら。そんなに警戒なさらなくとも大丈夫ですわ。今日は雨でしょう？この雨音を聴いてふと亡き徳妃様のことを思い出したも

のですから、お話ただけですよ。」

「……雨音、ですか？」

「ええ。亡き徳妃様の歌声はこの雨のように濡れた不思議なお声でした。そう、まるで雨の雫が深い壺の底に落ちて響く、……。奥深い水琴のような。」

そう言うと、陰貴人は降り続く細い雨の音に耳を傾けた。

もう昼を過ぎる頃だというのに、雨のせいで長春宮は仄暗い静けさに包まれていた。

躰の行き届いた女官たちはこそとも音をたてずに動くので、青霞たちの会話が途切れると室内に奇妙な沈黙が落ちる。

その居心地の悪さに青霞が身じろぎすると、再び陰貴人が口を開いた。

「御存知でして？ こういう雨の夜に耳を澄ますと、どこからものなく人の泣き声が聞こえてくるのですって。」

「え？」

陰貴人のあまりに神妙な口調に、僅かに顔を強張らせた青霞をさらに追い詰めるように、臍長けた白皙の女性はあえて硬い声で言った。

「皆、噂していましたよ。あれはきっと陛下に捨てられ非業の死を遂げた徳妃様が、陛下の寵を受ける女性を妬み自分と同じ目にあわ

せようとこの後宮を彷徨っていらっしやるのだと・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・まさかそんな・・。」

「あら、何故そうはつきり否定されますの？この後宮で不幸な屍を晒した女は数知れず。眞代から続くこの女の墓場には、数え切れない恨みと呪いが残されていましてよ。」

「おやめください大姉。そのような話、貴妃様を不快にさせるだけです。まして、貴妃様はまだ体調が万全ではありませんのに。・・・・貴妃様、今の話は大姉の冗談です。どうか、お気になさらぬよう。」

陰鬱な空気にあやうく吞まれそうになった青霞を救ったのは、それまで陰貴人の傍らで二人のやりとりをじっと眺めていた陰貴人の妹・李貴人だった。

陰貴人の放つ毒気にすっかりあてられ疲れた表情の青霞に同情するような視線を送ると、李貴人はこれ以上長居無用とばかりに姉である陰貴人を宮から連れ出そうと腰を上げた。

茶席が設けられた西の間を李貴人に追いたてられるように後にする寸前、おもしろくなさそうに足を止めた陰貴人は籐の椅子に座ったままの青霞を振り返った。

「そういえば、今宵も陛下のお渡りはないようですわね。・・・・独り寝の夜は特に雨音がよく響くもの。お気をつけあそばせ。」

「大姉！」

李貴人の諫めの声をものともせず、陰貴人はそう言い放つと楽しそうに笑いながら妹の手を振り切り歩み去った。

気まずい空気の中に取り残された二人は、顔を見合わせると同時に溜息をついた。

「……………では、わたくしもこれで……………」

扉に手をかけたまましばし呆然としていた李貴人だったが、気を取り直すとあらためて貴妃に軽く会釈し、姉の後を追いかけようと一、二歩踏み出した。

だが、そのまま西の間を出てゆくはずの李貴人の歩みは扉を出たところで何故かピタリと止まる。

そして、先ほどの陰貴人と同じように青霞を振り返ると、姉とは異なる美しさを醸し出す優しげな面差しに憂いを込めて静かに口を開いた。

「貴妃様……………」

\*\*\*



陰貴人の指摘したとおり、その夜、長春宮に皇帝が訪れることはなかった。

それはあらかじめ予想していたことなので、彼の人に突かれても別段動揺することもなかった。

青霞の体調が回復してきたこともあるが、それ以上に大事が皇帝を養心殿に縛り付けていたのである。

何しろ宮廷は今、これまでの古い既得権益を一掃し新たな法整備を敷くのに忙しい。文官は言うに及ばず武官までもが休みなく一連の作業に駆り出されているのだから、その最高責任者であり陣頭指揮を執る皇帝・宋瑛に至ってはほぼ不眠不休で執務を続けている状態が続いていた。

そんな状況がいつまで続くのか政治にかかわることのできぬ身では想像もつかないが、この数週間一度も宋瑛と顔を合わせていないのは事実だった。

施政者としては明君の部類に入るであろう宋瑛が、そんな折に他の女のところへ通うとは誰も思わない。

だから陰貴人が「独り寝」と青霞を揶揄したのには深い意味などないのだ。

寝所に繋がる控えの間で、長い髪を侍女に梳かせながら、鏡に映る己の顔を眺め青霞はひとつ息をついた。

紅い房飾りが美しい吊宮灯に照らされた室内は、昼間よりよほど明るい。

鏡は、青霞の冴えない表情をはっきりと浮かび上がらせていた。

——あんな与太話を真に受けるなんて、情けないこと。

気にするまいと念じていても、陰貴人の思惑通り昼間聞かされた哀れな徳妃の話に心なし怯えている自分を、青霞ははっきりと自覚していた。

雨は今も降っている。

暗い空から落ちてくる水滴が瓦に当たる音や、軒先から雫となってひっきりなしに石畳にぶつかる音が耳について離れない。

眞代から皇帝の居城として栄えたこの洛陽において、もっとも華やかに見える後宮の眞実は、幾千もの哀れな女達の墓場だ。

皇帝に目をかけられ捨てられた愛妾の話など、歴代皇帝の御世を辿れば腐るほどあるのは宮廷に縁のない庶民でも知っている事実だった。

それでも、たとえ一時でも皇帝の寵を受けられた女はまだ良い方なのだろう。

現実には、皇帝の傍に侍るところか皇帝の姿すら一度も目にする事もなく一介の侍女で終わる女の数の方が圧倒的多数なのだから。

しかし、皇帝の寵愛を受けることが女の幸せだとは青霞には到底思えない。

そこには勿論、愛する夫と無理に引き離されたという青霞個人の事情があったが、それを差し引いても歴代の寵姫と呼ばれた女性たちの末路は悲惨なものが多かった。

皇帝に愛される。それはとりもなおさず権力を手にすることと同義であった。

それゆえに、権力を愛し権力に振り回された女達是否応なく周囲の嫉妬、陰謀、政争などに巻き込まれる運命にあった。

その末にあるのは、完膚なき勝利か惨めな敗北。

勝者には絶大な権力と一族の栄華そして時には国の命運を握ることが出来るが、敗者を待つのは想像を絶する屈辱と凄惨な死のみ。

皇帝の突然の死によって、寵姫の座から引き摺り下ろされたある貴妃は、四肢を切り落とされ厠に捨てられた。

嫉妬深い皇后の恠気にあてられた不運な女官は、後宮に片隅にある井戸に生きたまま投げ込まれた。

皇帝の子を身籠ったある側室は、毒を盛られ腹の子ともども闇に葬られた。

何百年という歴史の中で、そういったことが日常茶飯事にあったという。

青霞の住まう長春宮もまた、権力に近い場所ゆえに歴代の寵妃や皇

后が住まい、そして幾度もおどましい愛憎劇を繰り広げた場所なのだ。

思わず耳を塞ぎたくなる残虐な出来事を知っているだけに、昼間の陰貴人の話は青霞にそれらを嫌でも思い起こさせる。

「可哀想な徳妃」のことはさほど恐ろしいとは思わない。それよりも怖いのは、生きた人間の……後宮という伏魔殿に住まう生きた女たちの青霞に対する憎悪だった。

「駄目ね。こんな夜は寂しくて仕方がないわ。」

就寝の仕度を終え豪奢で広い寝室に一人取り残された青霞は、止むことのない雨音を聴きながらポツリと呟いた。

自分は何故ここにいるのだろう。

何を望んだわけでもないのに、人に嫉まれ、憎まれ。

媚び諂うものや馴れ馴れしく近づいてくる者たちもいるが、彼らが見ているのは自分ではなくあくまで彼女を寵愛する「皇帝」。

誰も、青霞を「郭青霞」という個人を見てはくれない。

やるせない孤独が、青霞を襲う。

なにもかもを許された贅沢も高価な金玉珍宝も、何の慰めにもならない。

ただ、青霞は自分の名を囁いて抱き締めてくれる温もりだけが欲し

かった。

細く降り続く宵の雨。

じつと耳を澄ますと、闇の向こうから孤独のままに落命したという  
女の哀しげに歌う声が聴こえるような気がした。

番外 雨に霞む夜の歌声 後編

ヒタヒタ・・・

小夜時雨の頼りない音に紛れて、何かが蠢く気配がした。

いつの間にか広い寝台の中でまどろんでいた青霞は、次第に閨房に近づく衣擦れの音に掛け布の下で身を固くする。

貴妃付き女官の誰かだろうか。

しかし、こんな夜更けに訪れる用であればよほど深刻な事態でなくてはならない。そうであるならその気配はもっと急いたものであるだろう。

しかし、閨に向かう足音はしなやかで悠然としたものだった。

ふと、足音が止まる。続いて蝶番が軋む鈍い音が、何者かが寝所へ続く控えの間に侵入を果たしたことを知らせた。

その事実には、青霞は身を強張らせる。

もし、相手が青霞に害をなそうとする者——例えば暗殺者——の類であれば、非力な青霞が身を護る術はない。

——季圭様——！！

確実に忍び寄る姿なき影に、青霞は寝台の上でなすすべなく、突然訪れた死の恐怖に華奢な肢体を震わせここにいる筈のない夫の名を祈るように繰り返し呼んだ。

しかし、青霞を極度の緊張に迫り込み無遠慮に控えの間の扉を開け、闇に踏み込んできた人物の正体はあつけないほど容易に判明した。

灯りを消した暗い室内で、その人影は瘦身長躯であることしか判らなかつたがそこから仄かに薫る高貴で雅な伽羅の香が、その人が誰かを青霞に知らしめたのである。

伽羅を使った香を焚きしめる者は、皇帝の居城であれば数多いが、これほど洗練され深みのある上質な香りを纏うことを許された者は、この国において唯一人。

「こんな遅くに、いかがなさいました？・・・・・・陛下。」

暗闇の中、おぼつかぬ手付きで傍らの燭台に火を灯そうとする青霞の手を無造作に掴むと真夜中の闖入者――皇帝・宋瑛は手にしていた長剣を近くにあった卓に立てかけそのまま無言で青霞を抱きこみ寝台に倒れこんだ。

「・・・陛下。」

咎めるような響きを孕んだ青霞の声に、宋瑛は低く笑う。

「先触れもなく来たのが、おもしろくないか？だが、ここは余の城。余がどうしようと誰にも邪魔はさせぬ。」

「それはそうですが・・・。」

ようやく夜目に慣れた青霞は、覆いかぶさるようにして自分を押さえつけている男の顔を見上げた。

秀麗な美貌に漂う疲労の陰。

青霞の白い頬に落ちる闇に融けるような漆黒の髪は、僅かに水気を含んでいた。

「供もつけず、お一人でいらしたのですか？」

「自分の身くらい自分で護れる。それでも余は武人なのだぞ。」

どこか不貞腐れたような口調で、宋瑛はゴロリと青霞の上からのけた。

長い黒髪が艶やかに流れる広い背を横目に、青霞はほっと小さく吐息をつく。

時々、この聡明な皇帝はこのように子供のような振る舞いをする。青霞の傍らで横になる宋瑛は、純白の絹の単衣に藍の長衣を羽織っただけの姿だった。おそらく、養心殿で休息をとろうとした・・・或いはとっている折に突如思い立ってこの長春宮まで来たのだろう。

それにしても、皇帝ともあろう人がこのように軽々しく動いてよい



ものだろうか。いくら警備が嚴重な内廷とはいえ、危険はどこにでも潜んでいるのだ。そこをたった一人、夜着のまま出歩くなど常識では考えられない。

だが、その常識を宋瑛はいとも簡単に覆す。

時としてその気紛れで傲慢な振る舞いは、周囲の人間を苦しめ多大な忍耐を強いるのだが唯一絶対の権力者として君臨する彼は、おそらくそのことで周りが我慢しているなど思いもしないのだろう。

宋瑛はけして暴君ではない。しかし擦れ違うその優しさと寵愛は青霞をひどく疲れさせた。

だが、今ここにいる宋瑛はそれ以上に疲れているようだった。

青霞が知っている宋瑛はいつだって、端麗な容姿に加え常に自信に満ち眩いまでの気品と高貴さを滲ませるまさに「完璧」な皇帝だった。

だから、いつになく覇気のない宋瑛の様子に青霞は惑い、どう接してよいのか判らず当たり障りのないことを口にした。

「……雨、止まないですね。」

静寂に包まれた閨に雨音だけが響く中、ポツリと呟いた青霞の聲が妙に寂しげに転がり落ちる。

宋瑛は、青霞の方へ身体を向けるとじつと青霞の繊細な美貌を見据えた。

「雨は嫌いか？」

寝台に横になったままピクリとも動かないので、そのまま寝入ってしまったと思っていた宋瑛がまだ起きていたことに、青霞は微かに瞠目した。

だが、すぐに小さく微笑むと御簾の向こう閉ざされた格子に目をやった。

「雨は……嫌いではありません。ですが、このように静かな雨夜はまるで……」

「女の声が聴こえるか？」

はっと青霞が宋瑛に視線を向ける前に、艶やかな黒髪を僅かに乱した青年は素早く青霞を自らの腕の中に抱き込んだ。

「陛下……」

「余が知らぬとでも？ 『雨の夜には女の歌声がする』後宮でそう実しやかに囁かれていることくらい、とうに余の耳に入っていることだ。……いかに女どもが好みそうな下賤な与太話よ。」

それでは、宋瑛は雨夜に独り寝をしなくてはならない青霞を気遣っ

てここへ来たというのだろうか。

まさか・・・否定する青霞の心に反し、彼女の手を掴む宋瑛の手はひどく冷たく肌に触れる夜着もまたしっとりとした水の匂いがした。尋ねたところでその真意は決して語らないことを承知しているゆえに、青霞はあえて疑問を口にはしなかったが、何事も計画通りに行動する宋瑛にしては、あまりに矛盾した姿に青霞の心は揺れた。

「そなたがどう思っているかは知らぬが。あの女は、死してまでもこの世に残って歌うほどの執着は持っていなかった。」

青霞の絹糸のような髪を弄びながら、淡々と宋瑛は語りだした。何かを思い出すように、遠い目をして。

「歌うのが、好きな女だった。呼吸するように歌い、舞い踊った。あの女は、まさに歌うために生まれてきたような者。どこまでも、自由な魂を持っていた。」

——あれ程あの奔放さに焦がれたのに、もう本当の名さえ忘れてしまった・・・・・・・・名もなき小鳥。

そこで、宋瑛は口を噤んだ。

「ずっと、あの声を聴いていたかった。だが、ここに留めたのは余の間違いだった。」

自由な歌姫の魂に焦がれた。その歌声に魅了された。傍で、ずっと歌っていて欲しかった。

だから聴きたいと思ったときにすぐに聴けるよう傍に置いた。ただ、それだけだった。

しかし、皇帝の気紛れは結果的に残酷な末路を小鳥にもたらした。

「あれは、歌えない自分を見て欲しくないと言った。歌えない自分には価値がないと。そして自ら、余の傍から離れることを望んだ。・・・それまで何一つ望んだこともない女の最初で最後の願いがそんなことだったとは・・・皮肉なことだ。」

苦しそうに唇を歪める宋瑛を、青霞はやるせない気持ちで見つめた。噂とは違う。

宋瑛は、彼なりに徳妃を愛していたのだろう。ただ、彼が皇帝だったゆえに徳妃が身分も後ろ盾もない儚い立場だったゆえに悲劇は徳妃の上に降り注いだ。それが真実。

ふと、青霞は思う。

宋瑛が殊更自分を大切に扱うのは、そんな徳妃の悲劇があったからではないかと。

だとすれば自分は、雨夜に彷徨う徳妃の影に怯えるのではなくむしろ彼の人に感謝しなくてはならないのではないかと。

そんな青霞の物思いを打ち破るように宋瑛の低い声が青霞の耳朶を打った。

「そなたは、そなただけは誰にも傷つけさせぬ。今度こそ、余が護る。」

青霞の肢体に巻きついてた腕が、急にすさまじい力で彼女を締め上げた。

だが、青霞は非難の声を上げなかった。間近に感じる宋瑛の吐息に唇を寄せるようにただ問う。

「私の名を、御存知ですか？」

細い腕を男の首にやんわりと絡ませ奇妙なことを尋ねる女に、宋瑛は柳眉を跳ね上げた。

「当然だ。」

「それでは、呼んでください。」

「何故……」

「今、呼んでほしいのです。陛下にとって私が、私であることを証明してほしいから……。」

青霞の真意を知った宋瑛は、ゆっくりと愛しい女の真名を唇にのせた。

「……青霞。」

「もう一度。」

「青霞。・・・・・・・・青霞。」

逢いたくとも逢えない時間が長すぎたのか、これまで抑えてきた感情の堰が切れたように激情のまま力任せに柔らかな肢体を蹂躪する冷たい唇を、青霞は静かに受け入れた。

宋瑛の自分に対する執着が何によるものなのか、青霞には判らない。

だが、寂しさのあまり誰でもよいから傍にいて欲しいと泣いた夜に、貴重な休息の時間を削ってまで駆けつけたこの男を青霞はもう憎むことはできなかった。

それどころかむしろ。

嬉しかったのだ。

自分を案じて、なりふり構わず来てくれた怜悯な皇帝の心が、涙がでるほど嬉しかったのだ。

少なくとも、この後宮において彼だけは青霞を「郭青霞」として見てくれる唯一の人なのだということを素直に認め、青霞はそつと自分の上にある宋瑛の引き締まった頬に纖手を滑らせた。

訝しげに落ちてくる視線に微笑みかけると青霞は言った。

「今宵、陛下が来てくださってよかった。本当は、寂しくて、怖くて眠れませんでしたの。」

その言葉に、宋瑛は嬉しげに目を細める。

それは例えこの雨が続く間だけだったとしても、確かに想いの通じあった恋人たちの姿だった。

時告鳥が鳴くまで、仮初めの恋人たちは固い抱擁をしたまま幸せな夢に微睡むのだろう。

束の間の安らぎを守るように、雨は静かに降り続いた。

＊＊

「貴妃様……。」

李貴人は郭貴妃に、躊躇いながらも伝えた。

自らの姉が放った言霊に、目の前の温室の華のような若い貴妃が苦しまぬよう。これ以上、彼女が貴妃を寵愛する皇帝を憎まぬよう、李貴人は勇気を出して踏みとどまった。

――どうか、これ以上誰も不幸になりませんように。

その一心で、彼女は姉に逆らった。

「徳妃様は、陛下を憎んではいませんでした。むしろあの方は、ここへ来て陛下に初めて『人』として扱ってもらったと、心から陛下を敬愛し感謝されておりました。」

身寄りのない美しい娘が、それまで周囲の男たちにどんな扱いを受けてきたか想像するのは容易い。

「お身体を壊し、歌えなくなった徳妃様は、ただ陛下をお慰めできないことだけを憂いておりました。あの方は、陛下がどれほど孤独で厳しい立場におられるのかをきちんと理解していらしたのね。・・・だから、たとえば、雨の向こうに聴こえる声が徳妃様のものだとしても、それは決して誰かを恨むものではなくきつと陛下をお慰めするために歌っていらっしゃるのですわ。」

珍しく多弁な李貴人を意外に思いながらも青霞はその言葉にじっと耳を傾けた。



「ですから、徳妃様は貴妃様のことを憎むなどありえませんか。だって、あの方は陛下の幸せだけを願っていたのですもの。陛下が本当の意味であの方を愛していないことを御存知でいらっしゃるはずなのに、あの方はいつだって、陛下の孤独を癒してさしあげることのできる御方が現れることを祈っていたらっしゃいました。」

「何が、仰りたいの？」

徳妃の想いが切なくて、李貴人の必死な表情が痛くて青霞は耐え切れず視線を落として問うた。

「難しいことはありませんわ。ただ………」

「「ただ、陛下を一人の『人』として見て。そして愛してさしあげて。」」

李貴人の声が、他の誰かと重なったように聞こえた。

何かに惑わされているのだろうか。

宋瑛の腕の中で目を覚ました青霞の脳裏をそんな考えがよぎる。

だが、いまだ眠りの淵にいる宋瑛の穏やかな寝顔を見ているとそんなことはどうでもいいのかもしれないと思った。

まだ時告鳥は鳴いていない。

ならば、もう少しだけ何もかも忘れて束の間の温もりに甘えてもいいのだろう。

いつの間にか雨が上がっていることに気づいた青霞は、静かに微笑むと再び目を閉じたのだった。



### 第三章 変わる愛変わらぬ愛 1

郭貴妃懷妊、という宮廷中が待ちわびていた報告が皇帝に上がるより二月ほど前。

郭貴妃が皇帝の寵を受ける以前。いつものように皇帝が気紛れで手折った華が実を結んだという予想外の事実が、後宮内を密かにゆるがした。

その幸運（かどうかは極めて微妙だが）な女性には朱淑妃と呼ばれる。彼女は、潘淑妃が宋瑛に見出される以前から彼の側室として仕えていた下級貴族の娘で、甄皇后や潘淑妃のような華やかな美しさは無いが、大人しく賢明な氣質が宋瑛に気に入られ、過度の寵愛こそなかったものの「淑妃」の位を与えられそれなりに尊重されている存在だった。

長らく宋瑛に仕えていながら、何故この時期に懷妊なのかと思慮分別のある宮廷人たちは朱淑妃の立場を思いつたが、後宮内においても皇帝の中でも大した地位を占めてはおらず、これといった有力な後ろ盾もない淑妃の懷妊は、外廷内廷いずれの場でもさほど大きな波紋を呼ぶことはなかった。

ただ、同じ「淑妃」である潘淑妃の内心は苛立ちとやるせない怒りを募らせる一方だったが、それもまた池に投げた小石が生み出す小さな波紋の一つにすぎない。

だが、大貴族の娘にして宛紀でもっとも権勢のある王家を後ろ盾と

する郭貴妃が懷妊となれば、ことはそう簡単にはいかなかった。

体調を崩し、表に一切出ることもなく寝宮である長春宮に引籠もることおよそ三ヶ月。

皇帝から直々に遣わされた侍医は、ようやく青霞の懷妊を認め、肩の荷が下りたような、そしてどこか誇らしげな表情でその僥倖を皇帝に報告したのであった。

「おめでとうございます。」

青霞の体調不良が懷妊の兆候であると知った宋瑛から無言の圧力をかけられていた侍医は、おそらくそれを誰よりも待ち望んでいるであろう皇帝に吉報を知らせることができる安堵から、晴れ晴れとした表情で皇帝最愛の寵姫に祝いの言葉を述べた。

誰が言うまでもなく、やがて「郭貴妃懷妊」の知らせは瞬く間に宮中に広がり、皇帝の喜び様は言うまでもなく、貴族たちからの祝いの品や献上品も朱淑妃に対するそれとは比較にはならなかった。

この上ない慶事に長春宮そのものがその名の通り萌えいずる春を迎えたように華やいだ雰囲気包まれる中。

まるで覚めない悪夢を彷徨っているかのように、当の本人である青霞だけが一人沈痛な面持ちで寝台の中に納まっていた。

望まぬ懷妊と自分の意思とは関係なく動き出した権力に群がる周囲の思惑にただ流されてゆくだけの我が身を情けなく思う反面、このことを知った季圭は果たしてどう思っているのだろうと考えると、青霞は目の前が真っ暗になるような気がして身動きがとれなかった。そんな彼女に、一筋の光明を投げかけたのは、人目を避けるように近づいてきた見知らぬ女官。

気分がすぐれないから一人になりたいと、お決まりの口実で人払いをした寢所に、その女官は音もなく滑り込んできた。

「お静かになさいます。私は王大将軍様の遣いの者です。」

突然のことに帷帳の中で瞠目する青霞に、女は声を潜めて言った。

「季圭様の？」

「はい。私は、王懿様の間者をしております。この度、貴妃様の御懷妊により俄かに身边が危険にさらされることを案じた主が、私をこの後宮に送り込んだ次第。」

淡々と語る女に、青霞はどう反応してよいか判らなかった。

「わたくしの身が危険だと？季圭様がそう申されたのですか？」

「はい。貴妃様は、この後宮の恐ろしさをご存知ありません。これまでは皇帝陛下の庇護もあり、直接的な攻撃はありませんでしたが、……懷妊されたとなれば話は別です。貴妃様のこれ以上のご栄達

を望まぬ者達は、あらゆる手段を使って御子の誕生を阻むでしょう。」

「・・・・・・・・誕生を、阻む・・・・・・・・。」

その言葉の意味を悟り、青霞は身を竦ませた。

青霞は知らぬことであつたが、これまでも後宮で皇帝の気紛れによつて手付きとなり身籠つた女官は少なからずいた。しかし、彼女達が無事に子を産むことはなかった。

——嫉妬した女たちの手によって、陥れられその女官自体が葬られるか或いは陰湿な折檻を受けて流れてしまったのだ。

一見すると絢爛豪華、優雅と美を競う後宮という場所は、一步踏み込めばまさに命懸けの女の戦場に他ならなかった。

自分の知らぬところで、あまたの憎悪と恨みをかっていることをあらためて思い知らされた青霞は、力なく項垂れた。

「懐妊も栄華も、わたくしは一度たりとも望んだことはありませんでした。・・・・・・・・相手が皇帝陛下とはいえ、他の殿方の子を身籠つたわたくしを、季圭様はさぞ軽蔑なさっていることでしょうね・・・・・・・・。」

これまで自ら封じてきた言葉を口にした途端、青霞は涙を抑えることができなかった。

その思いは、懐妊してからずっと彼女を苦しめていたことの一つだ

った。

他の男に抱かれあまつさえ身籠った自分を、きっと夫は許さないだろう。

すでに切れかけた縁とはいえ、別れの言葉一つ交わすことのできなかった青霞が夫への想いを断ち切るなどできるはずもなく。

すぐに会えると信じて疑わずに長安へと夫を送り出したあの日から、青霞の中の王懿への情愛は変わることなく鮮明に焼きついたまま。

例え時の流れの中で夫の姿かたちがぼやけてしまったとしても。「愛しい」という気持ちだけは失われることはなかった。

それ故に、心ならずも夫以外の子を孕んでしまったという現実  
は青霞を打ちのめした。

既に新たな妻を迎えたという王懿が、このことを知ったらどう思うだろう。

もしかすると、もう自分のことなどとうに忘れて、馬鹿な女だと、晒うかもしれない。

もしかすると、すでに他の妻に心を移し、青霞のことなど気にも留めていないのかもしれない。

そんな悪い想像に取り付かれ、いつそのまま腹に宿った命ごと儂くなってしまうという破滅的な衝動にかられることもあった。  
.....それができなかったのは、ひとえに、青霞の懷妊を心から喜んでいる様子の宋瑛が何かと細かやかな心遣いを顯し、暇さえあれば長春宮へ訪ねてくるからであった。

少なくとも、腹の子の誕生をこんなにも喜んでくれる人がいる・・・  
そう思うと優しい青霞にはどうしても身勝手に子の命を奪うことはできなかった。

そして、そんな自分が情けなく、皇帝と夫への間で青霞の心は引き



裂かれ透明な血を流した。

しかし、王懿の放った間者……白紗と名乗る女はそんな青霞の絶望を一蹴した。

「もし主がそのようにお考えでしたら、手の込んだ策を弄してまで私をこの後宮に送り込んだりはしますまい。……主は今も、『我が妻は青霞のみ』と仰せにございます。ですから貴妃様。どうか、くれぐれも御自分の命を粗末になさいますな。」

「……………ならば。季圭様に逢わせてくださいませ。」

数々の修羅場を潜ってきたのであろう「間者」である女を前にして、青霞は思い詰めたように低く言い放った。

その言葉に、一瞬沈黙したものの表情を変えることなく、女は貴妃の言葉を小娘が浅慮な思いつきを、とばかりに容赦なく突き放した。

「愚かなことを。今ここで御二人が逢ったとて何になりました。発覚すれば、主はもとより、いかに陛下の寵を得ているとしても。貴妃様、貴方様御自身の身も危うくなるのですよ？」

女の言い分はもったもたなことであった。

後宮の……しかも皇帝の手付きである側室が臣下と通じるなど言語道断。下手をすると一族もろとも処分されかねないほどの大罪である。

しかも、類は青霞のみならず当然、相手方である王懿にも及ぶだろう。

むしろ、事が露見したあかつきに最初に断罪されるのは皇帝の寵姫に手を出した王懿ということになるのは必至。

王懿の忠実な僕である女が、主にそのような危ない橋を渡らせることを拒むのは当然であった。

だが、そのことを頭では理解していても。

この一年という歲月。意にそまぬことばかりを強いられる日々にひたすら耐え、皇帝の矛盾した愛情と、別れを告げぬまま何一つ終わっていない夫への想いの狭間で苦しみ続けてきた青霞の精神はすでに限界にきていた。

「一度……一度だけでよいのです。季圭様に逢わせてくださいませ。もし叶わぬというのであれば、わたくしは腹に宿ったこの命ごと消えましょう。」

「……………」

青霞の捨て身の脅しに、流石の女も閉口した。

大人しく流されるだけの、美しさと教養が取り柄の深窓の姫君だとばかり思っていたこの貴妃は。

儚げな外見とは裏腹に、なかなか一筋縄ではいかない芯の強さを秘めているようだ。

さすがは宛紀が誇る伶俐で孤高の天才軍師が、唯一人の妻と決め、迎え入れただけの女性である。

女は、当初に抱いていた青霞への評価を秘かに改めた。

だからといって、すぐに二人を引き合わせる、というのはそう簡単なことではない。

何しろ、懷妊を知った皇帝はこれまで以上に貴妃を丁重に扱い、箸より重いものを持たせぬよう長春宮に使える女官の数を増やし、鬱陶しいまでの過保護で十重二十重に貴妃を囲む始末。

そんな中で、人目を忍んで貴妃をこの宮殿から連れ出すのは至難の業であることは明白だった。

しかし、この状態を長く続けさせることが、けして貴妃にとって良い結果をもたらさないことも女の目には明らかだった。

青霞が意図しようがしまいが、こんな息の詰まる環境の中で不安定な精神を抱えたまま産み月までの長い時間を恙無く過ごせるとはとても思えない。

最悪の結果を迎える前に、なんとしても青霞に生きる希望を持たせなければ。

女は素早くそう判断した。

王懿に心を寄せる皇帝の寵姫が御子を生む。

もしその子が男子で周囲の予想通り皇太子として立太されることになり。万が一その子が幼くして皇帝になるようなことがあれば。

宛紀国はおろか、この大陸全土の覇権すべてが王懿の意のままになるだろう。

何故なら、皇帝にとって母後の影響力は強大であり、その母后が頼みとする宰相は絶大な権力を手にすることになるから。

そして、国力、軍事力すべてにおいて他の二国を凌駕する宛紀は、王懿が実権を手にしたならば必ずや速やかに天下を統一するであろうことを、主の才を盲目的に信奉する女は確信していた。

主である王懿は、このまま宋氏の臣下で終わる器ではない。

そう信じる女は、それ故に青霞にはなんとしても太子と成り得る男子を出産してもらわなければならなかった。

「判りました。主には貴妃様のお心、必ず伝えましょう。ですからどうか、くれぐれも早まったことはなさいませんように……」。

しばしの沈黙の後、すらりとした細身の女は、そう釘をさすと現れた時と同様音もなく青霞の前から姿を消した。

### 第三章 変わる愛変わらぬ愛 2

謎めいた主従の間でどんなやりとりがあったのか、推し量る術のないまま、青霞の強い望みは不意に適えられることとなった。

女……白紗の手引きによって王懿と青霞が再会する手はずが整ったと青霞が聞かされたのは、例の押し問答から一週間が過ぎた頃のことである。

宋瑛が愈南との戦に備えて、澣との和睦を結ぶべく澣からの使者を迎えるための宴に出席するために、貴妃の元へ渡ることが出来ない日々が続くのを見計らったの逢瀬だった。

貴妃の装束に比べると格段に質素な女官の衣装を身に纏った青霞を連れて、白紗は何食わぬ顔で後宮を闊歩する。

そんな白紗の後を、宮廷に連れて来られてそれなりの月日が経ったとはいえ、内廷（後宮）すらほとんど出歩いたことのない青霞は、角を一つ間違えると即座に迷子になってしまいそうなほど広い宮廷の中を不安げな足取りでついてゆく。

白紗が夜陰に紛れて青霞を導いた場所は、皇帝の寝宮である養心殿や貴妃の長春宮、皇后の住まいである儲秀宮など、主だった嬪妃たちが生活する寝宮が連なる西宮とは反対側の東宮にある宝物殿だった。

そこは長春宮からはかなり離れた場所だった。庭の隅々まで手入れの行き届いた華やかな西側と違い、人気なく閑散とした薄暗い雰囲気の中宮の、しかも滅多に人が訪れることのない

いという宝物殿は、禁じられた逢瀬を果たすにはふさわしい場所なのだろう。

皇帝の貴重な金玉珍宝を納めた宝物殿の重厚な扉にかかった頑丈な鍵を、明るい色の髪に挿していた銀の簪でいとも簡単に開けると、白紗は暗い建物の中へと青霞を誘う。

「ここで、しばらくお待ちください。間もなく主が参られるはずですよ。」

漆黒の闇の中、高い天井から釣り下がった宮灯にはあえて明かりを灯さず、部屋の最奥にあった燭台に手元の火を移すと、白紗は青霞に一礼し中の間を後にした。

仄暗く殺風景な空間に一人取り残された青霞は、熱に浮かされたように感情のまま行動を起こしてしまった己の無謀さをようやく冷静に見据えるほどには頭が冷えてきていた。

白紗にも忠告された。

もしこのことが露見したなら、自分だけでなく王懿ひいては王一族すべて、あるいは郭一族までもが破滅の危機に曝されるだろうと。

今更ながらにその意味を噛み締め、己の我が侘で夫に紙一重の危険な橋を渡ることを強いた自分を青霞は恥じた。

しかし同時に、それでも尚、どうしても引き下がれない自分がいることを彼女は認識していた。

本当に。

夢でさえ逢うことのできなかった夫に、もう一度触れることができたなら。

一族も自分もどうなってもよいと。

理性では抑えきれない感情がそう悲鳴を上げていた。

後宮・・・宋瑛に縛り付けられたこの身で王懿に逢ったとして。それからどうしたい、どうしようという展望は何もなかった。

お前はもう妻でも何でもない、王懿に最後通牒を突きつけられるのならそれでもよい。

きっと、そう告げられることは身を切られるように辛いだろうが、それはそれで何一つ決着のつかぬまま真綿で首を絞められていくような日々を終わらせることができるから。

――妻らしいことを、何一つそれらしいことをして差し上げられなかった。

若くして王懿に見初められ、とんとん拍子に進んだ縁談。

これ以上の婿はないと喜ぶ両親に見守られ、幸いなことに婚家の姑にも大切にされた。

年の離れた夫は気難しいと評判であったが、青霞にはこの上なく優しい夫だった。なに不自由のない幸せな結婚生活。このまま幸せが続くのだと、信じて疑わなかった日々。

そんな幸せは、慣れ親しんだ屋敷の庭に根付いた見事な梨花のように風の吹くまま儚く散った。

今となつてはあまりに遠い懐かしくも輝かしい想い出。

時が経った今でもなお輝きは色褪せない。青霞は、間違いなく幸せだった。

やるせない思いでそつとついた吐息が青霞の桜色の唇から漏れた時。

彼女の背後で、カタリと物音がした。

咄嗟に身体を強張らせ振り向いた青霞の瞳に映ったのは。

まだ冷たい春の夜の外気とともに宝物殿に踏み込んできた上背のある人影。

「・・・・・・・・季圭様・・・・・・・・」

近づいてきた人の姿が、心もとない灯りの前に次第に明らかになる。下級文官の装束を着けたその人は、紛れもなく青霞が焦がれてやまぬ夫だった。

別れた頃と変わらぬ冴えた美貌に、時の流れを忘れ。

込み上げる様々な想いに言葉もなく、青霞は流れる涙を拭うことすらせずただ食い入るように男を見つめ続けた。



「青霞」

聞き慣れた低い呼び声に引き寄せられるように、青霞はおぼつかない足取りで王懿のもとへ歩み寄る。

二人とも、無言だった。

愚かなことをしていると、二人とも自覚していた。

だがそれ以上に強い、身を焦がすような想いに突き動かされ、二人は本来あるべきではない位に身を褻し寂寞とした場所で息を潜めて互いに見つめ合う。

権力によって心ならずも引き離された夫婦は、久方の再会に、無言のまま自然と元の「比翼連理」に戻ろうとする。

そして何の違和感もなく、互いの名を呼ぶ時間さえ惜しいとばかりに互いに激しく抱き合った。

暖も明りもない宝物殿は、普段簡単に開けられる場所ではない、閉ざされた空間ゆえに凍えるような寒さだった。

そんな中、ようやく触れ合うことの出来た青霞と季圭は、まるで互いの体温で温め合うかのようにぴったりと身体を重ねていた。

微かな明かりの下で、愛する者の瞳を唇を白い指を手探りで確かめるかのように固く手を握り合わせたまま、吐息が触れるほど近くに顔を寄せて。

青霞は、離れていた時間など感じさせぬ怜悯な季圭の容色に、あらためて愛しさを募らせ。そして、堂々と彼の傍に侍ることのできる女たちの存在を意識し。

季圭は、咲きかけの蕾のような瑞々しい少女から男の心を揺らさずにはいられない儚くも妖艶な華へと変貌を遂げた妻に、他の男の影を感じずにはいられず、少なからぬ妬心に苦しんだ。

猜疑も嫉妬も必要のなかった、ただ優しさと愛だけで満たされたかつての二人にはもう戻れない。

頭では理解していても、こうして己の目の前に突きつけられた現実にはやはり二人を苦しめる。

そんな夫の複雑な心中を、青霞は重ねた手から伝わる体温とともに敏感に悟った。そして己の心の有り様の変化も。

しかし、彼女の口から零れた言葉はただ一つ。

「お逢いしとうございました。」

それが、それだけが、青霞の偽りのない本音でありすべてだった。実現するならば、己の命を懸けてもいいとまで願った、たった一つ

の希望。

主が束の間の逢瀬に身を投じている間。

宝物殿の外で見張りをしていた白紗は、まだ肌寒い夜の大気の中で、欠けた月が雲に隠れるのを静かに眺めていた。

愚かなことをした。

今、自分がしていることは、どう考えても主の益にはならない。むしろ見つければそれですべてを失ってしまうほどの危険すぎる賭けである。

だが、そのことを十分承知の上で王懿は貴妃と逢う事を決意した。

皇帝の寵妃となり、太子になるかもしれないぬ子を身籠った、もはや取り戻すことなど不可能な元・妻に命懸けで逢うなど、これまでの白紗が知っている王懿からは想像もつかない無益な行為に思えた。

だが、同時に「愛」を知らない白紗は身を滅ぼすほどの「愛」に焦がれる二人を心のどこかで羨んでもいた。

王懿の信頼を得る間者である白紗にとって「愛」も「身体」を差し出すことも、すべては任務を遂行するための手段でしかない。

大恩のある主のため常に優秀な間者であるべく、白紗は「心」を捨てた。

だが、遠く引き裂かれても尚、互いを想い合う心の強さと美しさに、白紗の捨てたはずの心が疼いた。

一層深まる宵闇に、まるでこの現世から二人の姿を隠してしまおうと天が配慮しているようだと思っただけでも思っただけでも柄にもないことだと自嘲しながら、主の栄達を望む一方で、一人の男としてと妻を想う主の心を満たしてやりたいという矛盾した気持ちの間で、常に冷徹な間者としての仮面を被る白紗の内心もまた静かに揺れていた。

### 第三章 変わる愛変わらぬ愛 3

季圭に、言いたいことは沢山あった。

宛紀国において皇帝に次ぐ実質の最高権力者でありながら。

何故、むざむざ自分を後宮に差し出したのか。

宋瑛から賜ったという二人の妃に、心移してしまったのではないか。

もとより、正室こそ迎えなかったが最高の地位と権力、端正な容姿と冴えた頭脳を持つこの貴人には、青霞を妻とする以前、愛妾と呼ばれる存在が数人存在したことを青霞は知っている。

それは、地位のある貴族であればごく当たり前のことであったが、王懿は青霞を娶ることが決まってからすぐに、それらの愛妾を後腐れないよう卒のない配慮でもってことごとく遠ざけた。

だが、名門・王家の長でもある季圭には家門の繁栄とともに跡継ぎを残さなければならぬという義務がある。

正室である青霞が皇帝に召された以上、彼女が王懿の子を儲けることはけしてない。

そうであれば、いずれ、王懿は自分以外の妻を娶り子を成すのであろうと覚悟はしていたものの。

実際にこうして愛しい男の温もりに触れ、焚き染められた懐かしく

も高雅な香りに包まれると、どうしても彼が他の女を抱くという事実を受け入れることが出来ない青霞だった。

夜毎、夫以外の男に身を任せあまつさえ男の子を身籠ってしまった自分に、そんなことが言える権利などないことは百も承知していた上で、それでも青霞は他の女を娶った王懿を恨めしく思わずにはいられない。

だが、今更どうしてそんなことが言えよう。

器から零れた水が元に戻らないように。

二人もまた元の夫婦に戻るなどできないことなど、青霞自身一番よく解っていた。

だから彼女は何も言わない。

ただ、この奇跡のように与えられた夫と二人きりで過す僅かな時間を、せめて二度と忘れぬよう我が身に刻みつけ、それをよすがに生きてゆこうと青霞はひたすら王懿の胸に縋りついた。

言葉にせずともそんな青霞の想いを汲み取ったのだろう。

王懿は、妻を抱く腕に力を込めながら静かに言葉を紡ぐ。

「そなたが、自分を責めることなど何一つない。すべては、私が至らなかったせいだ。……陛下が私の執着するものに興味を示すだろうということを予測していながら……。無防備にそなたを一人にってしまった私の咎だ。」

「・・・・・・・・季圭様。」

「確かに私は妻を娶った。」

その言葉に、青霞の肩が微かに揺れる。そんな妻を早春の冷たい隙間風すら入れないほどきつく抱き締め宥めるようにその背を撫でながら王懿はさらに残酷な事実を告げた。

「だが、陛下から下賜された二人はあくまで側室。・・・・・・・・  
私は、この夏、郭雪華を正室として迎える。」

郭雪華は、青霞の従姉妹にあたる彼女の姉のような存在だった。  
青霞とは違い、闊達で他の従兄弟たちに負けぬほどの学問好きで、  
その男勝りな性格から伯父は「嫁の貰い手がなくて困る」とよく嘆いていた。

雪華自身も、「誰かの妻になって男や家に尽くすなんて人生、御免  
だわ。それくらいなら、出家したほうがマシよ！」と常々語っていたものだ。

その雪華が、王懿の正妻になる。

・・・・・・・・自分の場所を、大好きだった姉が奪うのか・・・・・・・・

その事実、青霞の心を深く抉った。

だが、心が血の涙を流そうとも、やはり彼女は沈黙を守った。  
むしろ、見も知らぬ高慢な女に王懿を奪われるくらいならば、尊敬

する姉のほうがましなのかもしれない。青霞は必死に自分にそう言い聞かせた。

しかし。

だとしたら、何故、こんなにも涙が流れるのだろう。本来であれば、青霞にとって喜ぶべき慶事なはずなのに。

無言で震える青霞を抱きしめ、王懿は低く慰めるように美しい妻に優しく語りかけた。

「泣くことはない、青霞。雪華は承知している。私の真の妻は青霞、そなただけだ。知った上でこの婚姻を承諾した。何故だか解るか？」

意外な夫の言葉に、青霞はようやく涙で濡れた蒼白い顔を上げた。

「雪華もまた、そなたのことを大切に思っているのだ。そして、そなたは皇帝の子を懐妊した。もし、その子が男子ならば……いや、女子であろうと、そなたが懐妊したという事実が重大なのだ。解るか？そなたは、これから今まで以上の危険に晒されることになる。それを少しでも防ぐためには、より強力な後ろ盾が必要なのだ。」

つまり、青霞の実家である郭家と王家の結びつきを絶やさないうために、雪華は王懿との結婚を承知したのだという。



「……………そんな。それでは、雪華姉様は……………わたくしのために……………」

青霞は一瞬でも雪華を恨んだ己を恥じた。

同時に、「妻は青霞唯一人」と言い切る王懿のもとへ嫁ぐ雪華の想いを感じた。

あの男勝りで自分よりも劣った男を見下すくらいのある雪華が、たとえ青霞のためとはいえ容易に誰かのもとに嫁ぐとは思えない。つまり、雪華は「王懿」という青年の才能と叡智を認めたのだ。そしておそらく……………女としても惹かれているのだろう。

これはあくまで青霞の憶測でしかすぎないが、あながち外れてはいないだろうと従姉の人となりを知る青霞は思った。

だとすると、雪華の立場はあまりにも哀しすぎる。

青霞は、これ以上自分のせいで誰にも不幸になってほしくはなかった。

しかし、王懿ほどの重鎮がこのまま正室を迎えないなど、おそらく王一族も、格式と体裁を重んじる周囲の貴族たちもけして認めないだろう。何より、王懿が未だ正室を置こうとしないことに苛立っている皇帝・宋瑛が許さないことは明白である。

王懿の言葉と想いによって、これまでの失意と絶望の淵から救われたような気がする一方で、そのために夫や従姉に気まずい思いや不幸な夫婦生活など送ってほしくはなかった。

夫が彼女を想い全力で護ろうとしているのと同様、彼女もまた夫を護りたいのだ。

だから、青霞は握り締めていた夫の温かな手をそつと離した。

「青霞？」

「……もう、よいのです。その言葉だけで、十分すぎるほどですわ。本当は、自分の立場もわきまえず、妻を娶ったという季圭様に恨み言をぶつけるつもりでした。私の居るはずだった場所に、他の女が立つなんてとても許せなかった。何故、私を手放されたのかと、詰りたかった。……でも、もうよいのです。」

黒曜石のように輝く瞳に透明な涙をためて、青霞は王懿を仰ぎ見た。

「わたくしを、唯一人の妻だと言ってくださった。わたくしのために、貴方自身の危険を顧みずこうして会いに来てくださった。……貴方以外の方の子を身籠った酷い女ですのに。」

長い睫を伏せた拍子に、青霞の白磁のように滑らかな頬を涙が一筋流れ落ちた。

「それだけで、十分なのですわ。本来であれば、貴方を望んではな

らない身ですのに。おこがましくも貴方の気持ちを試すようなことを……。お許しください。わたくしは、最後まで本当に貴方にふさわしくない……。出来の悪い妻でした。」

溢れる涙が、青霞の袖を濡らす。

小さな肩を震わせ声を殺して泣く青霞の痛々しい様子に、王懿は壊れ物を扱うように慎重な手付きで、冷たくなった青霞の頬にそっと長い指を這わせた。

「泣くな。言ったであろう。そなたのせいではないと。私は、自分が望まぬことはけしてやらぬ。今宵こうしてそなたに逢ったのも、私自身が望んだからだ。」

「だが……。すまぬ。今は……。私にもどうすることもできぬ。このままそなたを連れて逃げたとて、待っているのは破滅だけだ。」

そこで言葉を切った王懿は切れ長の瞳にぞっとするような酷薄な光を浮かべた。

「……。季圭様？」

それは青霞が初めて目にする、夫の姿だった。

突然、別人のように蒼白い焰——冷酷な空気を纏った夫に驚いた青霞は涙を拭うのも忘れ呆然と夫を見上げる。

王懿は薄い唇に凄惨な笑みを貼り付けると、青霞に言い聞かせるように低く語った。

「だが、私は必ずそなたを取り戻す。そのためなら、どんなことでもしよう。よく聞くのだ、青霞。この宮廷・・・ひいては後宮で生き延びる為にはまず『力』が必要だ。今は陛下の寵愛がそなたを護っているが、懐妊したとなれば状況は全く異なろう。女人だけの後宮で、いかに皇帝陛下としてそなたを護りきることはできない。そなたは皇后に次ぐ地位にあるとはいえ、立場は不安定だ。・・・だから、子を産むのだ。皇帝の御子を生めば、たとえ陛下の寵愛が他に移ろうとも、そなたの立場はゆるぎないものになる。それが男子であれば我が一族が総力を挙げて後見しよう。」

青霞にとっては身を切られるような現実を、王懿は容赦なく突きつけた。

夫から他の男の子を産めと、直接言われる皮肉に青霞は声を上げて泣きたいと思った。

だが、闇に浮かぶ王懿の白皙の美貌が感情を一切廃した無機質さで彩られているのを目にして、夫もまた苦しんでいることを理解した青霞は、唇をきつく噛んでじっと耐える。

「後宮には魔物が巢食っている。だから青霞、けして誰も信じてはならぬ。どんなに甘言にも美しい仮面の下にもすべて猛毒が潜んでいると思え。そして生き延びるのだ。私はいつか必ず、そなたを迎えに行く。だから、けして諦めてはならぬ。負けてはならぬ。この魔窟で勝ち残るために、陛下の子を産むのだ。そして、この後宮での戦いを勝ち抜け。」

残酷な言葉を吐き続ける王懿に異を唱えることなく、青霞は小さくこくりと頷いた。

絶大な力を持つ皇帝が安定した地盤の上に君臨するこの宛紀国において、「いつか必ず迎えに行く」という夫の言葉を実現させるのはほとんど不可能なような気がした。

だが、たとえその言葉が青霞に無事子を産ませるための王一族の長としてのものだったとしても。

少なくとも自分に「生き延びろ」と言った王懿の言葉に嘘はないのだろう。

夫がそう望むのならば、そうしようと青霞は思った。

それが、彼に出来る自分の精一杯の償いだから。

「主。そろそろ、刻限です。」

無言で見つめ合う二人を引き裂くように、遠慮がちに扉の外から声をかけてきたのは、青霞をここまで導いた王懿の腹心・白紗だった。

「そうか。」

二人きりでいられる時間は短い。

いかに人払いをして寝台に細工を施したといっても、仕える侍女が殊の外多い長春宮にあって、貴妃の不在を気づかれるのはさほど時間はかからないだろう。

大事になる前になんとしても青霞を寝宮に戻さねばならなかった。

「季圭様。……いえ、王大将軍様。わたくし、生きます。生きて、必ずこの後宮で勝ち残ってみせますわ。……ですから、貴方様もどうか御健勝で……。どうぞ、雪華姉様を大切にしてくださいませ。」

それは、青霞なりの夫への決別の言葉だった。

しかし、王懿はそれを受け付けず冷徹なまでの決意を込めた表情で言った。

「忘れるな。私の妻は、そなただけだ。そなただけが、私の唯一人の妻。たとえどのような災いが降り注ごうとも、そのためにどのような犠牲を払おうとも、私は決してそなたを忘れはせぬ。」

離れ難い想いを振り切るように、毅然と顔を上げるとこれまでになく強い瞳で青霞は王懿を見た。

王懿もまた、妻の梨花のような儂げな美しい顔をその目に焼き付け

るようにじつと青霞を見つめていた。

そして、一度離れた身体は絡められた視線に引き寄せられるように再び熱い抱擁を交わす。

重ねた唇から伝わるぬくもりと、身も心も引き裂かれるような決別の痛みと、最後に互いの愛を確認できたというささやかな幸せと。

持てるすべての想いを込めて交わした最後の口付けを、青霞はきつと生涯忘れることはないだろうと思った。

そうして、来た時と同様、白紗に先導され青霞は長春宮への長い道のりを歩き出す。

優雅な衣擦れの音をさせ暗い回廊を進みながら、次第に遠くなってゆく夫との距離に胸が潰れるような気がした。

しかし、青霞はけして振り返らない。

振り向いたら最後、二度と王懿と離れられなくなりそうだったから。

——私は生きる。そのために強くなる。……貴方がそう望むなら、この後宮できつと勝ち残ってみせる。

いつか逢えるのなら。

それが、ただの「夢」だったとしても。夫がくれた「希望」があればどんな困難でも乗り越えて見せると。

青霞は固く心に誓った。

「……青霞を頼むぞ、白紗。」

扉の陰から二人の背中を見送りながら、ポツリと王懿は呟いた。

これから青霞は幾多の困難——それも生命の危険に関わる——に遭うだろう。

皇帝でさえ実質的に力の及ばない後宮で、彼女を護りきることはさしもの王懿にもできない。

だから、彼は最も信頼できる間者を送り込んだ。

数々の修羅場を潜り抜けてきた優秀な刺客でもある白紗ならば、きっと青霞を脅かす魔物から彼女を遠ざけてくれるはず。

青霞が生む子が男子であれば、彼女は後宮で甄后をしのぐ力を手に入れるだろう。

「私も、準備せねばなるまい。」



『力』が必要だった。

王懿が初めて自分から欲した者を、取り戻すために。

皇帝一族……宋氏をも超える『力』が。

王懿は、雲に覆われた春の朧な空を見上げた。

見えないはずの星の動きが、彼には見えるような気がした。

——そろそろ、愈南が動くな。戦が起きる。丁度良い……邪魔なものは早々に消えてもらおうとするか。

青霞を奪われて以来、用心深く幾重にも張り巡らしてきた恐ろしいほど巧妙な罠を、いよいよ動かす時が来たことを王懿は感じていた。失敗は許されない。

一族のためにも、青霞のためにも。

「せいぜい、今のうちに栄華に酔っているがいい。いずれにしろ、行く先は地獄だ。」

来るべき日のことを思い、王懿はクツクツと嗤った。

それは、目にした者がいたなら一瞬で凍り付いてしまうほどの、美

しくも凄惨な微笑みだった。

そうして王懿もまた歩き出す。

青霞たちが歩み去った方向とは逆の、回廊を照らす燭台一つない暗闇の中へ。

両者ともに多くの犠牲を払うことになる愈南との戦が始まったのは、それから間もなくのことであった。

### 第三章 変わる愛変わらぬ愛 4

夜吐く息が白い季節もようやく過ぎ去り。

庭に咲く白梅の品のよい香りと庭の梢で高らかに謳う鶯の聲が、洛陽に遅く、その分一斉に花が咲き乱れる豪奢な春が訪れたことを告げていた。

まだ外気は肌寒いが、久方ぶりにうらかな陽気が端整な庭を輝かせる、ある昼下がり。

酷い悪阻も治まり、久方ぶりに体調も気分もよい青霞は庭に面した日当たりの良い長春宮の格子をすべて上げさせた中の中で、気紛れに箏を爪弾きながら静かに春の気配を楽しんでいた。

「貴妃様。」

雅で流麗な箏の音を妨げることに罪悪でも感じているかのように、遠慮がちに声をかけてきたのは貴妃付の侍女頭である月梅だった。

春の柔らかな日差しに触発されたかのように珍しく明るい表情を見せる主の機嫌を損なうような報告をしなくてはならない気まずさに、細面の顔を僅かに俯かせて月梅は皇后が間もなくこの長春宮へ訪れて来るといふ知らせが儲秀宮から急に届いたことを告げた。

「皇后様が？」

意外な人物の突然の訪問に青霞は瞠目した。

この国で最も高貴な女性である皇后・甄婉容とは、青霞が「貴妃」として宋瑛の後宮へ入内した際に儀式を執り行った乾清宮の「御座の間」で顔を合わせて以来、まともに言葉を交わすこともない仲であった。

その後の折々の公式の場で席を共にすることはあっても、視線一つ交わすこともなく。

甄后の思惑はどうであれ、皇帝・宋瑛の正室である甄皇后の前であっても側室である青霞への寵を隠そうともしないあからさまな態度は、まるで側室である自分が正室の立場を蔑ろにしあまつさえ皇后の矜持を踏み躪っているようで。

青霞は甄皇后に対してだけは何故か罪悪感めいたものを抱かずにはいらなかった。

ことは青霞のせいではないものの、やはり自分が同じ立場だったならば、それはどれほど屈辱的で耐え難い苦痛であろうと、夫・王懿のことを思うとやるせない気持ちにどうしてもなってしまう。

ゆえに、青霞は他の女達はともかく、宋瑛が皇帝になる以前から長らく彼を支えていたという正室・甄夫人に対してだけは、おのずと引け目のようなものを感じずにはいらなかった。

貴人の妻の宿命であれば、夫が他の室を娶るのを甘受するのが正室の務めであることは判っていても。

果たして、己が王懿の正室としてあった際に彼の人が他の女人を迎え入れると知ったら、自分は冷静でいられたかどうか。

きっと、諦めて受け入れはしても夫がその女の元へ通うたびに、胸が潰れるような思いをしただろう。

そう思うからこそ、青霞は皇后にだけは皇帝の寵を受けることへの

罪悪感を反射的に持ってしまうのだった。

いくら夫婦として冷え切った間柄とはいえ、突然降って湧いたように現れた「郭貴妃」という存在はけして皇后にとって愉快なものではないことは明白だったから。

だから青霞は、そのような後宮の女達が一同に会する場では、ひたすら俯いて誰とも視線を合わせなかった。

それ故に、彼女は知らない。

皇帝の隣で、何事にも動じない風に高貴な微笑みを湛え毅然と前を向く皇后の瞳が。真冬の夜気よりも冷たく凍て付いていたことを。

万事がこういった風に、あえて互いに接触をしようとしない二人であつたから、青霞はこれまで一度も正面から皇后と相對したことはなかった。

それは、青霞の懷妊が確實になってからも同様。皇后からは何の動きもなかった。

そんな皇后が今更一体何の用なのか。

おそらく、青霞にとってはけして快いものではない要件なのだろうと察するにつけ気が重くなるものの、目上である貴人の訪問を断る術はなく。

青霞は仕方なく、箒の爪を細い指から外しながら気が進まぬ様子で皇后を迎える準備を月梅に命じた。

やがて、数人の女官を従えた皇后が優雅な足取りで青霞の前に現れる。

そして、用意されていた上座の席に腰を下ろすと、ゆったりと脇息にもたれながら甄后は下座で堅くかしこまる青霞に鷹揚に声をかけた。

「突然お邪魔して、ごめんなさいね。本当であれば、貴女が陛下の御子を身籠ったことがはっきりした時にすぐにでも、御祝いを申し上げなくてはいいかもしれませんでしたのに。」

女盛りの気品ある美貌と仄かに香る雅。

金糸で刺繍された高貴な紫の袖からのぞく淡い青の重ねの色合いも絶妙で、その着こなしは皇后の趣味の良さを物語っていた。

艶やかな紅い唇から零れる声は、凜として涼やか。

霊蛇簪と呼ばれる型に複雑かつ流麗に結い上げた髪は、それを飾る簪が派手なものではないことが逆に彼女の髪の滑らかさを引き立てていた。

所作の一つ一つが洗練と優雅さを醸し出す皇后は、まさにこの世に舞い降りた天女……いや女神のような神々しささえ漂わせていた。

華北一の美女と名高い甄后その人を初めて間近で見た青霞は、噂に違わぬ非の打ち所のないその姿に、女神がいるとしたらまさにこの

ような容かたちなのであらうと思わずにはいられなかった。

同時に、同性の自分でさえ思わず見惚れてしまうほどの完璧な女性を、何故宋瑛があれほど疎んじるのか、自分の置かれた境遇を忘れ疑問に思わずにはいられない。

今は亡き宋操——宋瑛の父が望んでいたにもかかわらず、その意を跳ね除けてまで手に入れたというこの傾城の美女を宋瑛が変わらず愛しんでいれば、青霞は生木を引き裂くように夫から引き離されることもなかったのに。

そんな青霞の戸惑いを見透かしたように、皇后は冷ややかに微笑んだ。

「人の心は常に移ろうもの。不変のものなどこの世にありはしますまい。まして……」

妙に冷めた声音に、青霞がはっと顔をあげると途端にその視線を皇后の切れ長の瞳に絡め取られた。

美しくも凄絶な微笑みを浮かべる皇后に怯える貴妃の視線を捉えたまま、宛紀で最も高貴な女性は淡々と言葉を紡ぐ。

「まして、殿方の心は気紛れで儂いもの。陛下とて現に、あれほど貴女様へ執着してみせたのも束の間。今は他の女のもとへ通っているように……。」

意味深にそこで言葉を切った甄後の意図を、青霞は違うことなく読み取った。

青霞の懐妊が確実になって以来、体調すぐれぬ彼女を労わり常に傍近くあった宋瑛であったが、悪阻もおさまり安定期に入った途端、まるで興を失ったかのように新しく後宮入りした南方の豪族から献上されたという董美人・蘇美人の元へと足を運ぶ日々がここ数日続いていた。

皇帝の寵を失った貴妃。

皇后の言葉はまさにそのことを指しているのだ。

しかし、皮肉なことに当の本人である青霞にとっては心身ともに重過ぎる皇帝の寵愛が他へとむけられたことは、苦になるどころかむしろ肩の荷を降ろしたような安堵と健康をもたらしていたのだが。

おそらく、後宮の女達はそう見ていないのだろうことは想像するに難くなかった。

長春宮から一步も出ない青霞にも、女官たちの言動の端々から窺うことができたのだから。

——お気の毒に。あれほど寵愛された貴妃様の天下も、これで終わりですね。



彼女に仕える女官たちでさえ、そのように口さがなく噂するのだから、他の宮に住まう妃たちはさぞかし皇帝の足が遠のいた自分を笑っているのだろう。

だが、そんな嘲笑も青霞を傷つけるには到らなかった。

皇帝の寵愛が他に移るくらい何だというのだろう。所詮は、彼の人の気紛れで召し上げられた身であれば、その気紛れが他に移るのもまた必然のように思えるのだ。

むしろ、応えることのできない宋瑛の重い想いを無条件で与えられることへの苦痛の方が遥かに辛い。

一度は諦めた夫・王懿への想いを、先日逢瀬で新たに自覚したばかりだからこそ余計に。

そんな複雑な心中をたおやかな微笑みの下に隠し、青霞は小首をかしげて上座の皇后に向き直った。

「そのようなこと……。陛下のもとにお仕える際にすでに覚悟いたしておりました。陛下は万人を愛する義務を負っているお方にございますれば……………」

一糸も心乱される様子を見せない貴妃の言葉に、皇后は僅かに瞠目しついで僅かに口元を綻ばせた。

「……………そういえば。貴女には、他に想う方がございましたものね。陛下の訪れがなくなつて、ようやく心の平穏が取り戻せた、というところかしら？」

「……何のことにございましょう？」

「ほほ。今更、隠すこともございますまい。陛下のもとにいらしてからも、貴女のお心が他にあることは周知の事実。そしてあの方もまた、いまだに貴女のみを『正妻』だと言って憚りませんもの。とはいえ、貴女はすでに陛下の御子を身籠った身であれば。もはやすべてを元に戻すことは不可能なことでありましょうが。」

「……………」

「この度のこと。妾は本当に残念に思っておりますのよ。……  
・そう。貴女のご夫君と陛下との確執。貴女の懷妊。いずれも、この宛紀にとってよくない火種となるでしょう。それが判っているだけに、尚更……」

そこで甄后は、庭園の上に広がる青空を仰ぎ見た。

長春宮の中庭には、梅だけでなく連翹、芍薬、桜花などの春の花が美しく手入れされ見事に咲き誇っている。

そして梅の古木の枝に留まった鶯が、遅い春を謳歌するように高らかに囀っていた。

穏やかな、春の昼下がりに。

卓の上に置かれた青磁の茶器に注がれた緑茶の芳香が、束の間、殺伐とした空気を和ませた。

だが、皇后と貴妃、この国において一、二を争う高貴な美貌の妃は、出された茶に手をつけることなく剣呑な刃を互いに隠し持ったまま

再び静かに向き合う。

「陛下は……。おそらく新しい側室が珍しくて戯れに華を手折っただけのことでしょう。きっと、すぐに飽いて貴女の元に戻りますわ。ええ、必ず。フフ……此度のことで貴女を後宮中の笑いにしようとしていた潘淑妃はさぞかし残念がることでしょうね。」

クスリ、と毒を滲ませた笑いを朱唇にのせて、甄后があっけなく仕掛けられた種をばらす。

「潘淑妃さま……ですか？」

意味がわからず訝しげに柳眉を顰める青霞に、皇后は目を細めた。

「本当に、貴女は何もご存知ないのね。……貴女が陛下のお相手を出来ないこの時期に二人の側室が新たに入ってきた意味を。この二人は潘淑妃の強い後押しで後宮入りしたのもっぱらの噂ですよ。」

潘淑妃……。青霞が後宮に入ってから以来、何かと彼女を目の敵にしては嫌がらせを仕掛けてくる女性。

それでも、新参の自分がいきなり淑妃を飛び越えて「貴妃」の位を戴いたせいだろうか当然だろうとは承知していても、度重なる陰湿な嫌がらせのせいで、さすがの青霞も淑妃には良い印象を持てないでいた。

その淑妃が、下手をすると青霞のみならず己の立場をさらに危うくするかもしれない女性を皇帝に近づけるとは。

一体、どれほど自分が気に食わないのか。

もつとも、淑妃のこの一見矛盾した行動には、貴妃だけでなく同じ淑妃である朱淑妃の懷妊の方がむしろ原因になっているとは、世情に疎い青霞は知る由もなかった。

何も知らない彼女はただ、淑妃の執念深いともいえる嫌がらせに、皇后の前だとは判っていても重い溜息をつかずにはいられない。

そんな青霞に追い討ちをかけるように、皇后は白く長い指で滑らかな茶器の表面を弄びながら平然と言ったのけた。

「あらあら。そんなことで溜息をついていては、これからが大変でしてよ。……二人の妃は……あの淑妃の子飼ですもの。所詮、教養も美貌も貴女には到底敵わぬ田舎育ちの市井の花。今でこそ物珍しさと退屈凌ぎで陛下の興を繋ぎとめていますが、それも時間の問題。陛下は、必ず貴女の元へ戻りますわ。……そう、まるで何もなかったかのような平然とした顔をして……………」

一瞬、皇后の陶器のように滑らかなかんばせに目に見えぬ罅が入ったように見えたのは、青霞の気のせいだったのか。

目の前の麗人の、茶器に手をかけた繊細な白い指に僅かに力が入ったのには、気づかぬふりをして青霞は無言で先を促した。

「淑妃は、突然現れ自分よりも高い位を賜り、陛下の寵愛を独占する貴女を心底憎んでいるのよ。この後宮において、貴女ほど身分も教養も美しさも申し分なく、そして陛下の寵を長らく留め置いた女

性はいなかったから……。それは、淑妃だけでなく他の妃にも言えること。今や貴女はこの後宮において最も妬まれ、憎まれている存在といっても過言ではないわ。まして貴女は陛下の御子をその身に宿している。これからは、彼女達は手段を選ばず貴女を追い落とそうとしてくるでしょうね。」

「……そんな。」

それは、あの闇夜の邂逅の折に王懿に指摘されたことでもあり、傍近くで彼女の身を護る白紗にも言われ続けていたことであつた。だが、こうして政敵といつてもおかしくはない皇后自身から直接指摘されると、我が身の立場の危うさを嫌でも肌で感じずにはいられない。

自分は、それほどに人の恨みをかう何かをしたのであろうか。青霞は自身に問う。

彼女にとって理不尽でしかない恨みもまた、後宮という場所に巢食う魔物であれば。

本人の心情など構うことなく、勝者と弱者に容赦なくその残忍な牙を向けるのが「後宮」という場であることを、その頂点に君臨し続けた皇后は知り尽くしていた。

——随分と、心もとないこと……。

自分の言葉に戸惑いを隠せない若い貴妃の儂げな美貌を冷ややかに見つめ、甄后は苦々しくそう思った。

それは、ある種の怒りでもあり、彼女を苦しめ続けた「見えない敵」への憎悪であったのかもしれない。

その性質において多大な問題があるとはいえ、身分・才能・容姿・どれをとっても類まれな輝きを放つ王懿、宋瑛という最高の男に愛されながら、その自覚もないまま、まるで風に流される木の葉のごとく頼りなげな郭貴妃という女性の在り方に苛立ちを覚えるのは、後宮という魔窟や男という生き物の性<sup>さが</sup>を知り尽くしたゆえの甄後の優しさからだった。

そして何より、そのまま王懿の妻であったなら普通の女として幸せな生涯を送ったであろう彼女を、ほんの気紛れからあえて後宮という修羅場に放り込んだ残酷な男の戯れに。

それはまさに、皇后自身がその美貌ゆえに過酷な運命に弄ばれた元凶そのものだったから。

だが、戦乱と男たちの権謀術策に巻き込まれてきた甄后と違い、郭貴妃は宋瑛の目に留まるまでは温室の中で大切に育てられたか弱い華だった。

それゆえに、手にした権力を使うことも知らず。ただ大人しく男たちの思惑に翻弄されるまま、誰かを恨むことさえも知らずまして他人と争うことなど考えもしない貴妃を、甄后は他の妃ほど疎ましく思うことはできなかった。

それは彼女が皇后という地位より下ということからの余裕もあるが、何より、青霞がこの後宮へ来ざるを得なかった事情が、あまりにも自身が辿った運命に似ていたせいかもしれない。

だから、こうして自ら格下である貴妃のもとへ出向いたのは甄后にとって最初で最後の彼女への慈悲だった。

目隠しで綱渡りすることを強いられていることすら気づかない、哀れな女への最後の警告。

そっと、衣擦れの音をさせて立ち上がると甄后は怯え惑う貴妃に厳かに言い放った。

「妾は、貴女のお腹の御子が女兒であることを心から望んでいます。そうであれば、妾と貴女はよき友として長らく支えあうこともできましよう。ですが、男子だった時は・・・・・・・・・・」

皇后が、最後まで言葉を紡ぐことはなかった。

言霊を途中で留めたまま、彼女は訪れた時と同様颯爽と紫の衣を翻すと侍女たちを引き連れ優雅に長春宮を去った。

残された青霞は、ぼんやりと皇后とのやりとりを反芻する。

途中で途切れた皇后の言葉こそ、彼女が最も言いたいことだったのだろう。

聡い青霞はすぐにそのことに気づいた。

——もし、男子だった時は、妾は貴女の敵に……。

腹の子が男子であれば否応なく皇帝の世継ぎ争いに巻き込まれる。甄後の息子・宋玲がいまだ立太されていない今、後継者が青霞の子になる可能性は大いにあった。

甄后はそれを何よりも恐れているのだろう。

我が子を想う母親であれば、それは当然の心理だった。

だが懐妊したとはいえ、いまだ膨らみもしない腹に宿る命を明確に意識すらできていない青霞にとって、生まれてもいない我が子が国を揺るがす火種になると云われて当惑するのもまた無理からぬことであつた。

だが、おそらく皇帝の子を産めと言った王懿ならば男子の誕生を望むだろう。

より権力へと近づくために。より強力な駒を手にするために。

身に覚えのない恨みをかい、それらを踏み台とし必要であれば我が子さえも利用して高みに昇る。

それは同時に、己の身を護るための方便となるのかもしれないが、そのようなやり方はどうしても青霞には受け入れることができない。

春日が燦燦と降り注ぐ庭で、鶯が高らかに囀る。



その柔らかな音に耳を傾けながらも、青霞の心は千々に乱れたまま  
晴れることはなかった。

後宮で勝ち残ってみせると決意したのはけして嘘ではないが、その  
ために誰かが犠牲になり命懸けで争うなど、今の青霞には、やはり  
想像がつかないのであった。

### 第三章 変わる愛変わらぬ愛 5

「青霞。戦場において、意味のないことなど何一つないのだよ。将兵、騎馬、土地、気候、あらゆる者の一挙一動がやがて戦局に繋がるのだ。だからこそ、戦を束ねる者はあらゆる事態を想定し、すべてを把握し制御しなくてはならないのだ。」

優しい春の陽射しを浴びながら、厳しい内容の書を辿る視線をつと傍らの青霞に移した王懿。

温かな空気とは真逆の凍て付いた瞳をして、珍しくも戦について将としての心構えの一端を垣間見せた、あれは何がきっかけだったのか。

ただ、青霞が刻銘に憶えているのは。

将としての顔を滅多に見せることのなかった彼が、揺ぎ無い決意を込めて放った最後の言葉。

「戦をするからには、どんなことをしても必ず勝たなければならぬ。何があろうとも、だ。」

——そうでなければ、すべての犠牲が無駄になる……。

あの頃。その意味を理解することのできなかった青霞だったが、今なら少しだけ、わかるような気がした。

\*\*\*

皇后の訪問から数日後。

久し振りに、宋瑛が長春宮を訪れた。

「具合はどうだ？」

皇后が指摘したように、何食わぬ顔で青霞の容態を尋ねる宋瑛に青霞はやはり二人は長年連れ添った夫婦なのだと思わずにはいられない。

どんなに疎遠になったとしてもそこには誰も入り込めない絆があるのだろう。あらためてそれを自覚すると、この後宮にいる己の意味すらも取るに足らないような気がして、青霞の気は重くなる一方だった。

「どうした？やはり、気分がすぐれぬのか？」

「いいえ。一頃よりはだいぶ落ち着きました。」

青霞の答えがただの方便ではない証拠に、以前よりも大分顔色のよい青霞の様子に満足したのか、宋瑛は彼女を連れ立って中の間へ入ると、先日皇后が座した日当たりのよい場所に卓と椅子を用意させ、養心殿から付き従ってきた女官に持たせていた朱塗りに見事な金の蒔絵が施された美しい盆を卓の上に置くよう指示した。

盆の中には上質な紙束と硯箱、そして筆。

これまでこの宮には持ち込んだことのない、おそらく皇帝専用の一式であろうそれを賕の行き届いた女官が優雅な手付きで卓の上に広げる様子を青霞が不思議そうに見ていると、宋瑛は珍しく機嫌よさそうに笑った。

「今日は、天気も良いしな。たまには場所を変えて執筆するのも悪くないであろう？」

青霞の前で書けるということは、それは政務に関するものではないのだろう。

そう察した青霞は、興をそそられ尋ねた。

「一体、何をお書きになっていらっしゃるのですか？」

「『典論』だ。言うなれば、これまでの文学に対する批評のようなものだ。」

漆黒の墨を含ませた筆を慎重に上質の紙の上で滑らせる。

なめらかな筆の動きの後に流麗な文字が綴られてゆく様に、傍らに座した青霞は瞳を輝かせて見入った。

その熱心な視線を感じ、宋瑛はつと手を止めるときまり悪そうに青霞を軽く睨んだ。

「何故、そのように見る。そなたが読んでもさしておもしろいものでもなからう。」

「いいえ……。内容はわたくしにはよくわかりませんが。陛下のお手があまりに見事なものですから、つい。」

それは本音だった。

為政者としてだけではなく、文人としても名高い宋瑛が綴る文字は、世間で名を馳せる書家と比べても遜色ないほど見事なものだった。宋瑛の人となりが表れているような大胆にして緻密なその文字は、一度紙面に描かれるとまるでそれ自体が一つの芸術品のように白い紙の上で揺るがぬ漆黒が華麗にして繊細な流れ踊り、見る者を魅了するのだ。

貴族の娘として書を嗜む青霞であるからこそ、このように美しい筆跡を持つ宋瑛の才に感服し畏敬の念さえ憶えるのだが。実際、貴族出身の娘でもこの時代文字を自在に読み書きできる女性は少なかった。

ゆえに、青霞のその反応はこのほか宋瑛を喜ばせた。

「ふん。そのようなことを言うのは、そなたくらいのものだ……。だが、余が書くのを見るだけで……。飽きはせぬのか？」

突き放すような物言いはしたものの、青霞の反応に内心かなり気を良くした宋瑛は、ほんの少しだけ照れた様子で伶俐な表情を和らげ傍らの寵姫を見やる。

「飽きませぬ。陛下の手は、本当にお綺麗でお見事ですもの。わたくしも、その半分でもよいから上手く書けたら、と思いますわ。」

飾らない青霞の言葉に、今度こそ宋瑛は楽しげに笑った。

「余は、そなたの手がけして下手だとは思わぬがな。まあよい。退屈でないというのなら、しばしそこで見ているがよい。」

「はい。」

そのまま宋瑛が手元に集中してゆくのを、青霞は静かに見守った。

戦場においては武器を握る手とは思えないほど、男にしては細くしなやかな指に収まった細い筆が描く繊細な文字を目で追いながら、青霞はふと思う。

これほどの文才がありながら、その才を存分に活かす場を奪われ皇帝としての執務に忙殺される目の前の貴人が。

もし、国家元首の後継者としてではなく文武両道の貴族として生まれていたなら。

きっと、この人は愛し愛されることを知る幸せな人生を歩んだのだろう。

確かに残忍で猜疑心の強い側面はあるものの、それは身内や家臣に裏切られ疎まれた果ての結果であり、本来の宋瑛自身は人の機微に敏い繊細で優しい性格であることを知っている青霞は、そう思うと彼を取り巻く環境の不遇さに同情せずにはいられなかった。

もつと違う出会いをしていれば。

誰も傷つくことなどなかったかもしれないのに。

穏やかな風にのって、鶯の囀りが優しく響く。

どこからともなくはらりと飛んできた梨の白い花びらが、音もなく二人の間に舞いおりた。

何も知らず、夫と過したあの幸せな春の日の出来事が青霞の脳裏をよぎる。

そういえば、あの義母から贈られ王懿のために見立てた桔梗色の布は、どうしたのだろう。

ぼんやりと懐かしい日々を思いを馳せる青霞の耳に、遠く宋瑛が呟く声がした。

「やはり、そなたの傍らが一番落ち着く。  
．．．．．そなたこそ、余の．．．．．」



## 第四章 闇が広がる 1

「間もなく、戦が始まる。おそらく私も出陣することになる。・・・しばし、邸を空けることになる。」

何の前触れもなく突然切り出された夫の言葉に、雪華は事態を呑み込むのに数瞬の時を要した。

だが、賢明な彼女はすぐに状況を理解する。

・・・愈南との本格的な戦が始まるのだ。

宛紀王である宋瑛が「皇帝」を名乗ることに反発した眞王朝の流れを汲む愈南の王、眞蔡が己こそが正当な「皇帝」であると称してから僅か一年。

仁徳で数々の有力武将を魅了した愈南王・眞蔡は病に倒れ、そのまま鬼籍に入った。

その後を継いだ嫡子の眞禪は、明君とは言い難い暗愚であったため、愈南の施政は宰相である関寧一人の肩にかかっているという現状。その名宰相・関寧の体調が思わしくないとの知らせは、すでに宛紀の知るところであった。

おそらく、関寧は愈南最大の脅威である宛紀をなんとかして自分の存命中に抑えておきたいのであろう。

そんな焦りが、愈南の動きから見て取れた。

きつと、これが愈南との最終決戦になる。

王懿はそう踏んでいる。

雪華には判った。

そのために彼が、着々と隠密裏に準備を進めていたことを彼女は知っている。

「そうですか。・・・・・・御武運を・・・・・・。」

自分が何を言うまでもなく、王懿という男はすべてにおいて傑出した才能と軍師に最も必要である強い猜疑心を持っている。

その用心深い王懿が自ら出陣するのだというのだから、おそらくすべての機は熟したのだろう。

きつと、宛紀は勝つ。そして今度こそ、弱体化した愈南の息の根を止めるだろう。

夫の出陣だというのに、その安否を大して案じていない自分を雪華は内心で晒った。

これが青霞であれば、きつと王懿は出陣する自分よりも残される妻のことを酷く案じたに違いない。

・・・・・・事実、彼が不在の間ものの見事に王懿の最愛の妻だった青霞は皇帝に奪われている。生涯忘れることはないであろう王懿に最大の屈辱と憤怒を与えた忌まわしい出来事・・・・。

郭雪華と王懿の間にあるのは、夫婦という呼ぶにはあまりにも事務的な関係だった。

必要最低限のことは、王懿も雪華に話してくれるし、正妻としての

雪華の立場を尊重し、けして他の女の嘲りを受けないよう、それなりの態度をとってくれる。

だが、それだけだ。

彼が雪華に本心を語ることはけして、ない。

ふと、雪華は先日洛陽城の後宮から送られてきた従妹であり今や皇帝の寵妃として知らぬ者などいない郭貴妃・青霞からの文を思い出した。

文には、女らしい美しく繊細な文字で雪華の結婚を祝福する内容と、雪華の幸せを祈っているということが書かれていた。

彼女の元・夫であり、無理矢理に権力によって引き離された王懿については一言も触れてはいないその文に、雪華は可愛い……。実の妹のように思っていた青霞の複雑な心中と、それでも雪華の幸せを願う、と書いた彼女の優しさと強さに涙を堪えることができなかった。

しかし、青霞が願うように、自分と王懿が真の意味で夫婦になることはあるまい。

——此度は、そなたを正式に娶ることになるが、私の真の正室は青霞一人だけだ。それは、どんなことがあっても変わらぬ。

婚姻前、王懿は雪華に面とむかってそう言いきった。

それでも、後宮という恐ろしい場所にいる青霞を護るためには、郭家との繋がりを断つことはできない。だから、雪華を「正室」として迎えたい。

いっそ、潔いほど簡潔明瞭に王懿は本音を曝した。

美しく、純粹で素直で可愛らしい……。魑魅魍魎が住まうという後宮に入れられても、きっと青霞のその性質は損なわれてはいないのだろう。だからこそ、王懿は今でも世間を欺く婚姻を結んでまでも郭家との繋がりを持とうとするほど彼女に執着する。

同じ郭家の血筋とはいえ、雪華は市井でも有名な男勝りの性格と十人並みな容姿ゆえに、まさか今をときめく権力者・王懿から直々に縁談を持ち込まれるなど夢にも思っていなかった。

だから雪華の両親が、この話を聞かされた時今にも舞い上がりそうなほどの勢いで喜んだのは無理からぬことであった。

勿論、その後は、雪華の意思など入る余地もなく縁談は粛々と進められた。

だが、彼女の両親が案じるほど、雪華はこの婚姻話に反発はしなかった。

これまでは、馬鹿な男の奴隷になるくらいなら出家してやる！と息巻いては数々の縁談をぶち壊してきたというのに。

やはり相手が、宛紀において皇帝に継ぐ実質の最高権力者……。しかも気難しいが女達誰もが目を奪われるほど眉目秀麗の若い公達であれば、さすがの気の強い娘も萎縮するのかと、雪華の両親は娘の奇妙なほど大人しい態度に安堵し納得したのであった。

だが、実際は違う。

聡明な彼女は、憐れな従妹と身分も実績も文句のつけようのない頭

脳明晰な王懿との経緯を知るがゆえに、何故彼がこの縁談を持ち込んだのか十分に理解していたのである。

本当であれば、誰にも嫁ぐことなく・・・たとえ世間から行かず後家と晒われようと、自由気ままに独りで生きることを決めていた雪華であったが、あの儂い華のような従妹が散り急ぐことがないよう自分に少しでも役に立つことができれば、とこの縁談を無言で承諾したのだ。

あとは・・・強いて言うならば、「権力」に一度は屈した王懿がどのような災禍を宛紀王の血脈である宋家にもたらすのかを、間近で見届けたい、という気持ちもあった。

何の罪もない青霞・・・雪華を本当の姉のように「お姉様」と事あるごとに慕ってくれた可愛い妹の幸せを無残に引き裂いた皇帝の行く末を、雪華はどうか不幸であるようにと願わずにはいられないくらいには、この従妹の件に関して憤っていた。

そして、そのことに対して何も出来ない自分自身にも。

王懿は、これまで会った男達の中で比較にならないほど底知れぬ恐ろしさを持った男である。

多少、学を齧ったくらいの雪華では歯が立たないほどの知識を持ち、それを最も効率的にそして非情なまでの手際よさで使いこなすことを知っている。

それだけでも、雪華にとって王懿は「夫」と認めるに十分であるのに、彼は頭脳だけでなくその容姿も噂に違わず秀麗で洗練されており、妻としてその隣に立つのが気がひけるほどであった。

雪華は、自分が女として王懿に惹かれていることを自覚していた。だが同時に、王懿の心には青霞しかないことを知っているがゆえに、深入りしてはならないと必死で自制してもいた。

### 王懿の正室。

それは、貴族の娘であれば誰もが羨む場所。

正室でなくともせめて側室に、という嘆願は今も絶えない。

最初は、むしろ形式だけで個人を束縛はしないという王懿の持ちかけた婚姻を自分にも都合のよいものと納得し受け入れた雪華であったが……。

実際に過ごしてみてもっと解った。

最初から愛されないことが前提の便宜上の「結婚」というのがどれほど虚しいことかということ。

結局、自分もただの女だったのだと嫌でも気づかされた雪華は、そっと溜息をつく。

——わたくしの大切なお姉様。貴女が、王懿様の正室になってくださったってよかった。どうか、わたくしのことなど忘れて、お二人で幸せな家庭を築いてくださいませ。

お姉様の幸せを、心から祈っております。

青霞からの文は、そう締めくくられていた。

彼女の文の中で唯一「王懿」という名が登場した一文だった。

皇帝によって引き裂かれる前。

青霞は、それは夫である王懿を敬愛し慕っていたという。そんなノロケ話を叔父から聞かされ、一見強引で一方的過ぎるように見えた婚姻だったが青霞は幸せなのだ、と安堵したのが随分昔のように思えた。

それほどに愛し愛された夫の新しい妻に、「幸せに」と言わなければならなかった青霞がいじらしく、哀れでならない。

そして、愛されないと判っているながら形式上の夫を心ならずも愛してしまった自分がみじめだった。

王懿は、雪華を正室として扱い、尊重してくれる。お陰で、彼女は誰からも軽んじられることなく宛紀国大將軍・王懿の正妻として認められ敬意を払われていた。

だが、すべては見せかけ。

真実は、けして雪華の手には入らない。

婚姻を結んだことを後悔はしていない。むしろ、表面上だけでも王懿の「正室」と呼ばれることに密やかな喜びさえ感じることもある。だが、それでも拭いきれないこの虚しさをどうすればよいのか雪華には解らなかった。

「だから、女なんて嫌なのよ。どんなに才能があっても、結局は男達の駒でしかない……。次に生まれる時は、絶対に男に生まれるわ……。そこで私は將軍になって馬鹿な男達をうんとこき使ってやるんだから！」

広い庭の一角で、ぼんやりと秋空にたなびく鱗雲を眺めながら、雪華は一人ごちた。



## 第四章 闇が広がる 2

宛紀の中枢である洛陽城。

広大な宮廷の中でもことに歴代皇帝の寝宮として絢爛豪華な佇まいをみせる養心殿に、王懿はいた。

月もすでに西へ傾きかけている夜半。

大抵の官僚たちは、執務を終えとつくに帰宅している時間だった。

王懿とて好んでこのような時間にここに居るわけではない。

普段であれば、皇帝が執務を行う乾清宮で十分に用は足りる。しかし、宋瑛があえてこのような時間に大將軍である自分をわざわざ己の寝宮へ呼び出したことに、いよいよ来るべき時がきたことを王懿は感じていた。

「愈南が動き出した。」

花鳥を描いた落ち着いた雰囲気の屏風の前に据えられた宝座の脇息に片肘を預け、ゆったりと座した宋瑛は、何の前置きもなく王懿に告げた。

愈南の皇帝・眞蔡の死後、丞相である関寧は宛紀を最大の敵とみなし「北伐」と称する軍を起こした。

そのため、宛紀と愈南は幾度か小競り合いのような戦火を交えたが、

先ごろにあった街亭の戦いで愈南が大敗したことにより、しばしの膠着状態にあった。

だが、その間に瀨王を名乗っていた李偉が皇帝を称することを宣言した。

これにより、天下には三人の皇帝が並び立つことになる。

このことは愈南を困惑させた。

何故なら、愈南が宛紀を最大の敵のみなす大義名分が「宛紀は眞の天下を篡奪した」という一点にあったからである。

だからこそ、愈南は「皇帝」を名乗る宛紀を認めない。

正義は、眞王朝最後の皇帝である猷帝からその意を受け、また眞王室所縁の眞蔡が眞王朝を継いだ愈南にこそある。

それが、愈南側の言い分だった。

しかし、瀨王が「皇帝」を称してしまっただけは宛紀のみを敵とする大義名分としてはいささか弱い。

それどころか、その理屈でゆくと必然的にも瀨もまた愈南の敵となろう。

だが、現実問題として同盟国である瀨までも敵にまわす国力は愈南にはない。

それどころか、三国で一番国力の低い愈南は瀨との同盟なくして宛紀と戦うことなど不可能だろう。

だからこそ、愈南は北伐を急いだ。

早期に宛紀との決着をつけ、しかるべきときのために少しでも漕に対する立場を強めておきたいというのが本音だというのが、宋瑛の読みだった。

そして、十中八九その予想は当たっていた。

「関寧に言わせると、余は眞皇帝を殺め帝位を奪った篡奪者だそう  
だ。……献帝は山陽公として気楽な余生を過しているとい  
うことを知っていながら。……それで天下の名軍師とは  
聞いて笑う。」

「篡奪者」、「天下を奪った大罪人」と呼ばれることを覚悟の上で  
献帝に禅譲を迫った宋瑛であるが、皇帝殺害の濡れ衣まで着せられ  
るのはけして本意ではなかった。

まして、それが宛紀に攻め入る口実なるというのだから、「北伐軍」  
の決起そのものが宋瑛にとってまことにおもしろくない事態だった  
のである。

だが、宋瑛は関寧の挑発に乗ることなくじつと機が熟するのを待っ  
た。

国力は三国一とはいえ、宋瑛が即位して間もないうちはまず彼自身  
の政治基盤、そして内政を充実させる必要があった。

それに、うかつに愈南に手を出せば漕が黙ってはいないだろう。

優れた為政者の条件として、機を見定める目と絶妙なバランス感覚

が挙げられる。

宋瑛はそれらを兼ね備えた、若いながらも極めて有能な政治家であり明君だった。

宛紀国がこのように優れた君主を戴くことができたことは、この国にとっては僥倖であろう。

愈南の後継者である眞禪が宋瑛とは比較にもならぬ暗愚であり、その愚鈍ぶりで関寧の足を引っ張っていることを思い浮かべ、王懿は複雑な心中を冷徹な表情の下にそっと隠した。

聡明な君主を掲げることは、臣下としてこれほど恵まれたことはない。

だが、聡明すぎるゆえに見過ごされる傲慢や気紛れに耐えることもまた臣下である身は当然のように要求される。

宋瑛はもとから利発で聡明、優れた感性を持ち文武両道に明るい少年だった。

その宋瑛にあらゆる兵法そして君主としての在り方を教え、導いたのは他ならぬ王懿である。

砂が水を吸い込むように、王懿が注ぎ込む知識を即座に己のものとする宋瑛をあ頃の王懿は誇らしくさえ思っていた。

きっと、自分の教え子は優れた君主となるだろう。そのような主を戴くことのできる自分は恵まれている、とさえ思った。

それも今となっては、そう信じていた己自身を傷つける無残に碎け

散った想いの欠片でしかないが……。

「それでは、この度は大軍を派遣するお覚悟で？」

くだらぬ感傷、と己のものを振り切り王懿は皇帝の真意を確認した。

大なり小なり、戦というものは勝敗に関係なく国力を削ぐ。

それを決断することは、容易なことのように見えて実は大変な重責を負うのだ。

だからこそ、宋瑛は王懿だけを己の私的な空間へ呼び寄せたのだろう。

貴妃をめぐる王懿との確執が二人の間にあることは確かだが、それでも宋瑛は王懿の軍師としての才を高く評価し信頼していた。それに彼の真意がどうであれ、少なくとも今すぐに宛紀が傾くのは王懿にしても望むところではないことを宋瑛は知っている。

だから、宋瑛は「皇帝」として最も適任である彼を国家の存亡がかかった戦の最高責任者に任命することを決断したのだ。

「関寧は焦っているのだろう。奴の命は風前の灯火のようなものと聞く。だからこそ、向こうも全力でくるはず。……この宛紀を滅ぼすためにな。だが、そうはさせぬよ。そのために、待ったのだ。

「……卿に全軍を任せる。見事、関寧の首、この洛陽まで持つて帰ってきてみせよ。」

「……………陛下。……………その命、確かに承りました。」

恭しく宋瑛に拱手し一礼すると、王懿は鋭い眼差しで若き皇帝の秀麗な面を見据えた。

「全軍をお任せいただけるということは、当然、配下の將軍たちも私の好きなように扱ってよろしいということですね？」

まるで確認をとるような王懿の言葉に、宋瑛は一瞬眉を顰めたもののすぐに鷹揚に頷いた。

「当然だ。卿の好きなようにするがよい。」

「では、先陣は趙將軍にきつていただきますしょう。」

意外な人物の名に、宋瑛は微かに瞠目した。

「……………趙高か。」

歴戦の勇将である趙高は今では宛紀朝廷の軍事部門において実質大將軍に次ぐ地位である征西車騎將軍にある。

そのような高位の武將を先陣に出すなど、常識ではありえないことだった。

当然、何の意味もなく用意周到な王懿がそのようなことを言うはずがない。彼の行動の裏には必ずなんらかの伏線が張られていると考

えるのが、王懿を知る人間であれば普通であつた。

だが、宋瑛はそのことに異を唱えることも問い詰めることもなく静かに「好きにするがいい」と言うのみ。

あるいは、宋瑛は趙高の名を持ち出した王懿の意図を見抜いていたのかもしれない。

しかし、全軍を王懿に託すことを宣言した宋瑛に今更彼の意思を覆す理由も権限もなかった。

一切の感情を廃した伶俐な美貌に鬼気迫る微笑みすら浮かべて、対北伐の最高責任者となった王懿は、その後軍略についていくつかの提案を述べると静かに皇帝の前を辞した。

王懿が去った後、宋瑛は高い天井から吊るされた宮灯の金色の絹で出来た房飾りの影が大理石の床に揺らめく様をじっとみつめていた。その冷えた黒瞳には、これから起きるであろう悲劇を予期しながらも止める気もない己を自嘲するような光がチラチラと浮かんで消えてゆく。

趙高は優秀な武将であり、家柄も良い。宛紀の宗家である宋家に敵対した張家の縁者でさえなければ、おそらくもっと早くにその頭角

を現しただろう。

しかし、その実績と才覚のみでも十分なほど趙高は宛紀の華北統一に貢献し、主君である宋家の信頼を勝ち得た。

今や王懿に次ぐ朝廷内での有力者という地位を確保している趙高は、宛紀の全権を把握しようとする王懿にとって最も邪魔な存在であるに違いない。

しかも彼は、皇后・甄婉容の遠い親戚であり彼女にとって唯一にして最大の強力な後ろ盾であり拠り所でもあった。

そう。様々な意味で、趙高という男は王懿にとって「邪魔」な存在なのである。

「季圭は趙高を消すつもりか。まあ、現状を察すれば……  
・当然だろうな。有能な味方は最悪の敵にもなりうる。……だが、  
甄は素直に納得するまいよ。外だけでなく内にも敵を作るか……  
それで、本当に愛する者を守るつもりか？ 季圭……。」

孤独な皇帝の呟きは、誰に聞かれることもなく闇に消えた。

庭園を囲む紫薇が風にざわめく音さえも間近に感じられる静寂。

慣れ親しんだはずの闇と静寂に包まれた孤独を感じる時、最近の宋



瑛は無性に春のような温もりと優しさをもつ青霞を恋しく思うようになっっていた。

最初に彼女を手元に置こうとしたのは、単に自分よりも先に幸せを掴んだ従兄を困らせてやりたいだけだったのに。

まさか自分が、これほど青霞に依存することになるなど夢にも思わ  
ず。

強引に摘み取った花盗人としての咎をいつか自分も受けるのだろうと自嘲しながら。結局、宋瑛は心の欲するままに行動する。

あの柔らかで美しい微笑みを思い出した途端、いてもたってもいられず、まるで悪意の籠る闇から逃れるように「皇帝」という殻を脱ぎ捨て養心殿を後に。

向かう先は、彼の唯一の安寧の場である暖かな長春宮。

……それは、今やほとんど彼の慣習に近い行動様式になりつつあることは皇帝の側近すべてが知るところであったが、肝心のずば抜けて聡明なはずの宋瑛自身が、いまだ己の行動様式に自覚を持っていないのは、彼が大陸全土の情勢を的確に見抜き手を打つ才を存分に発揮している現状を思えば本当に皮肉な事実だと云えよう。

所詮、いかに全能であらねばならぬ「皇帝」であっても、一度その仮面を脱げば、素顔はただ一人を求める「人」であれば……。



番外 紫の記憶く或る女官の独り語りく 前編

長い冬を経て、洛陽の王宮にようやく訪れた春も終わり短い夏もまた過ぎ去ろうとしていました。

都の夏は短い分、大変に豪勢でございます。

長い冬を偲び、強い日差しと晴れ渡った青空を待ち焦がれた花々が一斉に咲き誇るのでございますから、一年を通して楽しめるよう趣向を凝らされた庭園が、庭師の手を借りずとも普段は花になぞ目もくれない者たちの目を奪ってしまうほどの美しさを誇るのも無理はありません。

わたくしが、初めて間近で皇帝陛下の寵を一身に集めておいでになる郭貴妃様を拝見する機会を賜ったのは、夏も終わりに近いそんな季節でした。

わたくしは、この宛紀が都を許昌から洛陽へ移す前……今  
は亡き丞相閣下・宋操様のご健在であらせられた頃より、陛下にお  
仕え申し上げておりました。

その頃は曹宋様の長子・宋昂様もご健在でしたし、御歳のわりに利  
発ながらもまだ幼い子叡様は側室腹の次男でありましたから、わた  
くしのような田舎の一豪族出身の者を気安く傍仕えすることが許さ  
れたのでしよう。

わたくし自身、亡くしたばかりの我が子の面影とあいまって、恐れ  
多くも子叡様を実の子のように愛しく思い、誠心誠意お仕え申し上

げました。その心を哀れに思し召したのか、あまり人と打ち解けぬ性質の子叡様も「芳春、芳春」と事あるごとにわたくしをお呼びになられたものでございます。

今思うと、あまり注目されることのなかった幼い子叡様の手を引いて、許昌の城の中を歩いた頃が懐かしくて仕方ありません。

あの頃はようございました。

側室とはいえ、御生母であられる嘉夫人与父君・宋操様の仲は睦まじく、御二人の結晶であられる子叡様も御両親から格別目をかけられ、少々やんちゃがすぎる弟君ともとても仲の良い御兄弟であられました。

慎ましくも、幸せな日々。

その温かな時間がいつまでも続くのだと信じて疑わなかったのは、わたくしだけだったのでしょうか。

次期後継者である御長子、宋昂様が不慮の事故でお亡くなりになったのを切っ掛けに、子叡様の境遇は坂道を転がるように悪い方向へと一気に向かってゆきました。

それは、一国の君主の後継者となるためには必要な試練だったのかもしれません。政治に疎いわたくしにでも、子叡様を取り巻く環境があまりにも苛酷なことは察しておりました。

御両親との不和。母を同じくする実の弟君との、陛下御自身はけし

て望んでおられぬものの、周囲の取り巻き達による権力闘争が激しくなるにつれ、避けられぬことになってしまった対立。

そして、「唯一」と思われお迎えしたに違いない御方。華北一の美女と名高い正室、甄夫人との不仲と断絶。

子叡様が成人し明君としての素質を垣間見せるようになるにつれ、あの方の置かれる立場はは辛く険しくなる一方でした。

激しい権力闘争の果てに丞相閣下の後継者として宛紀の頂点に立ち、亡き殿の悲願であった皇帝位に就いた頃には、子叡様が本当に心を許せる者は周囲にごく僅かしが残っておりませんでした。

その者たちすらも、「皇帝」という立場が遮り本音を漏らすことを陛下にお許しにはならないのです。

光が強ければ強いほど地に映る影が濃いように。

皇帝になられた陛下のお心は孤独と猜疑の闇に侵食され、ゆつくりと歪んでいったのでございます。

わたくしの大切な子叡様……いえ、陛下がそうしてお心を病まれてゆくのを傍らで見守りながらも、一介の侍女にすぎないわたくしに何ができたでしょう。

陛下の温情で、許昌からこの洛陽でも陛下にお仕えすることを許されただけでなく「皇帝付女官長」という位まで戴いたわたくしにできることは、せめて陛下のお心が晴れるようにと、寝宮である養心殿の内装や庭園、そしてお食事に至るまですべてが陛下の好みに合うように整えることだけでした。

そうして、かつては優しい秋の日差しのような暖かなお心をお持ちだった子叡様は国家という重すぎる荷を守るため、そのお心を氷のように閉ざしたまま時は無情に過ぎ。

わたくしの大切な子叡様は、正式に眞国皇帝から帝位を禪譲され、晴れてこの大陸の唯独りの正当な「皇帝」となれました。

ですが、皇帝になったところで陛下を取り巻く環境は何も変わりはありません。それどころか、一層孤独を募らせることばかり。

皇后になられた甄夫人には養心殿から離れた儲秀宮をお与えになり、ただ一人のお子である宋玲様には滅多にお会いになろうともせず。気紛れに目に留まった後宮の美女と一夜を共にしては、捨て去るということの繰り返し。

裏切られることを恐れ、誰も信じず、誰にも心を開かぬまま重圧のかかる皇帝としての執務に追われ荒む一方の日々を子叡様が淡々とお過しの間、わたくしはせめて陛下のお心をお慰めする御方が現れないものかと秘かに願っております。

学のない女の身ゆえ、わたくしに政の機微など判るはずもありませんが。

古来の例にもれず、皇帝が一人の妃を寵愛することはともすると寵姫の外戚を優遇し王族ひいては宮廷全体を巻き込む権力争いの火種になりうる危険を孕んでいることは存じております。

しかし、陛下はご自身の親族さえも宛紀の権力基盤を揺るがす不穏分子として宮廷から遠ざけてしまうほど厳しい御方ですから。たとえ大切な御方ができたとしても、けしてそのような愚行はなさるまいとの確信がわたくしにはありました。

郭貴妃様が後宮に入られたのはそんな折のことです。

後宮には各地から集められた千人近い美女がおりますが、陛下が御自分から望まれた者はこれまで皇后様唯お一人。

それも陛下がまだ宛紀王の正式な嫡子と認められていない頃の話でありますれば、真に「皇帝陛下」に望まれた御方という意味では、この郭貴妃様が初めてと言えますよう。

郭貴妃様登城の日取り、それについての寝宮の手入れや侍女の手配について御自ら細かに指示を出す陛下は、久しぶりにとっても楽しそうでした。

わたくしも、陛下が初めて自らの御意思で女人を望まれたという話を耳にした時はとても嬉しく思いました。

しかも後宮する前から副皇后である「貴妃」の位を授けられたことから、陛下がその方を相当にお気に召しているのだと容易に推測できましたので、これでもやくお美しい陛下の玉顔から憂いが晴れると単純に喜んだものです。

しかし、この郭貴妃様の境遇、そして後宮入りの経緯を詳しく知るにつれてわたくしは肝が冷える思いを致しました。

なんと陛下が迎えようとしている御方は、許昌時代から陛下を支え続けてきた重臣、王懿殿の正室だということではありませんか。

しかも、郭貴妃様自身、大変な名門のご出身とのこと。王家もまた眞王朝が健在の頃からの長く続く名家でありこの宛紀においても一、二を争う有力貴族でありますれば。その家長でもある王懿様の愛妻

を奪うなどそれこそ政權を揺るがす大慘事になりかねないのではないかと、わたくしはあまりの恐ろしさに陛下のために用意した膳を持つ手が震えるのを止めることができませんでした。

しかし帝位に就いてから内政を充実させ政權を堅固なものにすべく奮闘された陛下の努力の賜物か、まだ南方に愈南、瀟という不安要素を抱えているためか、宛紀の実質の宰相でもある聡明な王懿様はことさら陛下への怨恨をあからさまにし、騒ぎ立てるような態度はお取りになりませんでした。

ですが、常に冷たく凍りついた秀麗なお顔の内で、これまでの王懿様の献身に仇で報いるような陛下のこの度の仕打ちをどのように受け止めておられるのか。

陛下が普段、重鎮との謁見を行う乾清宮でかの御方のお姿を拝見する度に、わたくしは不吉な予感を覚えずにはいられませんでした。



番外 紫の記憶く或る女官の独り語りく 後編

下手をすると「傾国の美女」になりかねぬ、と噂好きな宮廷人や後宮の女たちに揶揄された郭貴妃様が参内してもうすぐ一年が経とうとしております。

その間、陛下の貴妃様へのご寵愛は誰もが予想したように冷める、ということはありませんでした。

それどころか、貴妃様は後宮にお入りになってすぐに御懷妊あそばされ、そのことを大いに喜んだ陛下は一層貴妃様への寵愛を深くされるばかり。

そこにはもはや、どんな女も……皇后様ですら入る余地はないように見受けられました。

内廷に近い養心殿を外部からの好奇の視線から遮るように宮を取り囲むように植えられた紫薇が薄紫の見事な花を咲かせた頃。

よく晴れた夏の終わりの空の蒼が美しい朝。珍しく陛下は貴妃様をこの養心殿へお呼び寄せになられました。

普段であれば、陛下が貴妃様の住まう長春宮を訪れそこで御二人の時間を楽しむのが常でありましたが、その年の養心殿の庭は殊更美しく花々が咲いたので、それを貴妃様にも見せたいと陛下は思し召したのでございます。

後宮の最奥には、御花園という広大な庭園がありその壮麗さと絢爛さに比べればどの宮の庭も見劣りはしましょう。

しかし、陛下の嗜好と趣味の良さが細部まで行き届いた養心殿の庭園は、御花園とは違った静謐さと高貴さが漂う、それは見事なものでした。

水仙、薔薇、石楠花、百合、桔梗、そして遅咲きの牡丹。夏から秋にかけての花々が一斉に咲き乱れ、龍の背を模った橋が掛かる池に白い蓮が慎ましくたゆたう様は、まさしく蓬萊とはかくあらんという美しさ。

この絶景を愛しい御方に見せたいと陛下が思うのも無理はないと素直に頷けるほど、その庭は鮮やかでした。

やがて侍女の先触れについて、貴妃様が養心殿へお越しになりました。

その日の貴妃様は濃い桃色の衣に透ける白の薄衣を重ねてお召しになっておられ、遠目から見るとまるで桃花の精のようなお美しさであられました。

いえ、白い重ねで薄くなった淡い色合いはむしろ桃というより桜でしうか。

御懷妊され七ヶ月も過ぎるとさすがに柳腰の貴妃様のお腹もふっくらとしておりましたが、その膨らみは少しも貴妃様の可憐さを損なうものではございませんでした。むしろ、愛しそうに・・・おそらく無意識にでしょうが腹に添えられた華奢なお手がゆつくりと子を宥める様にさすられる御様子が、また不思議なことに無性に見る者の庇護欲を掻き立てるのでございます。

陛下もそう思われたのでしょうか。

貴妃様から淡く漂う甘く清楚な芳香に惹かれるように貴妃様の白い手を取ると、その全身に視線を走らせ満足したようにおっしゃったのでございます。

「まるで、桜花のような衣だな。咲遅れの桜か。」

「お気に召しませんか？ 季節外れの桜は。」

陛下がけして気分を害さぬことを確信しておられたのでしょうか。貴妃様は悪戯っぽく微笑みながらそう問うたのでした。わたくしは、このとき初めて貴妃様のお声を耳にいたしました。その声は桜の精の姿に違わぬまるで鈴を転がしたように涼やかで可愛らしいものでした。

宛紀人は概して色の薄くどこか儂げな桜よりも、はつきりとした薄紅の桃花を好みます。

けれども、儂い美を好む陛下は昔から自己主張の強い桃花よりも淡く静かに咲く桜花を愛でておりました。

ですから、桜の花のような貴妃様のお姿を気に入らぬはずがございません。

「いや……確かに季節外れではあるが。それより、腹の子はどうだ？」

「はい。恙無く……。」

貴妃様とそのお腹の御子を氣遣われる陛下に、慎ましい微笑みを浮かべながら答えるお二人の御様子はわたくしが夢にまで見た「幸せな家庭」そのものでした。

貴妃様が後宮にいらしてもう少しで一年。

他の女たちのように、すぐに飽きてしまうのではないかというわたくしの懸念など杞憂だと笑い飛ばすかのように、陛下の貴妃様へのご執心は深まる一方でございます。

日々高まってゆく、後宮に取り残された哀れな愛妾たちの嘆きと怨嗟の声は何よりもの証拠。

それにしても、こうして間近に見る郭貴妃様はなんとも不思議なお美しさを湛えた御方にございました。

滅多に長春宮からお出にならぬ御方でございますが、折々の催しには貴妃という立場上出席しないわけにもゆかず、時折遠目からそのお姿を拝見することはありましたが、お声が聴こえるほどのお傍近くを許されたのは初めてでございましたので、長年の好奇に耐えられずつい身の程をわきまえず貴妃様の御様子をまじまじと見てしまいうわたくしを、陛下は螺鈿細工の施された脇息にもたれ穏やかなお顔で笑って御覧になっておられました。

陛下はきつと、この年寄りの下世話な老婆心を以前から察しておられたでしょう。

そんな陛下を不思議そうに見つめながら、貴妃様はお可愛らしく小

首を傾げていらっしやいました。

勿論、この年寄りの視線に気づかぬはずはございませんが、それに気分を害した風もなく優しく微笑む様は本当に桜の精のように可憐で儚げで麗しゅうございました。

陛下のお心を捉えて放さぬ御方でございますれば、さぞかし華やかな美女であろうと想像しておりましたが、実際の貴妃様は妖艶華美というよりも、清楚で儚く名状し難い幽玄さを漂わせる御方にございました。

そしてなにより驚いたのは、その若さ。

正直に申しましょう。

王懿様の御正室だと聞いた時より、わたくしは勝手に貴妃様のことを陛下と同じくらいか下手をするやや年上の御方だと思っておりました。

あの、怜悧で気難しい王懿様の御正室にと望まれた方であれば、さぞかししっかりとした方なのだろうと自然に想像してしまうのが道理。

しかも、王懿様は陛下よりも年上。奇しくも甄皇后様と同じ歳であれば。

ですが、実際に目にした貴妃様はいまだ少女と表してもおかしくないほどのお若さでありました。

皇后に次ぐ「貴妃」という位を賜り、陛下の寵愛を一身に集めておられてもいまだ後宮になじむこともできず、どこか頼りなげに佇む姿は、陛下でなくとも思わず「この方を御守りせねば」という使命

感を抱かせてしまう不思議な御方。  
今をときめく陛下の寵姫であれば、もっと驕慢で派手な振る舞いをしてもおかしくはないというのに。

これが他の女であれば、きっとそうでしたでしょう。

身分低い市井の妓女から、一気に「淑妃」にまで上り詰めた潘淑妃のように。たった一夜の共寝で陛下の寵を永遠に勝ち取ったように振舞った数々の女たちのように。

口には出さずとも、陛下が内心で権力に媚びる女たちの態度に辟易していたのはわたくしも存じておりました。

だからこそ、この郭貴妃様の物馴れぬ慎ましい振る舞いが陛下の目に好ましく映ったのは想像に難くありません。

かくいうわたくしも、こうして貴妃様のお近くに居ること許されそのお声、仕草を目の当たりにすると何故だかあつかましくも御守りし支えて差し上げたいという気になってしまふのです。

それは、陛下の大切な方だからといだけではありません。

大きな声では言えませんが、こうして儂げな風情の貴妃様を見るにつけ、陛下の寵愛を受けることがこの方にとって決して幸せなことではないことが判ってしまうからなのでしょう。

花の中の花。百花の王である大輪の緋牡丹のよう華麗な美しさを誇る皇后様。

女王としてこの後宮に君臨するにふさわしい強さを持たれた甄后様と違い、白に仄かな薄紅をのせた桜の化身のような郭貴妃様は、後宮という絢爛豪華で空虚な場所に閉じ込められ花園の中の一輪として皇帝陛下の寵を受けるよりも、普通の家庭の、たった一人の方の妻として誰かに愛され大切にされるのがふさわしいような気がするのです。

そうは言っても、貴妃様が今や陛下の心の拠り所となっているのは変え難い事実。

わたくしの大切な陛下がようやく見つけた愛すべき御方が、ここで幸せを見出しかつて王懿様のもとでお暮らしになっていた頃のような心の平穏を一日も早く取り戻されることを祈るしかありません。

庭園にお出になられたお二人は、仲睦まじく色とりどりの花を堪能しておられるようでした。

わたくしは微笑ましい気持ちで、中のお茶の支度をしながら透かしの入った欄干越しにそんなお二人を眺めておりました。

小石に足をとられ転ばぬようしつかりと貴妃様の御手をとった陛下に導かれるまま、養心殿の庭をゆっくりと歩いていた貴妃様がふと紫薇花の垣根の向こうに視線を飛ばし、しばしそちらを凝視されたことにわたくしが気づいたのはほんの偶然でした。

御懷妊中の貴妃様が転んだり躓いたりされることを恐れ、ことさら足元に注意を払いながら彼の方の手を引く陛下は幸いなことにお気づきにはなりません。

貴妃様もまた、すぐに視線を近くの白百合に移されたので何事もなかったように御二人は散策を続けました。

ですが、わたくしは見てしまいました。

紫薇花の向こう、内廷へ続く回廊に誰かが立って御二人……いえ、貴妃様をじっと見つめていたことに。

それはほんの一瞬のことでしたので、紫薇の向こうにいらっしゃる方を判別するには到りませんでした。

紫薇花の影に消えた花よりも濃い紫色の影は、いつまでもわたくしの脳裏から離れないのでございます。

その夜、貴妃様は陛下に請われるまま養心殿にお泊りになりました。

豪華な刺繍の入った帷帳の奥、絹の褥の上で陛下に抱かれながら貴妃様は何を思っておいでなのでしょう。

貴妃様のお心はいまだに陛下のもとにはなく。

聡明な陛下はそのことを御存知でありながら、貴妃様を愛しむことをやめることができずお苦しみになっておられる。

なんということでしょう。

これを因果応報と笑う者もいるのかもしれませんが。

このことを知ったならば、きっと陛下を実の兄のように陰日なたとなり支え導いてきた王懿様は嘲われることでしょう。

ですが、望まぬ運命に翻弄され孤独を強いられているのは陛下とて同じ。

確かに陛下のなされたことは褒められたことはありませんが。

陛下の孤独と、繊細でお優しい本当のお姿を知るわたくしは、他の者が当たり前のように享受するささやかな「幸せ」を陛下にも感じ



てほしかったのでございます。

どうか年寄りの愚かな戯言と笑ってくださいませ。

わたくしは、子叡様を今でも実の子のように愛しく思っております。ですからわたくしの大切な子叡様のためにも、わたくしは貴妃様が一日も早く御夫君でいらっしゃった王懿様をお忘れになり、陛下のみを頼にされる日が来ることを願ってやまないのです。

あと三月もすれば、お二人の御子をご誕生するでしょう。子が生まれれば女は変わるもの。しかも、王懿様は先日、正式に新たな御正室をお迎えになったと聞きます。

貴妃様とて、そのことをお知りになり御子をもてば、きっと子供可愛さともはや頼れるのは陛下のみという現実を受け入れ、陛下にお心をお移しになるに違いありません。

夏の終わりの豪奢な庭に立つ、どんな絵画もかなわぬほど美しく洗練された似合いのつがいのようなお二人。

あの御二方が真の夫婦として一日も早く暖かな家庭を築いてほしいというのは、この宮廷においては無理な願いなのでしょうか？

ああ。

夜の闇に、紫薇花の香りが殊更強く漂ってきました。

貴妃様は昼間の庭園で、紫薇の垣根越しにあの紫色の影を御覧になったのでしょうか。

どうか、高雅な伽羅の漂う褥で、陛下に似た面差し、あの方を重ねないでくださいませ。

わたくしの、可哀想な子叡様をこれ以上傷つけないでくださいませ。

星が瞬く天に、わたくしが思わずそう祈ってしまったのは、何故なのでしょう。

再びもたげる正体のない不安を慌てて振り払うと、わたくしはせめて今夜だけでも陛下と貴妃様の眠りが安らかであるようお願いながら、釣宮灯の火をそっと吹き消したのでした。

## 第四章 闇が広がる 3

後宮の最奥、皇后の寝宮・儲秀宮。

緋牡丹のように華やかな美貌の主にふさわしく豪奢で洗練された宮に、その日珍しい客が訪れていた。

皇后との古くからの知己であり唯一の有力な遠戚、また宛紀に対する長年の貢献とその身分ゆえに後宮に踏み入ることを許された数少ない男。

趙車騎將軍。字は文淵。王懿に次ぐ宮廷における有力者であり、詩歌音曲を愛する宮廷きつての風流人であった。

趙高は、もともとは現皇帝の父・宋操の最大の政敵であった張家に仕える武將だった。

彼自身名のある家の出身であったが、その当主である張紹の無駄に高い矜持と家名だけにすぎる無能さに嫌気を憶え、官渡の戦いの折に宋家に帰順したという複雑な経緯の持ち主でもある。

敵方から投降した武將が、新たな主のもとでここまで栄華を極めるまでには相当の苦勞があっただろう。

しかし、この黙って立っていれば風流を好む典雅な貴族の青年にしか見えない趙高の毒のない優雅な立ち居振る舞い、そして場の空気を読まない気楽すぎると思える言動で人を惑わすその態度からは、とても辛酸を舐めた苦勞人の面影は見られない。

だが、少なくとも張家に嫁ぎその美貌ゆえに宋瑛に見初められ心ならずも宋家の人間となった皇后にとって、立場は違えど余所者が新たな勢力の中で自分の居場所を確立することがどれほど大変なことか……彼の立場をよく解っていた。

だからこそ、甄后は趙高に単なる遠戚というだけでなく、同じような苦勞を知る者としての特別な親近感があった。

そして、宋瑛の寵愛が遠のくにつれて後宮で孤立してゆく彼女を氣遣い何かと慰めてくれた趙高は、今となっては息子のこともあり甄后にとってなくてはならない唯一の心の支えでもあった。

「戦？趙將軍がわざわざ出向くなんて……。」

久しぶりに皇后のもとを訪れた趙高は、彼女に愈南の北伐に対抗するための大軍団を率いることになったという決定事項を淡々と告げた。

「王懿殿の直接の御指名なのですよ。大將軍自ら請われては、断るわけにはいききますまい。」

まあ、戦場はおそらく祇山の辺りでしょうからそれほど大きな戦場にはならないでしょう。……ただ、秋の長雨で戦が長引くことはあるかもしれませんが。

そんなことを、まるで世間話をするような軽い雰囲気でも明るく言うてのける趙高に、皇后は言い知れぬ不安をおぼえた。

「王大將軍直々の指名なんて。・・・その程度の戦であれば、車騎將軍である貴方がでることもないでしょうに。よほど、軍師殿は御自分の策に自信がないようですね。」

甄皇后は内心の不安を必死に隠し、朱を塗った鮮やかな緋色の唇で弧を描くと、王懿の不手際とは思えないやりようを皮肉った。

これでは、弱体化した愈南を大国である宛紀がいかに怖れているようではないか、と。

そんな彼女の言葉に、趙高はとりなすようにやんわりと返した。

「まあまあ。そんな言い方をしては、王懿殿がお気の毒というものですよ。あの方は用心深く何事にも万全を尽くす方ですから。相手が天下の関寧ともなれば、まして気を抜けないでしょう。私としては、それだけあの皮肉屋の軍師殿から信頼されていると思うと、嬉しい限りなのですが。」

「何を暢気な！そのような甘い考えが通用する方ですか？！」

思わず声を荒げた甄后は、すぐに我に返ると気分を落ち着かせるために卓の上に置かれた青磁の茶器を手にとった。

芳しい緑茶の香りが、ほんの少しだけささくれ立った皇后の心を和ませる。

本来であれば、趙高ほどの武人が出向くまでもない戦にわざわざ王懿が彼を指名した、という事実が彼女を苛んでいた。

皇后は、この後宮で皇帝の愛を独占している女——かつて王懿の正妻であった郭貴妃——が宋瑛の目に留まった詳しい経緯を知らない。

だが、そのことを知らずとも王懿が趙高を疎ましく思う要素は他にもあった。

現在の宛紀朝廷における第一の臣下——最有力な権力者として人に聞けば、ほぼ間違いなく誰もがまず王懿の名を挙げるだろう。

宋瑛は、身内同士の後継者争いでその醜悪さに心底うんざりしたのか、後継者争いに絡むことができそうな親族を血縁外戚問わずことごとく権力の中枢から放逐した。

その結果、宋一族とは直接の縁のない王懿（王懿は母方の従兄弟にあたるが外戚としてはまったく力がないため論外）や趙高の頭角を許すことになったのはまことに皮肉なことだと甄后は思う。

そう。

宛紀における有力者として王懿と並び立つことができるのは今のところ、武勇もさることながら出自も教養も遜色なく、いざとなれば政さえも卒なくこなす趙高だけであり、いずれ二人が権力闘争を繰り広げるのではないかというのが、宮廷官吏たちの間でひそかに囁かれている噂であった。

しかも、皇帝の寵を失い、皇后という身分にはあるものの有力な後ろ盾のない甄后にとって、趙高は我が子を守るための最後の砦でもあった。

これまで、周囲に何と云われようとも彼女が毅然と前を向いて孤高を保っていたのは、表でも裏でも彼女を支えていた趙高という変えがたい存在があったからこそ。

もし、王懿の思惑通り趙高が何らかの罠にかかって失脚し、あまつさえ貴妃が身籠っている子が男子であれば……。

甄后の息子・宋玲が次期後継者として立太される道は完全に閉ざされるだろう。

その時の我が子に対する宋瑛の処遇を考えると、甄后は平静ではない。

そんな彼女の心情を察したように、趙高は彫りの深い端整な顔に穏やかな表情を浮かべ静かに言った。

「大丈夫ですよ。これまで、私がどれだけの修羅場をくぐってきたとお思いですか？今回だって、きっと大丈夫。必ず、ここへ戻ってきますから。」

私は運が良い男なのですよ。

殊更明るく言っただけのける趙高の声に、甄后は「傾国」と謳われた美貌をゆるゆると上げる。

そして、卓の上に置かれた武人とは思えぬ男の白い手に己の白魚のような手を重ねるとひたとその瞳を見つめた。

「きっと、ですわ。きっと、帰ってきてくださいませ。妾はその日まできっと、安心して眠ることはないでしょう。」

「それは大変ですね。美しい皇后様の顔に寝不足で隈ができるなど、考えるだけで耐えられません。」

戦に出ることを告げた時よりも、よほど重大事のように深刻な顔をする趙高に、甄后はようやく口元を綻ばせた。

「ああ、やはり貴女はそうやって笑っているほうがいい。美しい人は、泣いていても美しいですがやはり笑っている時が一番輝いていますよ。どうか、眠れないなどと云わず私を信じて笑っていてください。」

それは無理な注文だろう。

互いに解ってはいいても、趙高の気持ちを汲んで皇后は黙って頷いた。

儲秀宮を去り際、趙高は見送ろうと彼に寄り添った甄后にそつと囁いた。

「ずっと、貴女のことを見てきました。忘れないでください。どんなことがあるうとも、私は貴女の味方ですから。」

想い丈を込めた告白に、返す言葉を持たない自分をこの時ほど甄后は恨めしいと思ったことはない。

だが、男は何も云えず立ち尽くす女に優しく微笑みかけるとそのままゆっくりと彼女から遠ざかってゆく。



その場に縫い付けられたように動けぬまま、甄后は回廊の向こう、次第に小さくなってゆく趙高の後姿をいつまでも見守り続けた。

再び、会えることを信じて。

だが皮肉なことに、この短い逢瀬が彼らの最後となる。

長年の盟友であり男女の情愛を越えた強い結びつきで繋がっていた、皇后にとって最も信頼できる人物・趙高との終りの瞬間は、本人がそうと知ることとも許されずいともあっけなく彼女の指から零れ落ちていったのだった。

## 第四章 闇が広がる 4

それは、ほんの偶然だった。

通りがかった回廊から、昭徳宮の庭が見えた。

他の殿舎よりも、背の高い樹木が美しく色付いている中を、はらはら舞い落ちる葉を楽しむように満ち足りた表情でゆったりと歩む女が一人。

女は大きな腹を抱え、無防備に、唯一人で、紅葉と戯れていた。

その幸せそうな穏やかな表情が否応無しに脳裏に焼き付けられた瞬間、彼女は――。

＊＊

「何だか外が騒がしいようだけど、どうしたの？」

慌しく、絹で覆われた盆を両手で捧げ持ったまま続きの間を急ぎ通り抜けようとした月梅を、中の間で庭を眺めていた青霞がやんわりと呼び止めた。

抜けるような蒼い空に映える燃えるような彩の草木がその終焉を暗示するように日々色褪せてゆく様を、寂しい、と思いながらいつものようにいつもの場所で過していたはずの青霞は己が住まいである長春宮が朝から不穏な空気に包まれていることを敏感に悟っていた。選りすぐりであるはずの侍女たち誰もが、どうにも落ち着かぬ空気を纏っているのである。神経を尖らせる・・・と言ってもいいだろう。

それでいて、宮の主たる青霞をまるで腫れ物に触るように彼女が抱く疑問ごと曖昧な微笑みと無言で何処かへと追い遣ろうとしている。まるで自分だけ除け者にされたような、おもしろくなさと疎外感に耐え切れず青霞はむくれた様子で侍女頭である月梅に声をかけた。

「まあ、貴妃様・・・。」

大人しい貴妃の、滅多にみせないまるでいとけない幼女のような拗ねた仕草と声音に、月梅は思わず目を細めた。

しかし、次の瞬間にはすぐに優秀な侍女頭としての仮面を取り戻すと傍らの卓に盆を載せ、神妙な表情で青霞の方へ向き直った。

少しだけ、言うか言うまいか逡巡を見せていた彼女は、それでも主に忠実であるが故に結局口を開く。

「実は、朱淑妃様が・・・。」

「淑妃様がどうかなさったの？」

不吉な予感に、思わず紫檀の肘掛を握る指に力を込めて、青霞はその先を促した。

「昨日、昭徳宮の庭にて散策途中、石段で足を滑らせて……」

沈痛な面持ちで顔を伏せた月梅の様子から、最悪の状況を読み取った青霞は声を震わせた。

「……それで朱淑妃様は、今……？」

「一昼夜、侍医が手を尽くしたそうですが御腹の御子は、残念ながら……淑妃様もいまだ意識が戻らず、床に伏したままです。」

実際は病状は思わしくなく今夜が峠とも云われている……その事実を伝えることを月梅はあえて避けた。

「……そんな……どうしてそんなことに……」

顔から血の気が引いてゆくを感じながら青霞は力なく椅子に凭れた。

もたらされた暗い話題など知らぬ気に、涼やかな風が貴妃の山吹色

の重ねの衣を揺らす。

——朱淑妃とは先日対面したばかりだった。

青霞が後宮入りした当初から、ずっと体調優れぬ状態が続いていた朱淑妃は、後宮で催される宴や催しに一度も参加することもなく。（後にこの体調不良は懷妊が為であったことが判明するのだが）故に必然的に青霞と一度も顔を合わせることなく時が過ぎていた。

だが、貴妃である青霞の正式な懷妊・経過の良好を経て、時を見計らっていた朱淑妃は自らも臨月であるというにもかかわらず、わざわざ貴妃のご機嫌伺いに長春宮まで足を運んだのだった。

皇后や潘淑妃、その他の後宮の美女に比べると「大人しい」という印象しかない年長の女性性。

年下のしかも自身と同じ男の子を孕んでいる少女に向かい、穏やかな微笑みを浮かべなんの抵抗もなく少女の前で膝を折った。

「このような見苦しい姿で申し訳ございません。貴妃様におかれましては、この度の御慶事、心よりお祝いを申し上げます。」

膨らんだ腹を気にした様子もなく跪き滔々と祝辞を述べるその行動に瞠目し、慌ててとりなそうとする青霞。

「まあ、淑妃様。どうか、ご無理はなさらないで……。」

身体を労わる意味といまや後宮の女たちの一番の目障りな存在となった自分へ謙ることへの苦痛を慮っての言葉だった。

しかし、朱淑妃は苦笑しながらやんわりとそれを否定した。

「いけませんわ、貴妃様。目下の者が目上の方への礼儀を欠いてしまつては、この後宮はどれだけ乱れてしまうことか……。本当はもつと早くにこうして貴妃様にお目通りしなくてはならぬ身でしたのに。体調を理由にこの機会を先延ばしにしていた自分を恥じております。」

どうぞ好きなだけ叱責してください……。と言わんばかりに、貴妃と同じ卓につくことをよしとせず傍らに膝を着き頭を垂れた女性の姿に、青霞こそ何も知らぬ己を恥じた。

この後宮は、皇帝の寵姫の寄せ集めではない。

皇帝の血を残す場としての務めがあり、その務めを確実に果たすために様々な仕組みが確立されていた。

その最たるものが皇后を頂点とする女官の階級と上位に対する絶対服従の規律であろう。

様々な規範を遵守し、ともすれば乱れやすい後宮という特殊な場所をそれなりに統率するためには、上位の者はけして下位の者に侮られてはならない。

だからこそ皇后・甄婉容は、多くの女達から恨みをかうことを承知で、規律を破った女たちを容赦なく罰してきた。あからさまに彼女を侮蔑した者には、二度とそんな口がきけないよう辱めを与えた。それこそがまさに、後宮を統括する「皇后」の役割でありまたその補佐である「貴妃」の義務でもあり甄婉容が皇帝の寵を失ってもなお確固たる皇后である所以だった。

皇帝に仕える高位の女官は、ただ皇帝の寵を受けていればよいわけではない。情に訴えてなすがままに周囲を甘やかせば取り返しのつかぬことになる。

そのことを、朱淑妃は遠回しに青霞に示唆したのだ。

けして飛びぬけた美女というわけではない。だが、知的で物静かなこの朱淑妃という女性は何故か青霞に随分と好意的に接してくれていたように思う。

青霞は、同じ男の子を近い時期——もっとも、彼女に皇帝が触れたのは青霞が入内する前なのだが——に身籠った年上の女性に対し、ひどく複雑な思いを抱いていたが、彼女の控えめであるがまるで自分を案じてくれる姉のような態度は青霞が彼女を好きになる理由には十分すぎた。

大きな腹を抱えた朱淑妃は、しばらく貴妃と歓談した後、長春宮を辞する際そっと漏らした。

「貴妃様、私、このような事態になって貴妃様には本当に申し訳なく思っていますのよ。……でも、このままこの場所で朽ちてゆくだけだと諦めていた我が身に玉が宿ったこと。それだけで、私の人生に意味があったと……本当に嬉しくて、幸せで……」  
けして、陛下や貴妃様の目障りになるようなことは致しません。お約束しますわ。ですから、どうか憐れと思って私とこの子をお見逃しくださいませ……」

自分は決して敵ではない。そのことを伝えたいがために、よくはな

い体調をして青霞の元へ参じたのだろう。

下級貴族の出身であり有力な後ろ盾のない朱淑妃にとって、同い年の子を身籠った皇帝の寵愛を一身に受ける貴妃の恫気が一番恐ろしかったのだろう。

こんな年下の小娘にそこまで気を遣わねばならぬ朱淑妃が、青霞は哀れたっだ。

そして、彼女の、自尊心さえも自身で投げ捨てられる覚悟。その腹の子に注ぐ愛情の苛烈さは。

同じ母親になる女だというのに、何一つ心の準備のできていない青霞にとって、朱淑妃の有り様は少なからず衝撃だった。

淑妃の不幸を知らされたその夜遅く、皇帝が長春宮を訪れた。

朱淑妃のことが気になり眠ることが出来なかった貴妃は、夜着のまま蒼白い顔で彼を迎えることとなる。

気鬱で晴れない表情ながらも、嫌な想像を否定する寵妃の無事な姿に心なしか安堵の色を浮かべ、宋瑛はそっと華奢な手をとった。

「昭徳宮でのこと、すでにそなたの耳にも入ったであろう。あのようなこと、容易にあってはならぬ。そなたは、けして一人で出歩くな。よいな？」



鋭く整ったその玉顔は、真剣だった。

愈南との再戦が始まり、便乗するように慌しい動きをみせる瀨を抑えながら内政にあって一つの大きな改革を實行しようとしている今、それを牽引する皇帝には寝る間もないのが現状。

その激務を縫って自分を案じてくれた皇帝の優しさに、青霞の心は揺れた。

嬉しい。

素直にそう思った。

同時に、得体の知れぬ罪悪感もまた。

最高権力者の傍らにあり、その力でぬくぬくと守られている自分よりも今だけは死の縁にいる淑妃の元へ行って欲しい……。

そう願う心もまた確かに青霞の真実であつた。

しかし、連日の激務の疲労を隠せない皇帝の青褪めた美貌を目にすると、そんな願いを持つことさえもとんでもない慢心であるような気がして結局は何も言えぬまま、抱き締める腕に身を任せてしまうのだった。

青霞が皇帝の腕で束の間の微睡みを甘受していた夜更け。

薄幸の女が一人、後宮の片隅で息を引き取った。

掛け替えない我が子の喪失を嘆くことすら許されず、長年仕えた男の声を夢にさえも見ることの適わぬままの、儚い人生であった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3957r/>

---

長春宮夜想奇譚

2011年7月14日01時16分発行